





機動戦士ガンダム
ガンダム最強伝説

THE LEGEND OF
MOBILE SUIT GUNDAM
U.C.0079-0153

MEGALOMANIA 編著

竹書房



最強の代名詞として開発され続ける

「ガンダム」の名を冠したモビルスーツたち

一年戦争も後半に差し掛かった宇宙世紀(U.C.)0079.09.18、地球圏の片隅のスペース・コロニー、サイド7において恐るべき兵器が初陣を迎えた。

RX-78 ガンダム。それが、その兵器の名前であった。

いうまでもないが、ガンダムはモビルスーツ(MS)に区分される兵器である。

MSは元来、地球連邦に独立戦争を仕掛けたスペース・コロニー国家ジオン公国が開発した兵器である。レーダーの無力化や精密電子機器の誤作動誘発といった効果を持つミノフスキー粒子に対応したMSは、地球連邦軍を圧倒するほどの力を発揮した。MSを実用化していなかった地球連邦軍には、ジオン公国軍のMSに対抗する術がなかったのだ。

この新兵器の必要性を痛感した地球連邦軍も、一年戦争中期にいくつかの実戦用MSを完成させた。その中のひとつこそが、白兵戦用MSとして開発されたガンダムであった。

MSに関しては後発の組織であった地球連邦軍がようやく実用化したガンダムは、ジオン公国軍のMSに対抗可能な設計が施されていたが、主力MS開発やMSの運用法を確立するための試作機に過ぎなかった。否、試作機に過ぎない「はず」だった。

実戦に投入されたガンダムは、ジオン公国軍の主力MSだったMS・06ザクⅡを鎧袖一触に葬り去る戦鬪力を発揮した。さらに、水中などの特殊環境でもジオン公国軍の局地戦用兵器を撃破しただけでなく、圧倒的な数で攻める敵部隊や歴戦のトップエースをも退けるなど、全領域でその性能の高さを見せ付けたのだった。

こうして、白を基調とした機体色から「白いヤツ」と渾名されたガンダムは、ジオン公国軍将兵だけでなく、味方の地球連邦軍からも特別視される対象となった。

ガンダム活躍の裏には、「最高のニュータイプ」と賞されるパイロット、アムロ・レイの存在が大きい。実際はアムロ機以外の「ガンダム」も数多く投入されていたのだが、アムロ機の絶大な戦果がクロースアップされた結果、「最強」「ハイエンドMS」としてのガンダムのネームバリューが、軍民を問わず向上していった。

「ガンダム」という名前のひとり歩きがはじまったのだ。

ガンダムの名が単なるMSの名称でなくなったことは、一年戦争後に行われた新型MS開発計画——RX・78GP01ガンダム試作1号機などを生み出した「ガンダム開発計画」、MSZ・006Zガンダムなどを完成させた「Z計画」、ガンダムF91らが開発された「フォーミュラ計画」など——を見るだけでも明らかであろう。「V計画」に至っては一年戦争から70年も経過しており、RX・78ガンダムからの技術系譜上の繋がりは希薄になっているにも拘らず、LM312V04ヴィクトリー・ガンダムに代表される

ガンダム・タイプMSが開発されている。

これら一年戦争後に開発されたガンダム・タイプMSのほとんどに、RX・78の外見的特徴である白のカラーリングや、双眼式カメラアイに見られる擬人化、額のV字アンテナなどが採用されている。結果、RX・78と後発のガンダム・タイプは、素人には見分けがつかないほど似た外見を持つことになった。

つまり、RX・78ガンダムが白兵戦用MSの開発という軍事的理由にのみ立脚した機体であったのに対して、一年戦争後に出現したガンダム・タイプMSは、程度の差こそあれ「ガンダム」としてのネームバリューを求めたMSだったといえよう。身も蓋もないいい方をするなら、「RX・78ガンダムにあやかったMS」だったのだ。これが一年戦争時のRX・78直系機、特にアムロ・レイのRX・78・2と、以降のガンダム・タイプMSの決定的な相違点である。

ただし、ガンダムを名乗るからには相応の資格が必要になる。

その資格とは、RX・78ガンダムがそうであったように、各時代のハイエンドマシンや新機軸のMSであることといえる。これは「最強のMS」とも換言できる。

ガンダムの名と外見を持つということは、一般市民や敵対組織の注目を集めると共に、組織の象徴となるフラッグシップ・マシンであることを意味する。

そうである以上、一般的なMSと大差がない機体では、敵の侮りや味方の士気低下を招

く可能性があるほか、開発組織の技術力にも疑問を抱くことに繋がる。

結果、ガンダム・タイプMSは量産性を無視し、新テクノロジーを惜しみなく盛り込んだ「最強のMS」となる場合が多くなった。

しかも、必然か偶然かは不明だが、アムロ・レイやカミーユ・ビダン、ジュドー・アーシタのようなニュータイプ能力の高い者がガンダム・タイプMSのパイロットとなり、その性能を限界以上に引き出してもいた。

こうしてRX・78ガンダムに始まった最強MSの系譜は、フラッグシップ・マシンとしての超高性能や、強力なパイロットによって、さらなる名声を獲得している。そして新型ガンダムの活躍が、ガンダム・タイプMS全体の名声をさらに高め、これがまた次世代型ガンダムの誕生を促すという「ガンダムの連鎖」ともいえる状態が続いているのだ。

「MSの代名詞」とまで謳われたMS・06ザクⅡの系列機が時代と共に姿を消し、ガンダム・タイプと互角以上のスペックを持つMSが登場しても、ガンダム・タイプが最強の称号と共に戦場にあり続けるのは、これが理由と考えていいだろう。

しかし、ネームバリューや最強の追求は各ガンダムによって程度が異なるほか、政治・軍事的意図もあって、その開発背景は一樣ではない。

そこで次項からは、各ガンダム・タイプMSの開発背景や開発経緯、運用例などを具体的に紹介していく。テーマは「必要性」である。

INTRODUCTION		012
第一章 一年戦争		012
時代背景	地球連邦軍のMS開発計画	017
開発・運用概略	最高峰技術が投入された“初”の白兵戦用MS	031
COLUMN01	テクノロジー01	026
COLUMN02	開発者列伝01	039
COLUMN03	パイロット列伝01	72
COLUMN04	運用部隊01	72
第二章 デラーズ紛争		70
時代背景	地球連邦軍の本格的なMS開発の幕開けと アナハイム・エレクトロニクス社の台頭	72
開発・運用概略	時代を超える性能を与えられながら 歴史の闇に消えたガンダムたち	038
COLUMN05	開発者列伝02	008
COLUMN06	もうひとつのガンダム01	122
COLUMN07	運用部隊02	124
第三章 グリプス戦役～第1次ネオ・ジオン戦争		104
時代背景	ティターンズの政治的必要性と エウゴの軍事戦略的必要性から誕生したガンダムたち	104
開発・運用概略	ムーバブル・フレームが鍵を握った新世代ガンダムの開発	110
COLUMN08	テクノロジー02	102
COLUMN09	運用部隊03	106
時代背景	MSの爆発的進化と決戦兵器の必要性	177
開発・運用概略	爆発的進化を果たしたZZガンダムの開発	178
COLUMN10	もうひとつのガンダム02	170
COLUMN11	運用部隊04	180

THE LEGEND OF MOBILE SUIT GUNDAM

第四章	シャアの反乱	194
時代背景	シャアの台頭を許した地球連邦政府の怠慢	200
開発・運用概略	最強の機動兵器を目指したνガンダムの開発	208
COLUMN12	運用部隊 05	206
COLUMN13	テクノロジー 03	212
COLUMN14	パイロット列伝 02	220
第五章	コスモ・バビロニア建国戦争	222
時代背景	MSの恐竜的進化の終焉と小型MSの開発	227
開発・運用概略	最新技術と蓄積データが生んだF91の戦果	236
COLUMN15	開発機関 01	234
COLUMN16	運用部隊 06	245
COLUMN17	テクノロジー 04	246
第六章	ザンスカール戦争	248
時代背景	宇宙戦国時代の到来	253
開発・運用概略	MS開発の停滞を一挙に解消した ヴィクトリー・タイプMSの完成	260
COLUMN18	開発機関 02	258

Chapter01：一年戦争

U.C.0079-0080

001 『機動戦士ガンダム 第08MS小隊』
1990年1月25日～1990年7月25日／バンダイビジュアル／各75分（第4巻のみ80分）／全4巻

002 『機動戦士ガンダム 第08MS小隊 ミラズ・リポート』
1990年8月1日公開／松竹系／57分

003 『機動戦士ガンダム MS IGLOO ～1年戦争秘録～』
2005年4月26日／バンダイビジュアル／各30分／全3巻

004 『機動戦士ガンダム MS IGLOO ～黙示録0079～』
2006年4月26日～8月25日／バンダイビジュアル／各30分／全3巻

005 『機動戦士ガンダム MS IGLOO2 ～重力戦線～』
2008年10月24日～2009年4月24日／バンダイビジュアル／各30分／全3巻

0079

0080

0083

0087

0088

0093

0123

0153



THE LEGEND OF MOBILE SUIT GUNDAM

DATA FILE

TV 『機動戦士ガンダム』

1979年4月7日～1980年1月26日 / 名古屋テレビ系 / 土曜 17時30分～18時 / 全43話

MOVIE 『機動戦士ガンダム』

1981年3月14日公開 / 松竹系 / 2時間17分

MOVIE 『機動戦士ガンダムⅡ 哀・戦士編』

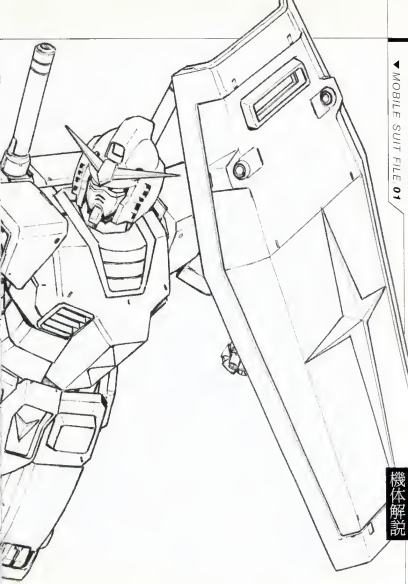
1981年7月11日公開 / 松竹系 / 2時間14分

MOVIE 『機動戦士ガンダムⅢ めぐりあい・^{そら}宇宙編』

1982年3月13日公開 / 松竹系 / 2時間21分

OVA 『機動戦士ガンダム 0080 ポケットの中の戦争』

1989年3月25日 / バンダイビジュアル / 全2巻 / 86分 & 86分



RX-78-2 GUNDAM

ガンダム伝説を築上げた連邦の「白いヤツ」

ガンダム

SPEC

総高：16.0m

本体重量：43.4t

ジェネレーター出力：1.75kW

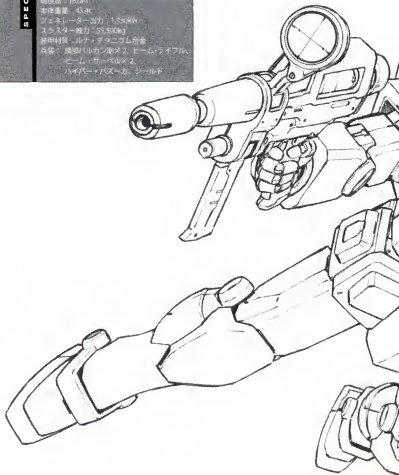
スラスター推力：55,500kg

装甲材質：ルナ・チタニウム合金

兵装：腕部バレルガン×2、ビーム・ライフル、

ビーム・サーベル×2

ハイパー・バズーカ、シールド





XBR-M-79
ビーム・
ライフル

RX-78-2 ガンダム

地球連邦軍が「V作戦」において開発した試作MS。先行開発された長距離支援用の「RX-75 ガンタンク」や中距離支援用の「RX-77 ガンキャノン」と異なり、対MS戦闘を強く意識した白兵戦用MSがこの「RX-78」だ。いくつかの仕様があるが、アムロ・レイの乗機として知られるこの「RX-78-2」が特に有名である。

本機は「V作戦」の前身である「RX計画」から培われてきたあらゆる新技術や機構が投入されたMSであり、ジオン公国軍の主力MS「MS-06 ザクⅡ」の5倍ともいわれる性能を誇っていた。MS携行用メガ粒子砲ビーム・ライフルやビーム系新撃兵器ビーム・サーベルなどによる攻撃力、新素材ルナ・チタニウム合金製の装甲やガンダム・シールドがもたらす高い防御力は、当時のジオン公国軍MSが持たなかったものだ。他にも計7基の核反応炉による大出力や、高度な機動性を付与する熱核スラスタ、RXシリーズの共通装備であるコア・ブロック・システムがもたらす運用柔軟性と生存性などは、同時代のMSの中でも極めて高いレベルに達しており、すべての性能が突出した文字通り“最強MS”であった。

超性能と引き換えに、生産性やコストはまったく考慮されていなかったが、地球連邦軍の主力MSとなった「RGM-79 ジム」は、ガンダムが基になっており、その血統はハイエンド機だけでなく量産機にも受け継がれていった。



地球連邦軍のMS開発計画

地球連邦の発足と宇宙移民の開始

旧世紀（西暦）末期、人口の増加とそれに伴う地球環境悪化が、人類を滅ぼしかねない問題として浮上していた。この問題を解決するために様々なプランが検討された結果、人類は宇宙移民を選択した。

宇宙移民の概要は、月軌道上の重力が安定した宙域であるラグランジュ・ポイントに人工植民地「スペース・コロニー」（以下コロニー）を建設し、そこに人類を移民させるというものである。ただしコロニー建設や宇宙への人類の移送は、国家単独や国際協調レベルで実施できるものではなかった。そのため、人、物資、資金などのあらゆるリソースを地球全体規模で統一運用し、宇宙移民を強制遂行する組織が必要であった。

そこで誕生したのが、地球上のあらゆる国家組織を統一した「地球連邦」である。

地球連邦が旧来の国連と大きく異なっていた点は、宇宙移民政策を全人類レベルで実施するための地球連邦政府が存在することで、いかに強力な構成国家でも、それに逆らうことはできなかった。また、各国から選出された議員で構成される地球連邦議会が設置され



地球と月の間にあるラグランジュ・ポイントに複数のスペース・コロニーが次々と建設され、人類の宇宙移民が本格化した。

たほか、各国の軍組織は地球連邦軍として統合、再編された。

ただし、地球連邦はあくまでも宇宙移民政策用の緊急避難的組織と考えられ（だからこそ地球規模の強権が与えられた）、宇宙移民の完了をもって解体されることになっていた。

こうして、史上かつてない大権を持った地球連邦政府の下でコロニーの建設が開始され、宇宙移民開始をもって「宇宙世紀（U. C. = Universal Century）」がはじまったのだった。

この時点、U. C. 0001での地球人口は90億人に達していた。

宇宙移民政策の停滞とジオン公国の誕生

地球連邦政府はその権限を用いて、半強制的に宇宙移民を推進していった。

移民費用は移民者自身の負担で、しかも「親子3代に亘るローン返済」といわれるほど高額なものであった。しかも、自身が生まれ育った土地は放棄しなければならなかったが、「人類の存亡」「人類全員を宇宙に移民させる」といわれれば、個人レベルで宇宙移民を拒否することはできなかった。

一部の反地球連邦組織の抵抗はあったものの、宇宙移民は驚くべきスピードで推移し、

U.C. 0040には総人口の40%、U.C. 0050には総人口110億人のうち90億人が宇宙へと移民した。人類の宇宙移民完了は目前かと思われた。

だが、ここで大きな政治的異変が発生する。

U.C. 0051、地球連邦政府が、突如として新規コロニー開発計画の凍結を発表したのだ。

「人類全員を宇宙に移民させる」という約束を、地球連邦政府が反故にした瞬間だった。

「宇宙移民は棄民政策にはかならないのではないか？」という疑問に「イエス」という答えが出た瞬間でもあり、地球居住者であるアースノイドと宇宙居住者のスペースノイドとの間の埋め難い溝が明確化した瞬間でもあった。

スペースノイドの間で地球連邦政府への不満と、地球連邦からの独立機運が高まる中、反地球連邦感情にひとつの方向性を与える人物が現れた。

宇宙世紀最大の思想家と呼ばれる、ジオン・ズム・ダイクンである。

U.C. 0052、月の裏側に位置するコロニー群「サイド3」に移住したジオン・ダ



ジオン・ズム・ダイクン

病床のジオン・ダイクンに寄り添うデギン・ソド・ザビ。ジオン・ダイクンの死には謎が多く、デギンの謀殺という説も根拠があった。



イクンは、自らの思想であるコントリズム——地球を神聖視するエレズムと、コロニーの集合体であるサイドを国家と見做すサイドズムを融合させた思想——を実践しようとした。

やがてサイド3の首相に就任したジオン・ダイクンは、スペースノイドの自治独立のために奔走する。しかし、コロニー自治権整備法案は地球連邦政府によって否決され、志し半ばのうちにジオン・ダイクンはこの世を去ってしまう。

ジオン・ダイクンの後を受けてサイド3の首相となったデギン・ソド・ザビも、サイド3の自治独立化に積極的だった。しかし、デギンの手法はジオン・ダイクンのものとはまったく異なっていた。デギンは、ジオン・ダイクンの交渉路線を放棄し、軍事力による独立を前面に押し出しはじめたのである。

元々、デギンはサイド3の軍事を掌握する人物で、ジオン・ダイクン時代から宇宙艦隊を擁する国防隊を組織していた。また、その下準備として重工業の推進も行っていた。



デギン・ソド・ザビ公王

U. C. 0069. 08. 15、サイド3はジオン公国を宣言すると、デギンは公王に就任。デギンの長男ギレン・ザビは総帥となり、そのカリスマ性と演説で国民を煽動すると共に、地球連邦との戦争機運を高めていった。

ジオン公国軍のMS開発

連邦体制からの独立のため、地球連邦との戦争を選択したジオン公国だが、ひとつのサイドを統治下に置くだけのジオン公国と、地球圏のほぼ全域を支配する地球連邦との国力の差は明白であった。しかも、地球連邦軍は大規模な宇宙艦隊を擁するだけでなく、サイド3を除く各サイドに部隊も駐留させており、そのままでは勝目はなかった。

そこでジオン公国軍が注目したのがミノフスキー粒子である。

ミノフスキー粒子はU・C・0069に存在が実証された粒子で、短波から超長波に至る電磁波の大半を減衰させ、精密電子機器の誤作動を誘発するなどの特性を持っていた。

つまり、ミノフスキー粒子が高濃度で散布された場所では、レーダーが利用できなくなるほか、コンピュータに代表される精密電子機器も正常に作動しなくなるのだ。

これは、レーダーやコンピュータに依存する従来の戦術の無力化と、第二次世界大戦以前のような有視界戦闘の復活を意味していた。そして、ミノフスキー粒子の影響下に対応した兵器が実用化されたとすれば、旧来の兵器しか持たない軍隊など相手にならないと考えられた。

ここに、ジオン公国が地球連邦をつけ入る「隙」があった。

地球連邦軍が旧来の兵器体系に頼った整備を続けていたU・C・0071、ジオン公国

軍はミノフスキー粒子散布環境に対応する「次期主力汎用戦術兵器」の開発に着手する。

こうした中、有望視されたのが、ZEONIC（ジオニック）社の社内プロジェクト「S・U・I・T（Space Utility Instruments Tactical）計画」で開発された「ZIXA3」だった。これが後のMSの原型機となる。

ZI・XA3は四肢を備えた人型のロボットで、装着された手脚はデッドウェイトにも思えた。しかし、マニピュレーターを用いた高度な作業性と装備換装能力、脚部がもたらす重力下移動能力、そして手脚を動作させた反作用のみで姿勢制御を行う「AMBA C（Active Mass Balance Auto Control）能動的質量移動による自動姿勢制御」システムが高い評価を受けた。

次期主力汎用戦術兵器の雛形として選ばれたZI・XA3には、戦術汎用宇宙機器「Mobile S.U.I.T」という呼称と形式番号「MS・01」が与えられた。こうして、ミノフスキー粒子散布環境下における有視界戦闘を前提とした、実戦型MSの開発が本格的にスタートしたのである。

MSの開発は急ピッチで進められ、U・C・0075、08に史上初の実戦型MSである「MS・05 ザクI」がロールアウト、わずか2年後の



MS-06 ザクII

U・C・0077・08には「MSの代名詞」とまで呼ばれる「MS・06ザクⅡ」の生産が開始された。

ジオン公国は、対地球連邦戦争用の絶対兵器を手に入れたことになる。

地球連邦軍のMS観と「V作戦」

ジオン公国軍のMS開発は、まったくの極秘で行なわれていた訳ではない。対外的には作業機器の開発と発表され、テスト風景まで公開されていたのである。

公開されたショットの中には、MSの兵器としての可能性が見出せるものも含まれていた。ジオン公国軍はこれで地球連邦軍の反応を窺っていたのだが、これといったリアクションはなかった。地球連邦軍は、開発中のMSに興味を示さなかったのだ。

それでもジオン公国軍がMSの戦力化を進めていた以上、非積極的ではあったが地球連邦軍でもMSの研究が開始されることとなった。

それがU・C・0078・03に開始された「RX計画」である。

「RX計画」では新素材ルナ・チタニウム合金やコア・ブロック・システムなどの基礎技術開発が進められていた。だが、ミノフスキー粒子散布環境下での戦闘の実態が不明確だった当時、地球連邦軍はジオン公国軍のザク・シリーズのような人型汎用／白兵戦用M

レビル將軍



Sの有用性に気づくことができなかった。その結果、誕生したのはMSと戦車の中間と形容できるRX-75ガンタンクであった。マゼラン級宇宙戦艦やサラミス級宇宙巡洋艦などの戦闘艦を重視した「大艦巨砲主義」に見られるように、地球連邦軍には火力偏重という特徴があった。この流れの中で、MSにも高火力を求めてしまったと推測される。

そして「RX計画」が具体的成果をほとんど出せないまま、一年戦争が勃発。U.C. 0079. 01. 03のことであった。

一年戦争の緒戦である一週間戦争とルウム戦役において、地球連邦軍が擁する宇宙艦隊はジオン公国軍に惨敗を喫した。ジオン公国軍の勝因が、ミノフスキー粒子の広域散布技術とMSの存在であったことはいうまでもない。

しかし、実戦でMSの威力を見ていない地球連邦軍首脳部は、自らの敗因がジオン公国軍の奇襲戦法にあると考え、未だMSの価値に気付いてはいなかった。

そんな地球連邦軍にも、MSに理解を示す高級将校が現れる。一年戦争時の地球連邦軍を最前線で指揮し続けた名將、レビル大將である。

レビル大將はルウム戦役でジオン公国軍に破れ（当時の階級は中将）、捕虜にまでなっ

公開されたジオン公国軍MS開発のテスト風景には、ブロックを積み上げる試作MSの姿もあり、作業能力の高さを垣間見せていた。



MSを運用したジオン公国軍の前に、地球連邦軍の大艦隊は惨敗を喫した。これ以降、地球連邦軍のMS開発が加速していく。

た敗軍の将だった。しかし、MSの威力を体感させられたことでその必要性を痛感し、地球連邦軍に復帰後、MS開発を推進した。

こうしてU・C. 0079. 04. 01、レビル大将の指示の下、MS開発とその量産化、運用母艦建造を含むMS運用法の確立などを目的とする「V作戦」が開始された。以前から進められていた「RX計画」も「V作戦」に統合され、ジオン公国軍のそれを上回る速度でMS開発が進んでいった。

「V作戦」の中で地球連邦軍は、ジオン公国軍とは異なるMS運用法を模索していた。

当初のジオン公国軍は、MSに徹底した汎用性を求める傾向があり、装備の換装やわずかな改装での運用柔軟性を狙っていた。MS・06ザクⅡが、その顕著な例である。

これに対して「V作戦」での地球連邦軍は、大型火砲を固定装備する支援MSと、対MS戦闘を想定した白兵戦用MSの二本柱で、MS開発を進めている。

その白兵戦用MSの嚆矢となった機体こそ、後に連邦の「白いヤツ」としてジオン公国軍将兵に恐れられ、白いMSの伝説の発端となったRX-78ガンダムであった。

コア・ブロック・システム

—— 最高度の生存性を確保した画期的システム

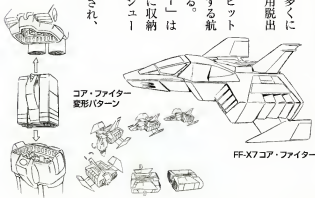
RX・78 ガンダムをはじめとするRXシリーズの多くに採用された「コア・ブロック・システム」とは、MS用脱出機構のひとつである。

コア・ブロック・システムが、射出座席や射出コクピットなどの他のMS用脱出機構と異なる点は、単独で機能する航空／航空機コア・ファイターとなっていることといえる。

RXシリーズ用の「FF・X7 コア・ファイター」は「RX計画」で開発されていたもので、MSの胴体内に収納される際は、コア・ブロックと呼ばれるブロック状モジュールに変形している。

MS離脱時には、折り畳まれていた機首や翼が展開され、航空／航空機として機能するようになる。当然、MS時と航空／航空機時のコクピットは共用されている。

これにより、MS本体が破壊されてもコア・ファイターで離脱できるため、パイロットの生存性は著しく



向上したが、当初のコア・ブロック・システムが目指したものはそれだけではなかった。

RXシリーズでコア・ブロック・システムが必要となった背景には、一般に「教育型コンピュータ」と呼ばれる推論型ナビゲーション・コントロール（ICN）の存在があったとされている。

ミノフスキー粒子の影響下でも正常に作動する光集積回路（GMO）を持つ教育型コンピュータは、MSの基本動作を司ると共に、蓄積された戦闘データを基に基本動作を最適化し続けるという機能を持っている。簡単にいえば、戦えば戦うほどMSを強くするシステムなのである。



RXシリーズの運用母体として開発されたホワイトベースは、MSデッキにコア・ブロック・システム換装用の設備を備えた。



RX78-2の空中換装を行うコア・ファイター。換装には約20秒を要した。

ここで問題となるのは、MSの撃墜が教育型コンピュータと戦闘データの喪失に直結することである。MS母艦などにデータが保存されているとはいえ、データバンクとMSはリアルタイムでリンクしているわけではないので、MSが撃破されることは戦闘一回分のデータ喪失を意味するのだ。

「たった一回」ではあるが、ほとんどゼロからMSを開発し、その運用法を模索していた「R



座部のコントロールパネルを操作して、機外からAパーツを強制排除することも可能。ア・バオア・クーで製造した際に行われた。

X計画」と「V作戦」において、その「たった一回」は極めて貴重なものだったのである。

特にRXシリーズは、実戦での試験運用が考慮された試作MSだったため、データの回収には細心の注意が払われていた。またMSパイロットの育成も、地球連邦軍にとつては初めての試みであり、パイロットの生還も重視されていたことはいまでもない。

データ回収とパイロットの生還——最初期のMS開発において、このふたつの要素は絶対に外せないものであった。そして、それらの確実性をより高めるデバイスとして、コア・ブロック・システムが考案されたのだった（実際には、パイロットの生還よりもデータ回収が重要視されていたといわれる）。

ただし、コア・ブロック・システムにも問題が指摘される。機構の複雑化に伴うMS全体の整備性と耐久性の低下、そして高コスト化である。

このためコア・ブロック・システムは、RX・78ガンダムの簡易量産型といえるRG M・79ジムや、RX・75ガンタンクおよびRX・77ガンキャノンの量産仕様機には採用されなかった。RXシリーズは、その特性から「高い保険」が必要だったということだ。

FF-X7Bst
コア・ブースター

このような経緯で実用化されたコア・ファイターはその特性上、軽装で航続距離も短かった（一説では500kmとされる）が、教育型コンピュータの処理能力の余剰や、RXシリーズとのドッキング能力に見られる拡張性なども残していた。

そこで戦闘機としての強化プランが浮上し、メガ粒子砲やミサイル類、大推力スラスタールや大容量コンフォーマルタンクなどが一体化した増加システムが開発されることになった。これを装備したタイプがコア・ブースターで、MSをも撃破可能な数少ない戦闘機として活躍したのであった。他にも、RX-78ガンダム用総合強化システム／戦闘機であるGファイター（通称Gメカ）

との合体も可能であった。

その欠点から普及しなかったコア・ブロック・システムだが、生存性の高さや拡張性、運用上の柔軟性は高く評価されている。後発のガンダム・タイプのいくつかに採用されたことから、それがMS黎明期の緊急避難的システムでなかったことが証明されている。



Gファイター



Gスカイジー



最高峰技術が投入された、初の白兵戦用MS

「RX計画」の開始

一週間戦争やルウム戦役における惨敗という結果から、一年戦争開戦以前の地球連邦軍がMSの存在を知らなかったとされる説も多い。しかし、末端の兵はともかく、軍上層部はMS開発を事前に察知していた。ザク系MSの設計図やサンプルを入手していたという説もある。つまりMSを知っていたながらも対策を怠り、その結果、ジオン公国軍のNBC兵器の無制限使用やコロニー落としを許し、多数の人命を失わせたということになる。

これにはジオン公国が情報操作を行ったこともあるが、作業機器という名目で情報を開示されたMSから、地球連邦軍上層部が有用な情報を読み取れなかったというのが実情だった。さらに60年代軍備増強計画と70年代軍備増強計画で編制した宇宙艦隊に絶大な信頼を寄せていたため、ミノフスキー粒子散布環境下での戦闘の、意味を理解していなかったなど、複数の要素が絡み合った結果ともいえる。

地球連邦軍もミノフスキー粒子にまったく興味を示さなかったわけではない。実際、MAWS (Minovsky-theory Applied Weapon System) ミノフスキー理論応用兵器体系)



マゼラン級宇宙戦艦



サイバーフィッシュ

やMBW (Minovsky Beam Weapon ミノフスキー粒子兵器) と呼ばれる機器の中でも、小型で高出力のミノフスキー・イヨネスコ型核反応炉や熱核ロケット・エンジン、85%ものエネルギー効率を持つメガ粒子砲などは積極的に採り入れ、宇宙艦隊強化に利用していたのである。

ただし、地球連邦軍がMSを理解できなかった点にも頷ける部分もある。MSを開発したジオン公国の総帥ギレン・ザビでさえ、MSの原型機ZI・XA3を見た際の最初の反応が「冷笑」であった。

それでも、ジオン公国軍がMSを軍事兵器として本気で開発していることは確かであり、未確認ながらサイド3内の暴動鎮圧にMSが投入されたという情報もあった。

ならば、それに対抗するための研究は必要である。当然のことながら、地球連邦軍上層部の大半はこれに乗り気ではなかった。しかし、とりあえずの承認を受け、U.C. 0078、03、地球連邦軍のMS研究開発プロジェクト

「RX計画」が始動された。



61式戦車

「RX計画」の進展とMS観の迷走

ジオン公国のミノフスキー粒子対応兵器の開発開始から遅れること7年、ようやく地球連邦軍もMSの研究開発に着手した。この時間差が一年戦争において、「ジオンより10年は遅れている」という兵器技術レベルの差となって表面化するが、それはまた別の話である。対MS兵器の研究開発が目的の「RX計画」は、軍民を問わず様々な企業や技術者が参画して開始されるが、ここで大きな問題が発生した。

地球連邦軍の将校は当然のこと、軍技術部や参加企業、技術者の中にミノフスキー粒子の影響下における戦闘を理解している者がいなかったのである。

計画に参加した者たちは、MSがミノフスキー粒子散布環境に対応した兵器だと知っていた。しかし、知識として知っていただけで、実際にどういったものであるのか、それに対応する技術も体験も有していなかったのだ。

ミノフスキー粒子散布環境下での戦闘、つまり有視界戦闘を突き詰めていけば、MS・06ザクⅡのような人型汎用／白兵戦用兵器に辿り着くが、これはMS先進国だったジオン公国や後世からの視点で初めて理解できるものである。

そこで「RX計画」では、MS開発に必要な基礎技術の研究や、既存技術を可能な限り流用した対MS兵器の開発など、複数のプロジェクトを同時進行させることになった。

最初に開発された対MS兵器が、61式戦車の後継機開発計画を転用した「RTX・44」であった。これは主力戦車を源流とすることから理解できるように、装甲戦闘車両のスタイルを持っていた。その能力は「巨大な鉄塊」という評価から、推して知るべきものだった（もっとも、ザク・シリーズとも戦闘可能な「RTX・440 陸戦強襲型ガンタンク」へと発展し、オデッサ戦に投入されているので無駄とはいえない）。

このRTX・44に見られるように「RX計画」の技術者たちは、旧来の発想から抜け出せずにいた。これがミノフスキー粒子対応兵器に、最初から人型機器を提示したジオン公国と、既存の兵器の延長線上で考えようとした地球連邦の差であった。

だが、ここで地球連邦軍のMS開発に一定の方向性を与える事態が発生する。

ある科学者がジオン公国から亡命し、「RX計画」に参加したのである。

確かに、これによって「RX計画」参加者たちのMSへの理解は深まったが、ザクⅡのような人型の汎用／白兵戦用MSの開発には、もうワンステップが必要だった。

亡命科学者が計画に参加した後、陸戦用の対MS兵器としてRTX・44を発展させた「RX・75 ガンタンク」が、空間戦用対MS兵器とし



RX-75 ガンタンク

て「スペース・ポッドSP・W03」をベースとした「RX・76」が開発されることになった。なおRX・76は、ほぼそのまま空間用支援機「RB・79ボール」に転用、量産されている。

この中で注目すべきはガンタンクのスタイルだった。その名が示すように、下半身に履帯（キャタピラ）を採用し、両肩部と両前腕部には火器を固定装備していた。二足歩行式脚部ユニットと非武装の腕部汎用マニピュレーターを持つザクⅡと比べると、洗練されているとはいえない難しいスタイルである。

しかし、ガンタンクは「下半身」「肩部」「腕部」といった人間のそれに相当する部位を持っていたのである。つまり不完全ではあったが、ガンタンクは人型というMSの基本スタイルを採り入れた機体だった。これまでの地球連邦軍と比べても革新的なことであった。

しかしガンタンクの兵装は、射程260kmという120mm低反動砲2門と、射程20kmとされるポップ・ミサイル・ランチャー8基であり、とてもミノフスキー粒子散布環境下の有視界戦闘に適しているとはいえなかった。

ミノフスキー粒子の影響下におけるガンタンクは、戦闘兵器ではなく攻撃／支援兵器という性格が強く、空間戦闘能力も極めて限定されざるを得なかったのである。

ここに至って「RX計画」の技術者たちは、ジオン公国軍機のような完全人型MSの研究開発を開始する。戦闘機に対抗するには戦闘機が必要であるように、対MS戦闘を行う



RB-79 ボール

のはMS、それも白兵戦用MSである必要性が認識されたのだった。

こうして「RX計画」で培われ、ガンタンクにも採用された新素材ルナ・チタニウム合金や脱出用戦闘機兼コクピットとなるコア・ブロック・システム、ミノフスキー物理学を応用した駆動装置フィールド・モーターなどの技術を用い、完全人型MSが開発されることとなったのだ。

「V作戦」の開始とガンダム開発着手

ようやく開始された二足歩行式MS開発だが、その基礎研究が終了するころ、地球圏の政治状況は大きな変化を見せはじめていた。U.C. 0079、01、03、ジオン公国が地球連邦に戦線を布告、一年戦争が開戦したのである。

一年戦争の開戦は、ミノフスキー粒子の広域散布による旧来の戦術の無力化と、有視界戦闘と呼ばれるほどの近距離戦闘におけるMSの有効性を実証した。

しかし、ここに至っても地球連邦軍首脳部の大半はMSに懐疑的であった。だが、ルウム戦役でMSの威力を目の当たりレビル將軍の強い後押しにより、U.C. 0079、04、01、MSに関する総合開発プロジェクトが始動する。これが「V作戦」である

(VはVictoryの略)。

「V作戦」は試作MSの開発だけでなく、MS母艦の開発建造や、試作MSのデータを反映した主力MSの開発量産、MS運用法の確立までを含んだ広範な計画であり、先行していた「RX計画」も「V作戦」に統合されることとなった。

こうして一年戦争の開戦は、少数ながら地球連邦軍高級将校にMSへの理解を促しただけでなく、地球連邦軍に他の恩恵をもたらした。

また、緒戦である一週間戦争やルウム戦役、それに続くジオン公国軍の地球侵攻作戦の中で、何機かのザクを鹵獲することに成功。

これにより、MSの運用法についてまったくの無知であった地球連邦軍は、鹵獲ザク部隊を用いた戦術研究が可能となり、「V作戦」が目指したMS運用法の確立に多大な貢献をするようになった。実際、U・C・0079、04〜05に亘って、MS・06J ザクⅡ6機と61式戦車2輦からなるセモベンテ隊が、北米で活動している（部隊編制から考えて、MSと支援兵器の同時運用試験であった可能性も否定できない）。

そして何よりも、MSのサンプル入手は、地球連邦軍のMS開発を加速させていった。

「V作戦」におけるMS開発が特徴的であった点は、共通の基礎

鹵獲MSを運用した連邦軍部隊のひとつとして、北米各地にあるジオン公国軍の物資集積所を攻撃したセモベンテ隊が知られている。



技術を用いながらも、最初から支援用MSと白兵戦用MSが別個に設計開発されたことで、汎用性は比較的重視されていなかったことである（MS運用法の確立が「V作戦」の目的に含まれていたことも、異なるタイプのMSが平行して開発された一因と考えられる）。これが、ひとつの汎用MSからバリエーションを展開した、当初のジオン公国軍との違いとなっていた。

この支援用MSが、長距離支援用MSに位置付けられたRX・75ガンタンクと白兵戦用MSの間を埋める中距離支援用MS「RX・77ガンキャノン」である。そして、敵MSとの近接戦闘を目的とした白兵戦用MSこそ、ほかならぬRX・78ガンダムであった。

型式番号の順番やMSとしての洗練度の差から、ガンキャノンの開発後、ガンダムが開発されたと思われることが多い。しかし、実際には同時期に開発されており（結果的ながらガンキャノンの開発が先行した）、ビーム・ライフルに関連する技術など、ガンダムからガンキャノンにフィードバックされたテクノロジーも存在している。

こうして「V作戦」内で様々なプロジェクトが同時進行する中、「RX計画」から培われ続けた技術群が惜しみなく投入され、ガンダムの開発が進められたのである。



RX-77 ガンキャノン

「RX計画」や「V作戦」には多数の企業が参画していた。

■熱核反応炉／ジェネレーターや熱核ロケット／ジェット・エンジンのタキム社

■コア・ファイターのハービック社

■フィールド・モーターのサムソニ・シム社（軍技術部との共同開発）

■無段方位アンテナのスーズ社

■通信、音響システムのマツム・ソニック社

■ビーム・ライフルやハイパー・バズーカのブラッシュュ社

■頭部60mmバルカン砲のトト・カニンガム社

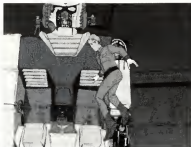
など、RX・78ガンダムだけを例にとっても枚挙に暇がない。

フィールド・モーターの開発に見られるように、地球連邦軍技術部の存在も大きく、特にRX・78ガンダムの設計技師であったテム・レイ技術大尉は重要な役割を果たしている。テム技術大尉はその名が示すように、RX・78・2ガンダムのパイロットとなったアムロ・レイ



RXシリーズの開発に多大な貢献を果たしたテム・レイ技術大尉は、サイド7の戦いで敵艦の攻撃に冒され、不幸な晩年を送った。

RX・78を生み出し、育んだ者たち



RX-78-2のマグネット・コーティング処理を指揮するモスク・ハン博士。技術屋気質の人物で、自らの理論に自信を持っていた。

の実父で、

生粋の技術

者として知

られ、その

技術力とM

Sへの理解力は卓越していた。軍部のMSへの不見識を

余所に、「RX計画」で培われたテクノロジーを総動員

して、MSの本質といえる白兵戦用MSをごく短期間で

設計したのである。

短期間でのガンダム開発は、「CAD・CAMシステ

ム」と呼ばれる全自動設計製造機構の恩恵が大きいたともいわれている。しかし、テム技術大尉がいなければガンダムの完成度が著しく低下したであろうことは否定できないだろう。

残念ながら、テム技術大尉はサイド7遭遇戦で行方不明とな

り、一年戦争末期にはサイド6で事故死してしまうが、その後も

ガンダムの強化は様々な技師たちの手で続けられた。

その代表的人物が、モスク・ハン博士である。電磁工学の新鋭



テム・レイ技術大尉



ティック・ムルンバは自身の義肢研究に通じる部分の多いMS開発に協力しながらも、その一方で兵器としてのMSを必要悪と評した。



セキ技術大佐はホワイトベースの整備や新兵器の配備運用に尽力した士官で、マチルダ・アジャン中尉からも厚い信頼を得ていた。

と呼ばれた人物で、自身の理論とミノフスキー物理学を応用、融合させたMS強化技術を開発、実用化した。それがフィールド・モーター用強化塗膜「マグネット・コーティング」であった。

マグネット・コーティング処理が施されたアムロ・レイのガンダムは、反応速度が著しく向上しており、RX・78・2を高度なニュータイプとして覚醒していたアムロに追従可能なRX・78・3として再生したのである。

ほかにも、民間人ながらRX・78NT-1アレックスの開発に協力した、サイド6の連邦医療センター所属の義肢研究者ディック・ムルンバや、「RX・79BD」シリーズの開発に従事した亡命技術者クルスト・モーゼス博士、「RX・78・6ガンダム6号機」の開発責任者兼パイロットのエイガー少尉の名前が知られている。

また、RX・78シリーズの開発に直接関わったわけではないが、ウツデイ・マルデン大尉やマチルダ・アジャン中尉、セキ技術大佐など、ガンダムとそのパイロットの可能性を信じ、献身的なサポートを施した技術系軍人に支えられていたことも付記しておく。



RX・78・2の開発と基本構造

RX・78 ガンダムは白兵戦用MSというフォーマットを基に、「RX計画」などで実用化されたほとんどの新テクノロジーを採用した、万能MSとして開発された。

勿論、RX・75 ガンタンクやRX・77 ガンキャノンにも「RX計画」系の新技術が投入されているが、ガンダム（特にアムロ・レイの乗機として知られるRX・78・2）はノンオプションでの宇宙・大気圏内両対応性だけでなく、水中適応能力や大気圏突入能力までもが付与されていた点が異なっている。

MS・06 ザクⅡは「想定されうるあらゆる環境に対応する、MSの持つべき汎用性の拡大」という軍部の要求を、パーツ換装や改修などで満たしていた。しかしガンダムは、ノンオプションで想定されるあらゆる状況に対応可能となっており、これが「汎用MS」を超えた「万能MS」である所以となっているのだ。

ガンダムにここまでの万能性が求められた背景には、いくつかの理由がある。

第一に、地球連邦軍が「MSの真の姿」といえる白兵戦用MSの形態を模索中だったことが挙げられる。白兵戦用MSに何が必要で、何が不要なのかという問題である。

第二に、ガンダムはあくまで試験用の機体だったことである。

ただでさえ、高コストなコア・ブロック・システムやルナ・チタニウム合金などが採用

されたガンダムは、そのままでの量産を前提としていない。そのコストはザクの7倍とも伝えられており、いかに地球圏規模の超国家組織である地球連邦でも量産は不可能であった。つまり、実戦テストも考慮した試験用だからこそ、許された万能性だったのである。

このような特殊仕様と高性能を両立したガンダムの開発には、長い時間が必要と思えるが、実際にはU・C・0079・07には1号機がロールアウトしている。極めて短期間での設計開発の背景には、ガンタンクで採用されたようなコア・ファイターを中心としたMS用フォーマットの存在もあった。RXシリーズならではの構造上の特徴が、設計の自由度を制限したが、それが設計期間の短縮に役立ったということであろう。

その「RXシリーズならではの構造上の特徴」として、以下の特記事項が挙げられる。

■コア・ブロック・システムを中心として上半身のAパーツと下半身のBパーツで構成される基本構造

■高度な耐弾性と軽量性を両立したルナ・チタニウム合金製の装甲

■大出力・高トルクの駆動装置フィールド・モーター

■高出力を得るための分散配置式核反応炉／ジェネレーター

■MSの基本動作を司る教育型コンピュータ

当然ガンダムもこれらの機構を採用しているが、白兵戦用という仕様に合わせて微調整されているほか、独自の構造も採用していた。

RX・78・2の各部構造

RX・78 ガンダムの特徴的部位であり、「ガンダムの記号」として後発のガンダム・タイプMSに受け継がれた頭部は、擬人化の極地といわれるほど人間的な形状をしている。

頭部に内蔵された代表的な機器として、光学カメラを主とする頭頂部メイン・カメラや無段階方位アンテナなどのセンサー系、教育型コンピュータやセンサー系をサポートするコ・プロセッサ・フレーム、近接防御用の60mmバルカン砲などがある。

外見的特徴である双眼式のデュアル・カメラは、コクピット内の精密射撃用スコープとリンクするもので、ガンダムがビーム・ライフルの照準器を覗き込むようにして射撃するのは、これに起因するようだ。

なお、このデュアル・カメラや頭頂部メイン・カメラなどの



センサー系は、光統合回路でリンクされており、ミノフスキー粒子の影響下でも作動が可能となっていた。

胴体はほかのRXシリーズ同様、コア・ブロック・システムと上半身・下半身（Aパーツ・Bパーツ）の分割式である。

構造は、地球連邦軍系MS特有のセミ・モノコック構造（装甲外殻の裏にフレームを張り巡らせたもの）で、剛性に秀でるルナ・チタニウム合金などを利用した積層装甲を採用しているため、コア・ブロックを内蔵しても十分な強度を持っていた。

また、核反応炉／ジェネレーター／ジェット・エンジンと直結したランドセル（リックサック、バックパックともいわれる）の2基、そして腰部の1基と、胴体だけで5基もの反応炉を搭載する。

これは、単基の反応炉を搭載する傾向にあったジオン公国系MSとの大きな違いであり、各パーツとの合体で出力アップを図ったRXシリーズの特徴でもあった。

両脚部に内蔵されたものも含めると計7基もの反応炉を搭載しており、1380kWものジェネレーター出力を発揮した。これはMS・06ザクⅡのそれを大きく上回るもので、ビーム・ラ



コア・ブロック・システムの特性を生かした空中換装は、ドッキング用レーザー・サーチャーの視認によって行われる。

イフルやビーム・サーベルを稼働するのに十分な出力を確保していたのである。

比較的小型なこともあって軽視されがちだが、熱核ロケット/ジェット・エンジン式の背部スラスタも、ガンダムにとって重要なデバイスである。

背部スラスタはコンパクトでありながら、宇宙空間用での機動性を司るだけでなく、重力下では脚部による跳躍と組み合わせることで、擬似的ながら空中戦すら可能とした。

このような機動性能は、ザクⅡは当然のこと、後に出現した「MS・09R リック・ドム」すら上回るガンダムのスラスタ総推力があったからこそといえる。

ガンダムの胴体と他のRXシリーズのその最大の違いは、大口径固定火器を搭載しない点と、装甲が薄いこと、そしてビーム・サーベル用ホルスターを持つことなどである。

これは白兵戦用MSゆえに、近距離戦能力や対MS格闘能力、運動性などが重視されたガンダムならではの構造といえるが、それに伴う欠点は様々な方法や装備で補われた。

特に装甲の問題は、手持ち式の複合装甲板であるガンダム・シールドを装備することで対応可能であった。また、ルナ・チタニウム製の装甲外殻も、ザクⅡの120mmマシンガンに耐えるだけの防御力を有していた。「装甲が薄い」というのもガンキャノンと比較した場合で、ガンダムの装甲防御力はジオン公国軍将兵を驚かせるほどであった。

腕部は、ベアシックな汎用五本指マニピュレーターであり、ザクⅡのようなスパイク・アーマーや肩部懸架式シールド、ガンタンクに見られる内蔵火器などは装備していない。

駆動装置には「RX計画」で開発されたフィールド・

モーターが採用された。ガンダムのは、大出力ジェネレーターがもたらす電力により、マニピュレーターだけでザクIIを撃破するほどのパワーを発揮したほか、ビーム・ライフルやビーム・サーベルを持った状態でも、腕部を高速で動かすことも可能であった。

一年戦争末期、アムロ・レイ機に施されたマグネット・コーティングは、このフィールド・モーターを強化する技術で、機体の反応速度を向上させる（パイロットが操作してから、機体が動くまでのタイムラグが短くなる）ことに加え、運動性の向上も期待できた。

実際、マグネット・コーティング処理を受けたアムロ機は、姿勢変更の所要時間が27%も短縮された。なお、この処理によりアムロ機は、RX・78・2仕様からRX・78・3仕様に変更されている。

脚部も外見こそシンプルであるが、核反応炉／ジェネレーターを搭載するほか、足裏部にスラスターを装備するなど、ハイブリッド化が進んでいた。

脚部の駆動装置は腕部同様、フィールド・モーターである。



ジオン公国軍が得たRX-78開発情報には、動作テストを行うBパーツやマニピュレーター、燃焼実験中のランドセル部スラスターの映像があった。



宇宙空間ではAMBACシステムの主機として働くのは当然のこと、重力下においては時速130kmもの走行速度を発揮するといわれている。

強力無比のビーム兵器

RX・78ガンダムについて必ずといっていいほど語られるものが、「戦艦級のビーム」とまで呼ばれたMS携行式メガ粒子砲ビーム・ライフルと、厚さ30cmものチタニウム鋼を1秒足らずで切断可能なビーム・サーベルである。

ガンダムが実戦に出現した当時、このふたつのビーム兵装は、MS用としては最強の兵器であり、MS先進国であるジオン公国ですら実用化していなかった。

当初からガンダムは、ビーム兵器搭載機として開発されていたが、そこには大きなハードルが横たわっていた。初期のメガ粒子砲は、MSが運用できる代物ではなかったのだ。

メガ粒子は、対となって存在する正と負のミノフスキー粒子を縮退、融合させることで発生する。しかし、ミノフスキー粒子を融合させるには、艦艇用の核反応炉に匹敵するほどの大出力が必要であり、当時のMSではそこまでの出力を得られなかった。これは、比較的高いジェネレーター出力を誇るRXシリーズでも不可能なことだった。

そこで考案されたのが、エネルギーCAPである。

エネルギーCAPは、融合寸前のミノフスキー粒子をチャージしておけるデバイスで、さらにエネルギーを加えることでメガ粒子を発生可能であった。しかも、メガ粒子化に必要な追加エネルギーは、千数百kW級ジェネレーターで供給できる規模だったことから、MSへのメガ粒子砲の搭載も可能となり、融合寸前のミノフスキー粒子は、母艦や基地でチャージするため、MSに負荷が掛かることはなかった。

そしてU・C. 0079. 07、地球連邦軍とブラッッシュ社はエネルギーCAP技術を確立し、メガ粒子砲の小型化に成功する。

エネルギーCAPによって、MS用にまで小型化されたメガ粒子砲、つまりビーム・ライフルは、「RX・78・1プロトタイプ・ガンダム」に装備されたという。

だが、ハンドショットガン・タイプと呼ばれるこのビーム・ライフルの評価は低く、改良が加えられることとなった。

この結果誕生したのが、RX・78・2用のビーム・ライフルである。ブラッッシュ社製のXBR・M・79・07Gというモデルがそれである。

出力1.9MW、一回のチャージで16発の発射が可能なこのビーム・ライフルは、既存のMS用火器を凌駕する威力を持っており、MSは勿論のことムサイ級軽巡洋艦すら撃沈す



ビーム・ライフルは高い威力を誇る武装だが、アムロが不慣れな頃にはエネルギー切れを起こすことも多かった。それでも、MS-06ザクⅡを一撃で破壊する火力は、ジオン公国軍MSに対する大きなアドバンテージとなった。

るほどの攻撃力を有していた（入力する電力によっても異なるが、有効射程は20km前後、発生温度は2万度にも達したという）。

ガンダム用のもうひとつのビーム兵器、ビーム・サーベルもエネルギーCAPにより実用化されたものである。

ビーム・サーベルは文字通り、ビームの刃を持つMS用格闘兵装だが、ビーム・ライフルとは異なるビーム発生方式を採用している。

ビーム・サーベルのビーム刃は、メガ粒子ではなくエネルギーCAPから放出された縮退寸前の（高エネルギー状態の）ミノフスキー粒子であり、1フィートドによって刀身状に形成される。ビーム刃発生装置は、刀剣という「柄」の部分のみで、ここにエネルギーCAPやMSからのエネルギーサプライヤーなどが配置されていた。

出力は0.38MWと、ビーム・ライフルと比べて低いように見えるが、重装甲の「MS-09ドム」や水陸両用MSであっても確実に撃破可能な威力を有していた。

ガンダムは2本のビーム・サーベルを標準装備しており、事前に設定しておけばビーム・ジャベリンと呼ばれる槍状の格闘兵装としても使用可能であった。



ビーム・サーベル



MS-09Rリック・ドムをビーム・サーベルで両断するRX-78-2。この武装は白兵戦用MSとしての戦闘力の基盤となった。

バリエーション豊かなガンダム用兵装

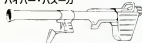
強力無比なビーム兵器の搭載を前提として開発されたRX-78ガンダムだが、地球連邦軍にとっては初の白兵戦用MS開発であったため、装備形態すら模索中であった。さらに主兵装のビーム・ライフルは大気圏内や水中などではビームの減衰によって威力が低下した。こうした問題に対応するため、様々な兵装が開発されることになった。

ビーム兵器以外で多用された火器として知られるのが、ハイパー・バズーカ（ブラッシュュ社製のXHB・L・03/N・STD）である。

ハイパー・バズーカは口径380mmのMS用ロケット・ランチャー／無反動砲で、その名の通り、人間用対戦車兵器バズーカに似た形状を持っている。ビーム・ライフルと比べて大型のため取り回しが悪く、装弾数も少ないという欠点があるものの、大気圏内でも確実な効果が見込めるほか、多様な弾種を使用することで運用性にも秀でていた。

ビーム・ライフルを貫通力の高い槍に例えるなら、ハイパー・バズーカは打撃力と衝撃力に優れる鈍器のような特性を持っていたといわれる。より確実なダメージを与えることが可能だったこともあり、アムロ・レイはビーム・ライフルよりハイパー・バズーカを信頼したとまで伝えられている。

ほかにも、鎖の先端にスパイク付き鉄球を装備したガンダム・ハンマーや、それにスパイ

XHB-L-03/N-ST-D
ハイパー・バズーカ

ア・バオア・クー戦では2丁のハイパー・バズーカを携行して出撃した。長距離戦が想定される場合には副武装としても運用された。



ガンダム・ハンマー

ハイパー・ハンマーはスラストターの加速で打撃力を増大させる機関兵器だが、MSM-03ゴウグに受け止められたこともあった。

クの大形化と鉄球加速用スラスタを施したハイパー・ハンマー、焼夷兵器のスーパー・ナームなどが開発されたが、数えるほどしか使用されていない。

このような直接的ダメージを狙った兵装が多い中、ガンダム用装備として異彩を放っているのが、ガンダム・シールド（型式番号はRX・

M・Sh・008/S・01025）である。

ガンダム・シールドは、文字通りガンダム用の盾であり、戦闘時に左マニピュレーターで保持するのが一般的な装備形態となっていた（前腕部ラッチに接続するケースもあったとされる）。

ガンダムは運動性を向上させるため、RX・77ガンキャノンと比較して装甲が薄くなっている。さらに、ビーム・サーベルやヒート・ホークといった格闘兵装を使用する対MS格闘戦に対応するため、自由度が高い増加装甲を必要とした。

こうした機体や戦闘法の特性から開発されたガンダム・シールドは、胴体などに直接増設する追加装甲と異なり、腕部マニピュレーターにより防御する



ガンダム・シールドはマニピュレーターで保持する方式で、両手が塞がった場合や使用しない際には背部にマウントできた。

RX-M-Sh-008/S-01025
ガンダム・シールド

方向を自由に変更可能であるほか、不要になった際には投棄できるといったメリットを持っていた。

こうした柔軟な運用性だけでなく、衝撃の吸収や拡散を主とした防御力にも配慮がなされており、装甲はガンダムのそれを単純化したものが採用されていたといわれる。

基部はジオン公国系MSの装甲材質としても用いられた超硬スチール合金で、その上にアラミド繊維で挟まれた高密度セラミック素材、高分子素材による樹脂、最表層のルナ・チタニウム合金という多層構造となっていたようである。

その防御力は、ザク・バズーカやジャイアント・バズの直撃からガンダム本体を保護し、対MS格闘戦でも幾度となくガンダムを救ったのだった。

一年戦争におけるガンダムの戦果

U.C. 0079. 08, RX-78-2 ガンダムはRX-77-2 ガンキャノン、RX-75 ガンタンクなどと共に、サイド7に運び込まれていた。

目的は最終テストであったが、RXシリーズ回収のためサイド7に向かっていた強襲揚陸艦ホワイトベースが、シャア・アブナブル少佐（当時）指揮のムサイ級軽巡洋艦ファルメルに発見、追尾されたことから戦闘に巻き込まれることになった。

それがU.C. 0079. 09. 18に起こった「サイド7遭遇戦」である。

この戦闘は、偵察のためサイド7に侵入していた3機のMS・06FザクⅡのうちの2機が独断で攻撃を行ったことから発生した突発的なものだったが、ガンダムが稼動、応戦したこと、から、史上初とされるMS対MSの戦闘へと発展した。

この際ガンダムを操縦していたのは、偶然乗り込でしまった民間の少年アムロ・レイで、実戦経験はおろかMSに乗るのも初めてだった。

サイド7の戦闘では、MS-06の頭部を損んで動力パイプを引きちぎっている。基礎性能の高さを見せ付けた一例として知られる。

ホワイトベースの地球降下時に攻撃を受け、単独の大気圏突入を余儀なくされながらも成功させている（突入機能には誤説ある）。

ジオン公国軍のMSには薄空できるほどの性能はなく、空中戦を展開するRX-78-2に公国軍兵士は驚愕した。

ランバ・ラルが駆ったMS-07Bグフとの格闘戦は、RX-78-2の白兵戦性能の高さを伺わせるエピソードとして知られる。

この時のガンダムは、ビーム・サーベルとバルカン砲という最小限の装備しか持たなかったうえ、操縦経験のないアムロはマニュアルを見ながらの戦闘を余儀なくされた。それにも拘らず、ガンダムは2機のザ





MSM-03 ゴッグと水中戦を演じるRX-78-2。水中ではビーム・ライフルが減衰して無力化されるため、ビーム・サーベルを用いた。



サイド6付近でのコンスコン艦隊との戦闘では、わずか3分で9機ものMS-09Rを撃墜するという驚異的な戦果を残した。



マグネット・コーディネーションを施された後は、ジオン公国軍のニュータイプ専用機であるMAN-08エルメスを圧倒した。

ア・バオア・クーの攻防戦でシャア・アズナブルのMSN-02ジオンと死闘を演じ、相討ちになりながらもこれを撃破した。

クIIを撃破したのだった（余談だが、この戦闘でアムロ機以外の2機のガンダムやRXシリーズ数機が全損、損傷している）。

直後のサイド7脱出戦では、実戦でビーム・ライフルを初めて使用。一撃でザ

クIIを撃破し、「戦艦級のビーム」と呼ばれる威力を見せ付けている。

その後も民間人のはずのアムロに任されたガンダムは、単独での大気圏突入や、戦闘機を相手とした空中戦を行うなど、MSの常識を超えた能力を発揮し、ジオン公国軍将兵から連邦の「白いヤツ」として恐れられるようになっていった。

本来ならジャブローに直行するはずだったホワイトベースが、オデッサ作戦への参加を命じられたため、ガンダムも北米からアジア方面、ヨーロッパへと転戦した。

この中でガンダムは、格闘戦重視の「MS・07B グフ」や、ホバー走行能力を持つ重MSの「MS・09 ドム」などの局地戦用MSと交戦。これらのMSには「青い巨星」ランバ・ラルや「黒い三連星」などのジオン公国軍の誇るベテランパイロットが搭乗してい



たが、いずれも撃破している。

さらに、「MSM・03 ゴッグ」に代表される水陸両用MSとの水中戦すら制し、重力下戦闘における万能性と戦闘能力を証明したのだった。

単純に性能だけで見ると、時間の経過とともにガンダムのアドバンテージは小さくなっていくはずだった。だが、宇宙へと舞い戻ったガンダムは、キャメル・パトリール艦隊戦やコンスコン艦隊戦でもその戦闘能力を発揮し、ソロモン攻略戦では宇宙攻撃軍司令ドズル・ザビ中将が駆る強力無比のモビルアーマー「MA・08 ビグ・ザム」を撃破するという活躍を見せている。

この活躍の裏には、ニュータイプとして覚醒しはじめていたアムロの能力があった。しかし、自身の能力が増すにつれ、アムロはガンダムの性能に不満を持ちはじめていたのである。そこでアムロの反応速度に対応するため、強化策としてマグネット・コーティング処理が施された。

こうしてRX・78・3仕様となったガンダムは、サイコミュのようなニュータイプに対応した装備を持たないにも拘らず、ア・バオア・クー戦ではシャア・アズナブル大佐のサイコミュ搭載機「MSN・02 ジオング」との激戦を演じたのだった。

ア・バオア・クー戦でアムロのガンダムは失われることになったが、その伝説的高性能と活躍が語り継がれ、戦後のガンダム・タイプMSの開発を促したのである。

主力MSジムの開発

「V作戦」では、高性能試作MSのRXシリーズが注目されるが、作戦の本命は主力MSの開発生産とMS運用法の確立にあった。

その主力MSこそ、「RGM・79 ジム (GM)」である。

ジムは、RX・78 ガンダムをベースとした主力MSだが、あまりに高コストなガンダムをそのまま量産するのは不可能だったため、徹底した簡素化が図られている。

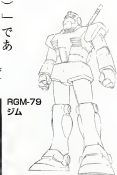
代表的な変更点だけでも、各部形状や兵装の簡素化、コア・ブロック・システムの排除、ルナ・チタニウム合金からチタン系合金への装甲材質変更などがあり、一説にはガンダムの二十分の一にまで低コスト化されたといわれている。

ただし簡素化されたとはいえ、簡易型ビーム・ライフルのビーム・スプレーガン（ボウワ社のBR・M79C・1）を持つほか、ビーム・サーベル（VCU・505EX・V・B/Ver. 021）とシールド（RX・M・Sh・VT/S・008）はガンダムのそ

MS-09Rをビーム・サーベルで撃破するRGM-79ジム。初期生産型は急造機イメージが強いが、ジオン公国軍製MSを超える性能を有していた。



RGM-79
ジム



BR-M79C-1
ビーム・スプレーガン

れと同等で、白兵戦用MSとしての能力はザクⅡ以上であった。

また、ジェネレーター出力はMS・09Rリック・ドムを超える1250kw、スラスター総推力に至ってはガンダムと同じ55500kgに達しており、当時のジオン公国軍MSと互角以上に戦える基本スペックを有していたのである。

このようにジムは、コストと性能のバランスが配慮された優秀な主力MSだったのだが、その評価は決して高くはなかった。

この背景には「先行量産型」と呼ばれる、最初期に量産されたジムの存在があった。

地球連邦軍がMSの本格的量産を開始したU.C. 0079、10ごろに生産された先行量産型のジムは、MSの定数を確保するために粗製濫造された機体が多かった。このためカタログスペック通りの性能を発揮できず、連邦軍将兵には不評であった。

後に、基本設計通りに製造された後期生産型が登場したが、ソロモン攻略戦やア・バオア・クー戦に投入された大半のジムは11月下旬から投入された先行量産型だった。

それでもジムは、ジオン公国軍のMSに対抗できる数少ない兵器であり、一年戦争末期の地球連邦軍を支え、勝利に導いた立役者であることは間違いないかった。



基礎設計に優れたRGM-79は多くのバリエーションに発展し、一年戦争末期にはジム・コマンドをはじめ、多数の改修機が運用された。



伝説を築いたパイロットたち



アムロ・レイ少尉

ガンダム。伝説。最大の立役者が、アムロ・レイ少尉（一年戦争時の正式任官後。曹長ともいわれる）であることに異論を挟む余地はない。

アムロ・レイは、サイド7遭遇戦でRX-78-2ガンダムに搭乗し、史上初のMS対MSの実戦でMS-06FザクⅡを撃破すると、終戦までの三ヵ月以上に亘って最前線で戦い続けた。一年戦争での撃墜スコアは、艦船9隻、MS142機とも伝えられ（モビルアーマー2機、または5機が加えられることもある）、その驚異的な戦闘能力から「一年戦争最高のニュータイプ」との呼び声も高い。

しかし、アムロ・レイは正規の訓練を受けた軍人ではない。それどころか、ガンダムに初めて搭乗した際には、偶然ガンダムのマニユアルを手に入れた行きがかり上、勢いで乗り込んだだけだったのである。

成り行きでガンダムのパイロットとなったアムロは、短期間の内に驚くべき成長を遂げ、正規の軍人をも凌駕する戦闘能力を発揮した。そしてジオン公国軍の「赤い彗星」

シャア・アズナブル少佐（後に大佐）と互角以上に渡り合い、ジオン公国軍宇宙攻撃軍の「青い巨星」ランバ・ラル大尉や突撃機動軍の特務小隊「黒い三連星」といった歴戦の兵士を撃破するなど、突出した戦果を挙げた。

その結果が、連邦の「白いヤツ」と恐れられたガンダムの名声に繋がり、終戦直前のア・バオア・クー戦では突撃機動軍の司令官であるキシリア・ザビ少将が、たった1機のガンダムを警戒するという事態にまで発展したのだ。

勿論、RX・78 ガンダムは名機の中の名機といえる高性能MSであった。だが、アムロ少尉の突出した戦闘能力、そしてアムロ少尉とシャア・アズナブル大佐の因縁や、ニュータイプの少女ララ・スン少尉との出会いなどのエピソードがなければ、戦後何十年にも亘って語り継がれるほどの存在にはならなかったであろう。

一年戦争後のガンダム・タイプMSのパイロットたちが、アムロ・レイと比較されることも、このような背景があることは間違いない。

このように、一年戦争での「ガンダムⅡアムロ・レイ」という図式は不動のものとなっているが、実際にはアムロ少尉機以外のRX・78系列機も多数存在しており、一年戦争での運用例も知られている。

当然それらの「ガンダム」には、異なるパイロットが配属されていた。

その中でも複雑なのが、アムロ少尉用として実戦投入されるはずだった「ニュータイプ



クリスチーナ・マッケンジー中尉

用ガンダム」RX・78NT-1アレックスである。アレックスの「シェーフィッター」と呼ばれる機体調整を担当した士官が、クリスチーナ・マッケンジー中尉だった。

その任務からも分かるように、マッケンジー中尉はアレックスの正式なパイロットではなかった。しかし、秘密裏にアレックスが搬入されていたサイド6のリボア・コロニーを、ジオン公国軍特殊部隊が襲撃。これに対応するため、マッケンジー中尉はアレックスに搭乗し出撃している。戦闘は2回に及び、最終的にアレックスは中破、マッケンジー中尉も負傷した。この結果、アレックスはアムロ少尉の手に渡らないまま、終戦を迎えることになる。

ほかに有名なガンダム・タイプMSのパイロットとして、RX・79「G」陸戦型ガンダムのシロー・アマダ少尉以下「第08MS小隊」のメンバーが知られている。

極東方面軍機械化混成大隊には、陸戦型ガンダムが多数配備されており、同隊隷下



シロー・アマダ少尉



民間人のアムロ・レイがRX-78を操縦した一方、戦跡の混乱でMSに乗ることが叶わなかったテストパイロットもいたという。

の第08MS小隊にも3機の陸戦型ガンダムが配備されていた。この3機には、小隊長のシロー・アマダ少尉、カレン・ジョシユア曹長、テリー・サンダースJr. 軍曹の3人が搭乗することが多かった(サンダース機にミケル・ニノリッチ伍長が搭乗したこともある)。

アマダ少尉は、部下に「甘ちゃん」と呼ばれるほどの理想主義者で戦争向きの性格ではなかったが、MSパイロットとしての腕は確かで、小隊での連携戦闘は当然のこと、単独戦闘でも高い戦果を残した。ジョシユア曹長とサンダース軍曹も共に高い練度を誇るパイロットで、特にサンダース軍曹は第08MS小隊着任以前にエースとなっていた。

未確認ではあるが、「RX・78・4 ガンダム4号機」のルース・カッセル中尉、「RX・78・5 ガンダム5号機」のフォルド・ロムフェロー中尉、RX・78・6 ガンダム6号機「マドロック」のエイガー少尉、「RX・79BD・1 ブルーデイスティニー1号機」および「RX・79BD・3 ブルーデイスティニー3号機」のユウ・カジマ少尉なども、一年戦争時のガンダム・パイロットであった。

コジマ大隊第08MS小隊のメンバー。スパイ容疑をかけられたシロー・アマダを信頼し、彼を支えて奇襲的な機東戦線を開いた。



陸戦型ガンダム

SPEC

全高：16.0m

本体重量：52t（全機重量：73.0t）

ジェネレーター出力：1.35MW

スラスター推力：52,000kg

装甲材質：ルナ・チタニウム合金

武装：100mmマシンガン、180mmキャノン

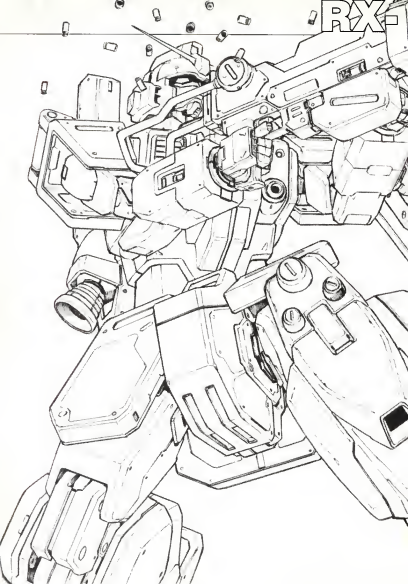
ビーム・ランチャー、ミサイル・ランチャー

ゲーム・ロイフル、ビーム・サーベル×2

シールド・シールド、腕部バウカン砲

腕部マシナ・ランチャー

RX-78



一年戦争時のガンダムの派生型

RX・78 ガンダムから派生したMSは、量産機のジムだけではない。一年

戦争時、ジムとは異なる必要性からいくつかのガンダム・タイプMSが開発されていた。

その中でも最初期に誕生したのが、「RX・79 [G] 陸戦型ガンダム」である。

一刻も早くMSを戦場に投入したかった地球連邦軍（特に陸軍）だったが、ジムの開発と量産に時間がかかることも分かっていた。

そこでU・C・0079、07のガンダム開発直後、使用されなかったガンダムのパーツを再利用して、MSの開発計画がスタートした。

「RX・79計画」と呼ばれたこのプロジェクトでは、先行試作量産型に分類される陸戦型ガンダムが開発されている。また、この生産ラインを流用し、陸戦型ガンダムとほぼ同性能のRGM・79 [G] 陸戦型ジムも生産された。

低クリアランスのパーツを流用した陸戦型ガンダムだが、重力下での運用に限定した設計により、RX・78に匹敵する性能を獲得していた。また、多彩な武装と装備運搬／換装機能を持ち、運用柔軟性では原型機を凌ぐ部分もあった。

こうして誕生した陸戦型ガンダムは、9月末ごろには極東方面軍機械化混成大隊、通称



RX-79 [G]
陸戦型ガンダム



RX-78の余剰パーツを流用したRX-79 [G]は維持が難しく、ガンダムEz-8のような現地改修機も開発されている。



RX-78NT-1アレックス



RX-78NT-1 アレックスにはチョバムアーマーによるフルアーマー案もあり、サイクロプス隊の襲撃時に本装備を使用していた。

コジマ大隊を中心に配備され、戦線の維持や戦争末期の攻勢で戦力の中核を占めた。

ガンダムの量産化を目指した陸戦型ガンダムが開発される一方で、それとは逆の発想で開発されたガンダム・タイプMSも存在した。それがアムロ・レイ専用機として開発された「ニュータイプ用ガンダム」こと、「RX・78NT・1アレックス」である。

アレックスは、ジオン公国軍のニュータイプ専用機のようにサイコミュこそ搭載していないが、マグネット・コーティングを前提にした設計や、最初期型の全天周モニターとリニア・シートにより、アムロの反応速度を十全にフォローできるようにになっていた。

これらの処置により、アレックスの反応速度は従来機の3倍に達していたといわれるが、あまりにも過敏な設定の機体であったため、アムロ以外の人間では性能を引き出せないという問題もあった。

ここが、一般パイロット用の陸戦型ガンダムとアレックスの最大の違いといえる。

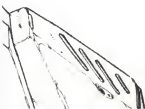
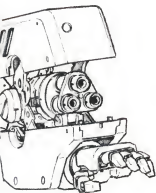
リボー・コロニーでの調整中、ジオン公国軍特務部隊の襲撃を受けて中破したため、実戦に投入されることはなかったが、アレックスこそがRX・78・3を凌駕する「一年戦争最強MS」だったことは疑問の余地がないだろう。

RX-78 NT-1

アムロ・レイのために開発された
ニュータイプ仕様の試作機

アレックス

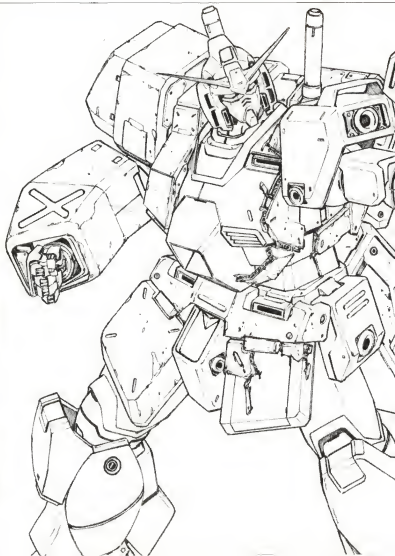
▶ MOBILE SUIT FILE. 03



SPEC

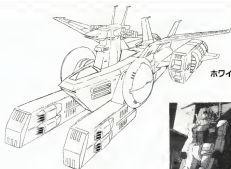
全高：18.0m
本体重量：40.0t（全機重量：72.5t）
ジェネレーター出力：1,420kW
スラスター推力：174,000kg
装甲材質：ルナ・チタニウム合金
武装：ガンリフレ・ガン×2
ビーム・サーベル×2
頭部リフレガン×2
ビーム・ライフル、シールド

機体解説



ホワイトベース

戦火をくぐり抜けたガンダムの母艦



ホワイトベース



RXシリーズMSの性能の高さとそれらを効果的に運用できたことが、ホワイトベース隊の生存と戦果に繋がったといえる。

一年戦争におけるRX-78系列機を運用した部隊として最も有名なのは、アムロ・レイのRX-78-2を運用したホワイトベース隊（ジャブロー攻略戦直後に第13独立部隊、または第13独立戦隊となった）である。

ホワイトベース級1番艦（ベガス級強襲揚陸艦2番艦ともいわれる）ホワイトベースを母艦とするホワイトベース隊は本来、試験中のRXシリーズ受領のためにサイド7に寄港した部隊に過ぎなかった。しかし、サイド7遭遇戦においてバオロ・カシアス艦長（負傷説あり）を含む正規軍人のクルーの大半を失い、少数の士官候補生と民間人のみでの航海を余儀なくされたうえ、半ば強制的に正規軍に編入されている。

ホワイトベースやRX-78ガンダムに代表される

「V作戦」関連装備を持つホワイトベース隊は、それ故にジオン公国軍の追撃を受けたが、アムロ・レイのガンダムの活躍やブライト・ノア艦長の指揮などにより、危機を切り抜けていった。

さらに地球方面軍司令ガルマ・ザビ大佐を戦死に追いやったほか、ゲリラ戦を得意とするランバ・ラル隊を壊滅させるなどの戦果を挙げたことから、敵味方の注目を集めることになった。

ホワイトベース隊が行った一連の戦闘では、アムロ・レイのガンダムは当然のこと、カイ・シデンのRX・78・2ガンキャノンや、ハヤト・コバヤシのRX・75ガンタンク（後にガンキャノンに乗り換えたが、乗り換えはなかったともいわれる）、セイラ・マス



パオロ・カシアスは熟練の艦長だったが、サイド7の戦闘で負傷してホワイトベース艦長の座をブライト・ノアに譲った。



ブライト・ノア

民間人上りのクルーで構成されたホワイトベース隊は、実戦で驚異的な戦果を残し、ニュータイプ部隊として知られるようになった。





補充兵としてホワイトベース隊に配属されたスレッガー・ロウは、軍人らしからぬ言動で隊に馴染んだが、ソロモン戦で戦死した。



リュウ・セイはホワイトベース隊の数少ない正規兵で、パイロットとして活躍しただけでなくクルーの精神的な支柱にもなった。

とスレッガー・ロウのFF・X7Bstコア・ブースター（Gファイターとの説もある）などが投入されている。

こうしてホワイトベース隊は、「V作戦」の試験部隊としての側面を強く持つと共に、装備・兵員ともに当時の地球連邦軍でも最高の質を誇る部隊となっていたのである。

これらの活躍によりホワイトベース隊は、レビル將軍らには「ニュータイプ部隊」として期待をかけられ、ジオン公国軍からはコードネーム「木馬」の部隊として危険視されるようになっていた。ただし、レビル將軍やジオン公国軍からの高い評価に反して、地球連邦軍首脳部の大半からは疫病神のような扱いを受けており、闇部隊として投入されることになってしまった。

これは、主力MSの生産開始に伴い試作MSの必要性が低下したことや、レビル將軍による優遇措置からレビル派閥と思われたことなどが原因とも考えられる。

それでも、短期間で地球連邦軍を代表するエースパイロットに成長したアムロ少尉同様、ジオン公国軍の軍人を

上回るほどの戦闘技術を身に付けていたホワイトベース隊は、母艦ホワイトベースを失ったものの、一年戦争の最後の大規模戦であるア・バオア・クー攻略戦を生き延び、生きる伝説としてその名を轟かせたのだった。

ア・バオア・クー戦後にホワイトベース隊は解散となり、元隊員たちはプロバガンダの一環としてメディアへの露出が増えたが、次第に表舞台には姿を現さなくなった。

この背景にはニュータイプを危険視する地球連邦首脳部の思惑が介在していた。軍に残ったブライトやアムロ、ハヤトらは開戦に追いやられたほか、セイラ・マスやカイ・シデンらの軍籍を捨てた者たちも、危険人物としてマークされた。彼らが再び歴史の表舞台に現れるのは、U.C. 0087のグリプス戦役勃発後のことである。

このようにガンダムの母艦として勇名を馳せたホワイトベース以外にも、一年戦争時にガンダム系MSを装備した艦や部隊は存在している。

RX・78NT・1アレックスの試験を担当したG・4部隊、多数のRX・79「G」陸戦型ガンダムを配備された極東方面軍機械化混成大隊などが特に有名である。

ほかにも、ア・バオア・クー戦に参加したホワイトベース級ブランリヴァル（RX・78・3 G3ガンダムを装備）や、準ホワイトベース／ベガス級サブレットを旗艦する第16独立戦隊（RX・78・4ガンダム4号機とRX・78・5ガンダム5号機を装備したほか、RX・77・2ガンキャノンも配備）などが知られている。

Chapter02：デラース紛争

U.C.0083

デラース紛争

0079

0080

0083

0087

0088

0093

0123

0153



THE LEGEND OF MOBILE SUIT GUNDAM

DATA FILE

OVA

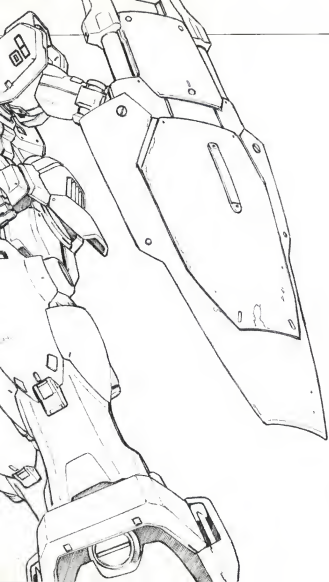
『機動戦士ガンダム 0083 STARDUST MEMORY』

1991年5月23日～1992年9月24日／バンダイビジュアル／
第1巻2時間、第2巻1時間30分、第3巻、4巻は各50分／全4巻

MOVIE

『機動戦士ガンダム 0083 ジオンの残光』

1992年8月29日公開／松竹系／1時間50分



RX-78GP01

RX-78の設計思想を踏襲した
多用途・白兵戦用の試作1号機

ガンダム試作1号機 ゼフィランサス

SPEC

全高：18.3m

全重量：37t

ジェネレーター出力：1.796W

スラスター推力：108,000kg

装甲材質：ルナ・チタニウム合金

武装：ビーム・ライフル

ビーム・サーベル（ビーム・ガン兼用）×2

頭部・腕・脚×2、シールド





RX-78GP01
ガンダム試作1号機



地球連邦軍の「ガンダム開発計画」で開発された試作機のひとつで、「ゼフィランサス」というコードネームを与えられたガンダム・タイプMS。

ほかの「ガンダム開発計画」系試作MS同様、アナハイム・エレクトロニクス社で開発された。

高度な汎用性を持つ白兵戦用MSというだけでなく、コア・ブロック・システムや教育型コンピュータの搭載、

ビーム・ライフルおよびビーム・サーベルを装備するなど、RX-78 ガンダムの設計思想をほぼそのまま踏襲したMSである。一言で説明すると「一年戦争最強MS」RX-78のバージョンアップ機といえるMSであった。

しかし、「その時点における最高性能を持つMS」といった計画コンセプトや、地球連邦系とジオン公国系の技術融合によって生み出された新技術により、そのカタログスペックは、RX-78は当然のこと、後のグリプス戦役期のMSを超えるものとなっている。

ガンダム試作1号機が特殊だった点は、ノンオプションでの万能性を目指すのではなく、ユニットの換装により多用途性を確保していることである。具体的には、大気圏内ユニットと宇宙用ユニットが用意され、これを換装することで各領域での運用に特化できた。

宇宙用ユニットを装備した機体はRX-78GP01-Fb ガンダム試作1号機「フルバーニアン」と呼ばれ、バックパック増設式の偏向推進器「ユニバーサル・ブースト・ポッド」や多数の姿勢制御用バーニアにより、当時最高クラスの機動性と運動性を獲得していた。

A black and white photograph of the RX-78GP01-Fb Gundam in a dynamic pose against a starry space background. The Gundam is shown from a low angle, looking up at its torso and head. It has a distinctive design with large, angular armor plates and a prominent beam rifle held in its right hand. The lighting creates strong highlights and shadows, emphasizing its mechanical details.

RX-78GP01-Fb

U
N
I
T

頭高：18.5m
本体重量：43.2t（全機重量：74.0t）
ジェネレーター出力：2,045kW
スラスター推力：234,000kg
装甲材質：ルナ・チタニウム合金
兵装：頭部バルカン砲×2
ビーム・ライフル（ジョーテ内蔵）
ビーム・サーベル×2
専用ビーム・ライフル、シールド

地球連邦軍の本格的なMS開発の幕開けと アナハイム・エレクトロニクス社の台頭

「連邦軍再建計画」と大艦巨砲主義の残滓

一週間戦争やルウム戦役、それに続く地球侵攻作戦で、地球連邦軍はジオン公国に連敗を喫した。しかし、総合的MS関連開発計画「V作戦」や艦隊再建プロジェクト「ピンソン計画」で戦力を再建すると反撃に転じ、一年戦争に勝利したのである。

一年戦争末期の戦闘では、戦力を再編した地球連邦軍が圧倒的な物量でジオン公国軍を撃破したものの、被った損害も多く、組織、戦力共に疲弊していた。

また、終戦過程でジオン公国は瓦解し、地球連邦の傀儡国家とまで呼ばれるジオン共和国がサイド3に樹立されていたものの、それを認めずに地下に潜伏した旧ジオン公国軍残党の総戦力は、膨大な量に及ぶと予想されていた。

ほかに、ジオン共和国にこそ賠償金は科されなかった（後の「コロニー再生計画」などで実質的な賠償を科された）が、終戦過程において地球連邦軍将兵によるサイド3住民への暴行事件が発生している。しかし、地球連邦・ジオン共和国双方が事件を黙認したと

いわれており、反地球連邦活動に身を投じるものを増やす結果となった。

地球連邦軍の弱体化や反地球連邦分子の存在が、新たな戦乱の火種となることは容易に予想された。これに加え、既得権益確保を目的とした軍部の働きかけもあり、U.C. 0081. 10. 13、地球連邦議会は新兵器の開発や生産、軍の再編などを柱とする「連邦軍再建計画」を可決したのだった。

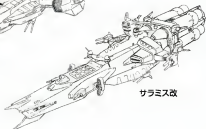
ここで再び浮上したのが、「大艦巨砲主義」と呼ばれる宇宙艦艇重視派の存在である。

一年戦争の戦訓では、MSこそが戦力の主軸であると共に、宇宙艦艇はMS母艦や支援プラットフォームとしての機能が重視されることを示していた。

一年戦争後の地球連邦軍には、旧レビル閥を中心にMSに理解のある高級将校も多数存在していた。しかし、その一方で、宇宙艦艇を推す大艦巨砲主義勢力も根強く残っており、「連邦軍再建計画」では



パーミンガム



サラミス改

MS運用能力が低いマゼラン改級宇宙戦艦やサラミス改級宇宙巡洋艦、そして大艦巨砲主義の権化といえる巨大宇宙戦艦バーミンガムが建造された。

一年戦争の終戦によって、正規軍同士が交戦する機会は減少、MSを中心とする戦術が必ずしも有効ではなくなる可能性も少なからずあった。

だが、旧ジオン公国軍残党勢力はMSを保有していたうえ、一年戦争緒戦のジオン公国軍の戦果を顧みるなら、総戦力に劣る側はMS重視の戦略を採ることが予想された。つまり、一年戦争後の仮想敵とされた旧ジオン公国残党との戦闘では、宇宙艦隊は効果的な戦力とはいえず、MSこそが戦力の中心となることは間違いなかったのである。

こうしてU.C. 0081、10、20、軍部MS派の後押しもあり「連邦軍再建計画」の一環として「ガンダム開発計画」が開始されることとなった。

「ガンダム開発計画」の推進

一年戦争末期のア・バオア・クー戦直前、「V作戦」の立役者だったレビル將軍は戦死していたが、彼の後継者とされていたジョン・コーウェン中將の主導により「ガンダム開発計画」は進められた。

「ガンダム開発計画」の目的は、その時点における最高の性能を持つ機動兵器、いい換



ジョン・コーウェン中将

えれば「最強の機動兵器（MS）」の開発である。それを実現するための手段として、地球連邦系とジオン公国系の技術融合と発展が求められていた。

この背景には、戦後の資料接収によって再認識されたジオン公国の高度な技術力が存在している。RX-78 ガンダムの開発により、MS 関連技術における劣勢を覆したかに思われた地球連邦軍だが、主力MSやニュータイプ関連技術などを含めた総合的な技術力は、ジオン公国の方が優れていた。このため一年戦争後の地球連邦軍は、ジオン公国系技術の解析、吸収に力を入れていた。

旧ジオン公国軍残党勢力との戦闘は、地球連邦軍が得意とする物量作戦が効果を発揮しにくい、ゲリラ的なものになると予想された。そのため、軍上層部はMS単独の能力向上で事態に対応しようとした。

つまり「ガンダム開発計画」は、MSに関する多角的な計画だった「V作戦」とは異なり、技術開発を目指した「RX計画」に近いプロジェクトだったのである。

計画にガンダムの名称が用いられたのも、「最強のMS」としてのガンダムのネームバ

リユーヤ、それを利用した予算獲得のためであった。ガンダムの名前が必要だったことは、「ガンダム開発計画」で開発された試作機の中に、試作2号機のようにガンダムとは機能の上で直接の関係を持たないにも拘らず、RX-78の型式番号が与えられた機体が存在したことからも理解できる。

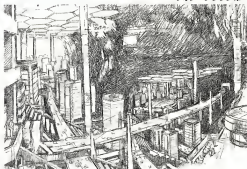
こうして極秘プロジェクトとして進められた「ガンダム開発計画」はその存在すら秘匿され、予算上でもそれと分らないように偽装されていた。

これは計画への参画企業として、アナハイム・エレクトロニクス社のみが指定されたことから理解できるが、理由はそれだけではない。

アナハイム・エレクトロニクス社は、家庭用電化製品からコロニー建設に至る広範なテクノロジーを持つ超巨大複合企業で、一年戦争中からRGM-79ジムやその武装を生産し、軍関連資材の納入なども行っていた。

戦後になると、ジオン公国系MSメーカーのZEONIC社だけでなく、「RX計画」で

フォン・ブラウン市



コア・ファイターを開発したハービック社、ビーム・ライフルの開発生産に携わったブラックス社やボウワ社なども吸収、合併、あるいは傘下に収めていた。こうしてアナハイム・エレクトロニクス社は、当時の地球圏では最高のMS開発技術を持つ企業に成長する。

これは「ガンダム開発計画」における契約問題の事務処理を一括化できること、機密保持が容易になることを意味していた。しかし、何よりも地球連邦軍の求めるMSを開発する技術力を持つ企業が、事実上アナハイム・エレクトロニクス社だけであることが最大の理由であった。

こうして、地球連邦軍とアナハイム・エレクトロニクス社の共同開発という形で開始された「ガンダム開発計画」は、軍部が提示したコンセプトに対し、アナハイム・エレクトロニクス社が複数の試案を提出。その後、GPシリーズと呼ばれる試作機が開発されるというプロセスで進められた。

この発注形式からも推察できるように、地球連邦軍は簡単な指標を提示するだけで、試作機の設計開発はアナハイム・エレクトロニクス社が行っている。このため、計画自体がアナハイム・エレクトロニクス社の主導であったともいえる。

このような状況下においてアナハイム・エレクトロニクス社は、ふたつの開発チームを開発計画に当たらせた。それが、地球連邦系技師を含む「クラブ・ワークス」こと先進開発事業部と、旧ZEONIC社系主体の第二研究事業部である。

時代を超える性能を与えられながら 歴史の闇に消えたガンダムたち

ガンダム試作1号機の開発と基本構造

RX・78GP01 ガンダム試作1号機は、RX・78 ガンダムのコンセプトを踏襲するとともに、一年戦争後に培われた新技術を盛り込んだバージョンアップ機である。

開発は、地球連邦系技術に強い先進開発事業部が担当し、一年戦争「最強」のガンダムを、地球連邦系とジオン公国系の融合技術や最新技術で作り上げた、二重の意味で「最強」のMSであったことは前述の通りだ。

RXシリーズから引き継がれたコア・ブロック・システムは、地面方向に対して垂直に格納される旧来のバーティカル・イン・ザ・ポディ方式から、主要部が地面方向と並行に合体するホリゾン・イン・ザ・ポディ方式へと改められた。

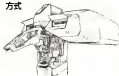
コア・ファイターも、FF・XII コア・ファイターIIという新型機である。

ホリゾン・イン・ザ・ポディ方式の利点は、コア・ファイターの推進器をMS形態でのメイン・スラスターに転用できることで、デッドウェイトが少ないという特徴があった。

FF-XII コア・ファイターII



ホリゾン・イン・ザ・ボディ方式

RX-78GP01
バックパック

試作1号機のコア・ブロック・システムは、開発時に剛性の低下と重量の増大という問題点が指摘されたが、アナハイム・エレクトロニクス社のSE二ナ・パーブルトンが提示した設計余裕の見直しとソフトウェアの工夫により克服されている。

ただし、ホリゾン・イン・ザ・ボディ方式には構造上避けられない問題もある。

この形式のコア・ブロック・システムは、胸部のほぼ全体を占有するため、胴体から腕部への動力系統配置が極めて難しいのだ。当然、コア・ファイターへの腕部搭載は不可能で、コア・ファイターと腕部の間にはほとんどスペースがない。

そこで、腕部自体に独立した動力系を搭載するという案が採用された。

通常MSの四肢ユニットは胴体側からの動力供給で稼働されるのだが、試作1号機では四肢が独立して動作するようになった。このシステムは脚部にも採用されている。

これを可能としたのは、地球連邦系とジオン公国系の技術融合によって完成した、小型かつ高トルクのアクチュエーターであり、グリプス戦役期に一般化するMS用駆動内骨格「ムーバブル・フレーム」にも繋が



る技術であった。

コア・ブロック・システムの採用は、教育型コンピュータの搭載も意味する。そして、それを頭部のコ・プロセッサによって補助するという形式は、ガンダムと同じである。

ただし、試作1号機のコ・プロセッサは、機体各部のセンサー類を統合制御する機能も持ち、頭部ユニットの「MSの眼」としての役割がより大きいものとなっている。

これらの新機構や改良による試作1号機の総合性能は、RX・78ガンダムと比較して、約30%も向上していた。

宇宙用試作1号機・フルバーニアン[◇]の開発と構造

試作1号機の特徴のひとつとして、ガンダムのように単独での万能性を求めるのではなく、ユニット換装によって大気圏内戦仕様と宇宙戦仕様を使い分ける点が挙げられる。これが、試作1号機が万能MSではなく多用途MSと呼ばれる理由である。

当初予定された宇宙仕様の試作1号機は、コア・ファイターIIを宇宙用に換装したものであった（脚部へのオプション装備や機体各部へのユニット増設も含む）。

しかし、試作1号機が戦闘で大きく損傷したため、当初の予定とは異なるRX・78GP01・Fbガンダム試作1号機・フルバーニアン[◇]として再生された（コア・ファイ

ターⅡもFF・XⅡ・Fb 宇宙用コア・ファイターⅡとなった)。なお、型式番号は制式のものではない。

フルバーニアンの最大の特徴は、バックパックに増設された2基のユニバーサル・ブースト・ポッドである。このユニバーサル・ブースト・ポッドは、RX・78GP02Aガンダム試作2号機で採用されたフレキシブル・スラスト・バインダーの影響が見られる、偏向式推進器の一種となっている。

ユニバーサル・ブースト・ポッドは、後のバインダーに近い装備であり、高い自由度を持つ基部と姿勢制御バーニア、大推力スラストにより、高度な機動性と運動性を機体に与えている。また、AMBACシステムのマスバランサーとしての役割も併せ持つっており、単なる偏向推進器以上の機能を有している。

Bパーツ（下半身）は、改装に合わせてほぼ完全に新造された。

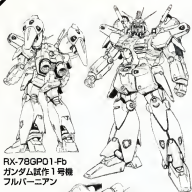
大型化された脚部の変更は顕著で、スラストの設置や脛部には大容量プロペラント・タンクが内蔵されたほか、足裏には4基の接地用クローが追加されている。

ほかにも、宇宙空間では不要となる胸部エアインテークが制動用のリバース・スラストに換装され、肩部延長ユニットの先端にも多数の姿勢制御バーニアが配置されている。このようにGP・01は完全な宇宙専用MSとして生まれ変わったのだった。

新機構採用や多用途化が図られた、 ガンダム試作1号機の武装

ガンダム試作1号機の兵装も、RX・78ガンダムのそれを継承したビーム・ライフル、ビーム・サーベル、シールド、バルカン砲などが装備されている。しかし、それらも技術開発や機体特性に合わせた新規設計により進化を果たしている。

主兵装であるビーム・ライフルは、ボウワ社のXBR・M・82M（フルバーニアンに



RX-78GP01-Fb
ガンダム試作1号機
フルバーニアン



FF-XII-Fb
宇宙用コア・ファイターII

改装される以前のモデルはXBR・M・82・05Hともいわれる）である。RX・77ガンキャノン用の後継機として計画されたため射程に優れるほか、ブラッシュ社のビーム・ライフルコネクタにマッチングするほどの拡張性も確保されていた。また、「ジュツテ」と呼ばれる防御用ビーム・サーベルが装備されている点も特徴であった。

このビーム・ライフルの特徴のひとつ

は、それまで内蔵式だったエネルギーCAPを換装可能なエネルギー・バック（Eバック）とした点である。それ以前にも、MS・14Fs用やRX・78・4用などのEバック式ビーム・ライフルは存在していた。しかし、いずれも大型モデルであり、通常サイズのビーム・ライフルとしては最初期のものであった。

なお、このEバックはアナハイム・タイプと呼ばれるコンパクトなモデルで、標準使用時のEバック出力は1.5MW、XBR・M・82Mでの発射回数は20発とされる（アナハイム・タイプのEバックは改良が続けられ、グリプス戦役期でも使用されている）。

ビーム・サーベル（大気圏内用A・E・Blas h・XB・G・07/Du・05）
Du・02、宇宙用A・E・Blas h・XB・G・07/Du・05）
は、ガンダムと同じくバックパックに2基を装備する。

このビーム・サーベルが特殊な点は、コア・ファイターII用ビーム・ガンと併用式となっていることで、構造的にはMSZ・010ZZガンダムのそれに近いものであった。

元々ビーム・ガンとしての威力は低く牽制程度にしか使えなかったが、宇宙用に改装された後にはジェネレーター出力の向上により実用的な火力を手に入れた。

シールド（大気圏内用RX・V・Sh・23F/S・04712、宇宙用R



XBR-M-82M
ビーム・ライフル



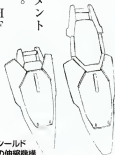
トリントン基地襲撃時に実戦装備が施されていなかったため、ビーム・サーベルだけで試作2号機との空戦に及んだ試作1号機。



ビーム・ライフルに内蔵された「ジュッテ」は近接防衛用の小型ビーム・サーベルで、運用する側にも瞬間の判断力と高い操縦技術を要求する装備である。

突発的事態から実戦に投入された ガンダム試作1号機

X・V・Sh・23F/S・04718)は、耐ビーム・コーティングによる防御力の向上のほか、伸縮機構による携行性の向上および慣性モーメントの軽減という副次効果もあった。これらの標準兵装以外にも、HF W・GMG・MG79・90mm ジム・マシンガンなどの地球連邦軍MS用火器を使用可能なほか、フルバーニアン用では3号機用のBLASH・XBR・L・83dという大型の試作ビーム・ライフルも検討されていた。



U・C・0083・09・29、フォン・ブラウン工場
でロールアウトしたガンダム試作1号機は、同年10月7



トリントン基地の戦闘において試作1号機は試作2号機に圧倒され、ジオン公国軍残党による2号機の奪取を許してしまった。

日、試験母艦となるペガサス強襲揚陸艦アルビオンに搬入され、オーストラリアのトリントン基地に向かった。この際、先行してロールアウトしていたガンダム試作2号機もアルビオンに搬入されている。なお、試作1号機は、地球での重力下試験が行われる予定であり、宇宙用装備はフォン・ブラウン工場に残されている。

10月13日、試験地のトリントン基地に入港したアルビオンだったが、旧ジオン公国軍残党で「ソロモンの悪夢」の異名を持つアナベル・ガトー少佐により、試作2号機が奪取されてしまった。しかも試作2号機は核弾頭を搭載した状態であった。

この際に応戦に出たのが、現場に居合わせたコウ・ウラキ少尉が搭乗した試作1号機である。試作1号機と試作2号機の初陣は格闘戦となったが、パイロットとしての技量に勝るガトー少佐機の前にウラキ少尉の試作1号機はまったく歯が立たなかった。

この事件を契機に試作1号機はウラキ少尉に任され、オーストラリア、アフリカでの追撃戦へと投入された。しかし、一連の追撃戦の中、ジオン公国軍残党のMSを凌駕する戦闘能力を見せた試作1号機だが、宇宙での対シーマ艦隊戦において重力下仕様のまま出撃

し、大破に等しいダメージを負ってしまう。

その後、フォン・ブラウンに運び込まれた試作1号機は、宇宙仕様のフルバーニアンに改装されると、直後の月面戦闘でMA・06 ヴァル・ヴァロを撃破するという戦果を挙げた。またコンペイトウでの観艦式警備では、「星の屑」作戦のためにソロモン海に集結しつつあったジオン公国軍残党のMSを多数撃破している。

しかし、11月10日の試作2号機による観艦式襲撃は阻止できず、核弾頭発射後の試作2号機と格闘戦の末に相打ちとなった。この際機体は失われたが、ウラキ中尉（戦時階級）は脱出しており、試作3号機に乗り換えている。

このような経過を見る限り、試作1号機の真価はフルバーニアンへの換装後に発揮されたと見るべきだろう。

これはウラキ中尉の操縦技術が向上していったことも一因だが、大気圏内ではジオン公国軍残党の局地戦用MSとの差が明確ではない上、ビーム兵器の威力が減衰することも原因と考えられる。しかし、宇宙空間では試作1号機の圧倒的なパワーを機動性や運動性という形で反映しやすかったことなどが理由と考えられる。

試作2号機を追跡する実戦の中で才能を開花させたコウ・ウラキは、コンペイトウを襲撃した試作2号機を相打ちとなりながらも撃破した。



アナハイム・エレクトロニクス社のシステム・エンジニアたち

「ガンダム開発計画」では、同社のトップクラスの技師たちが所属していた先進開発事業部と、吸収合併でアナハイム・エレクトロニクス社に移った旧 Z E O N I C 社系技術者らを中心とした第二研究事業部が開発の主体となった。中でも異彩を放っていた存在が「アナハイム・ギャルズ」と渾名される女性システム・エンジニア（SE）たちである。

特に有名だった人物が、ニナ・パーブルトンだ。フォン・ブラウン支社リバモア工場に務めていた女性で、当時21歳という若さにも拘らず、出向先の強襲揚陸艦アルビオンではガンダム試作1号機と試作2号機で専属のSEを任されていた（自身が関与したガンダム試作機に、異常なほどの愛着を抱いていたことでも有名だった）。

彼女は、動作プログラムの製作や補正だけでなく機械的なセンスにも長けており、コア・ブロック・システムに端を発する試作1号機の剛性の低下と重量増加の問題を、一挙に解決したといわれる。

ニナ・パーブルトン

その手法とは、各部門のわずかな設計の余裕を見つけ出して蓄積すると共に、搭載予定のソフトウェアに工夫を加えるというものであった。



これは、根気だけでなくMSに関する総合的な技術を身に付けていなければ不可能なもので、彼女が突出した能力を持つSEであることの証明でもある。

ガンダム試作3号機の専属SEも、女性であった。

3号機担当のルセット・オデビーはニナの同僚で、フォン・ブラウン支社リバモア工場MS開発セクションのSEを担当していた。

アナハイム・エレクトロニクス社が所有するドック艦ラビアンローズに出向し、試作3号機の専属SEとなったルセットは、前例がないほど複雑な試作3号機の管制システムの構築に携わっている。

また、それを使いこなせるセンスをコウ・ウラキ中尉（戦時階級）に見出し、彼を地球連邦軍の監視下にあった試作3号機に搭乗させるなど行動力にも優れていた。

結果的に「ガンダム開発計画」とデラーズ紛争に関与したニナは、北米のオークリー基地に事実上の左遷、ルセットは試作3号機を巡る白兵戦の中で死亡したが、彼女たちが

培ったテクノロ

ジーは、後のMS開発に少なからず貢献するこ

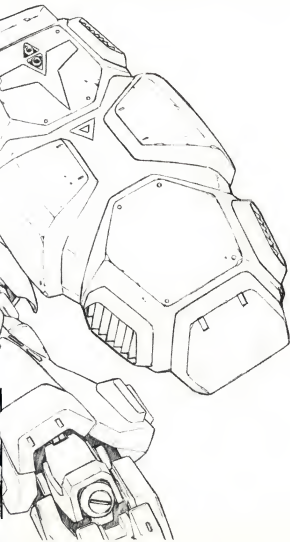
とになった。



ルセット・オデビー

PHYSALIS

▶ MOBILE SUIT FILE:05



機体解説

RX-78GP02A GUNDAM

RX-78の設計思想を踏襲した
多用途・白兵戦用の試作1号機

ガンダム試作2号機 サイサリス

0088

全高：18.5m

本体重量：54.5t

ジェネレーター出力：1,800kW

スラスター推力：155,200kg

装甲材質：ルナ・オメガ合金

武装：アトミック・バスター

頭部バルカン砲×2

ビーム・サーベル×3

ハイパー・バズーカ

フィールド（※印は要内蔵）



「ガンダム開発計画」において、核攻撃用として開発された試作機。コードネームは「サイサリス」。最強の戦略・戦術兵器である核反応弾と最強の機動兵器たるMSを組み合わせた——理論上「最強の兵器」といえるガンダム・タイプMSだ。

敵防衛網を突破し、核攻撃を実施、その後、戦域からの離脱という一連のプロセスを実現するため、大推力の「フレキシブル・スラスター・バインダー」や、核反応弾発射機「アトミック・バズーカ」、耐熱線・放射線・衝撃用として冷却装置を内蔵大型シールドと放射線減速材を充填した重装甲などが採用されている。

また、搭載する核反応弾は、戦術核に分類される「Mk-82核弾頭」である。実際の威力は戦略級であり、当時の地球連邦艦隊の30～40%を壊滅可能と試算されている。

このような絶大な核攻撃力に反し、通常兵器は近接防御用の頭部バルカン砲と格闘戦用のビー

ム・サーベルしか装備していなかった。これは核攻撃に特化した仕様によるもので、汎用性が無視されていたことの証明でもあった。

なお、地球連邦系中心の技術陣で開発された試作1号機や同3号機と異なり、この試作2号機を担当したチームは、一年戦争後アナハイム・エレクトロニクス社に合併吸収された旧ZEONIC社のメンバーを中心に編制されていた（同社は核兵器運用仕様のMS-06C ザクⅡの開発経験もある）。試作2号機の意匠や機構に旧ジオン公国系MSの影響が見受けられるのは、これが一因であった。



RX-78GP02
ガンダム試作2号機





ガンダム試作2号機の開発と構造

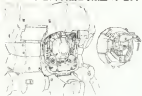
RX-78GP02A ガンダム試作2号機は、「核兵器を装備した機動兵器」というコンセプトで完成。最強の火力を持つ核兵器と、最強の機動兵器であるMSとが融合した機体——つまり試作1号機同様に本機もまた、二重の意味で「最強」の機体だったのである。

元々試作2号機は、通常兵器搭載の強襲用重MSとして開発されていたが、初期段階において核兵器運用MSへと設計変更されることになった。

MSに核兵器運用能力が求められた背景には、ミノフスキー粒子によってミサイルの誘導性能が著しく低下したことがある。宇宙では爆風が発生しないため、核兵器の威力は低下してしまう。それ故、強力な核兵器であっても狙った目標付近に正確に着弾させなければならなかった。さらに問題となるのが、核ミサイル自体が迎撃されかねないことで、これは一週間戦争においてMS-06 ザクⅡが核ミサイルを撃墜したことでも証明されていた（U.C. 0093の「シャアの反乱」でも核ミサイルがMSによって撃墜されている）。

核攻撃を成功させる確実な方法は、旧世紀の爆撃機のように、単独で敵防衛網を突破できる兵器に核兵器を搭載することである。その機動兵器にMSが選ばれたのは、当然の成り行きだった。また、このようなコンセプトのMSの開発が、旧ZEONIC社のメンバーを中心とした第二研究事業部に任されたことも、ある種の必然性を感じさせる。

GP02 コクピット外観と球殻型コクピット



GP02 コクピット内部

核兵器運用MSとして開発された試作2号機には、3つの機能——敵防衛網を突破可能な機動性、核兵器の運搬・投射能力、耐核兵器用防御システム——が求められた。

まず「敵防衛網を突破可能な機動性」を確保するために開発されたのが、「フレキシブル・スラスター・バインダー」である。詳しくは後述するが、試作2号機は背部に核兵器貯蔵装置を持ったため、一般的な高機動MSのような大推力のバックパックの搭載はできず、その仕様上、脚部を主推進器とすることも難しかった。

そこで開発陣が出した回答が、肩部に可動式推進器ユニットである「フレキシブル・スラスター・バインダー」を搭載するというものだった。その名が示す通り、四肢ユニットとは異なる形態で装備された可変推進器一体型のAMBACシステムで、このユニットだけでも一般的なMSを遥かに上回る推進力を発揮可能であった。また、姿勢制御能力も有し、大重量化せざるを得ない試作2号機に高い機動性を与えている。

「核兵器の運搬・投射能力」は、背部の核弾頭貯蔵装置と核兵器発射能力に特化したアトミック・バズーカによって実現した。

「耐核兵器用防御システム」は、試作2号

機のフォルムと直結している。

核爆発に耐えるには、熱線や放射線、電磁パルスや衝撃などへの対策が必須となる。

そこで試作2号機では、機体の大半を防護できる冷却機能付きシールドが用意されたほか、装甲には放射線減速材の充填や耐衝撃性能の向上が図られた結果、厚みが増している。脚部はシールドで保護できないため（脚部に主推進器を搭載できなかった要因である）、特に強力な耐熱、対衝撃能力が与えられた結果、著しく大型化。頭部ユニットはセンサー性能の低下を防ぐため、電磁パルスや衝撃などに対する防護措置が施されている。パイロット防護措置は、胴体ユニット全域に亘る複合装甲と緩衝材の多重化や耐衝撃性に優れた球殻型コクピット（全天周囲モニターではない）を採用。なお、コクピット内には放射線や電磁パルス対策のため、メイン・コンピュータや周辺電子機器も収納される。

核攻撃能力のみが重視された試作2号機の兵装

試作2号機の主兵装は、AE/ZIM・G・BAZ・0186・Aアトツミック・バズーカである（開発を担当したAE/ZIM社は、旧ジオン公国系MSメーカーのZIM MAD社がアナハイム・エレクトロニクス社に吸収合併されて誕生した）。

元来、大型バズーカの装備を前提としたMSであり、バズーカ用の弾頭として徹甲弾や

炸裂弾、ビーム攪乱膜散布弾、プラズマ・リーダー射出用多弾頭などが検討されていた。しかし、試作2号機のコンセプトが「核装備の機動兵器」に変更されると、バズーカは核弾頭発射に特化したアトミック・バズーカとなった。

アトミック・バズーカが特殊だった点は、核弾頭発射という仕様だけではない。

通常時のアトミック・バズーカは弾頭装填部（基部）とバレルが分割され、弾頭装填部は弾頭貯蔵装置の右側部に（実際には右肩後部のアームを介して繋がっている）、バレルはシールド裏の専用スペースにマウントされる。これは試作2号機とアトミック・バズーカが一体の存在であり、核運用機としてシステム化されていることの証明でもあった。

なお発射には、Mk・82核弾頭と加速用のロケット・モーターが弾頭装填部にインサートされた後、弾頭装填部にバレルを接続するというプロセスが必要であった。

その後、アトミック・バズーカで照準と初期加速を行って発射すると、バレルを飛び出した弾頭は後部に接続されたロ

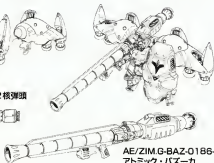
フレキシブル・スラスター・
バイナード



Mk-82核弾頭



アトミック・バズーカ基部



AE/ZIM-G-BAZ-0186-A
アトミック・バズーカ

ケット・モーターでさらなる加速を行い、所定の位置で核爆発を起こすようになっていた。

Mk・82核弾頭は、「レーザー核弾頭」あるいは「自己拘束型熱核爆弾」と呼ばれるタイプである。爆縮型核融合弾を超える破壊力を持ち、熱線と強烈な中性子線を放出している時間が数秒間にも亘るため、通常の熱線対策や放射線防護は役に立たない。

分類上は戦術核とされるが、その威力は戦略級のもので、当時の地球連邦艦隊の30%を破壊可能と計算されていた。ラジエーター・シールドとも呼ばれる大型の冷却用シールド(NR・Sh・02RX/S・00013)が搭載されたのは、これほどの規模の核爆発から機体を保護するためだったのである。

強力な核攻撃力を与えられた試作2号機だが、通常兵装は頭部のバルカン砲2門と腰部収納のビーム・サーベル(A・E・BlashAEXB・909L)2基しか装備していなかった。ビーム・サーベルは、アナハイム・エレクトロニクス社の重MS用標準装備として開発されたモデルの改良型で、強力ではあったが、射撃兵装がバルカン砲だけでは戦闘能力は限定されざるを得なかった。

これは、ほとんど全ての能力と機能を核攻撃に割り振った代償といえる。しかし、核攻撃後に試作2号機を攻撃可能な敵戦力がどれほど残存しているのかを考えれば、その程度の装備でも十分と判断されたことも間違いとはいえない。

しかし、少なすぎる通常火器が問題視されていたことも事実で、デラーズ・フリートで

は核使用後の試作2号機に、MS用自走砲台スキウレのビーム砲を転用したビーム・バズーカの搭載を検討していたという。また、「ガンダム開発計画」でもアトミック・バズーカの代わりにMLRS (Multiple Launch Rocket System) を搭載する支援型が提示されたという説があり、核バズーカを装備しない試作2号機が運用される可能性もあったのだ。

設計通りの性能を発揮した試作2号機

U・C・0083、10、13、オーストラリアのトリントン基地にて、ジオン公国軍残党組織「デラーズ・フリート」のエース・パイロット、アナベル・ガトー少佐が核弾頭を搭載したガンダム試作2号機を奪取。これは「星の屑」作戦という対地球連邦プランに同機が必要だったためで、ガトー少佐が操縦する試作2号機は、宇宙への離脱を目指した。

奪取直後、試作1号機と格闘戦となるも、敵パイロットが士官学校を卒業したての新米だったこと、格闘戦に限れば試

アトミック・バズーカの発射準備を行う試作2号機。核爆発の影響で左腕部が動作不良となったが、仕様通りの生存性を発揮した。



アナベル・ガトーは奪取した試作2号機でコウ・ウラキの試作1号機を圧倒し、本機の格闘戦性能の高さを見せ付けた。





核弾頭発射後に試作1号機の追撃を受け、ビーム・サーベルとバルカン砲だけで敵を追い詰めたが、結果的に機体を破壊された。

作2号機も十分な性能を持っていたことなどから、これに勝利。トリントン基地からの離脱に成功した。オーストラリア離脱直前に、試作1号機の攻撃でシールドを損傷するものの、アフリカに渡り、HLVでの地球から脱出している。

11月10日、コンベイトウの観艦式を襲撃した試作2号機は、高度な機動性で防衛網を突破すると、観艦艦隊に向けMk・82核弾頭を発射した。

この結果、観艦艦隊の三分の二以上に航行不能以上の損害を与えるという戦果を得る。さらに核爆発の中でも試作2号機は生存しており、その総合的な核運用能力が確かなものであることを明らかにした。

しかし、観艦式襲撃からの離脱の途中、フルバーニアン仕様の試作1号機と遭遇戦を演じた結果、相打ちとなり、ガトー少佐は機体を放棄している。左腕ユニットの不調と射撃兵装不足という状態でフルバーニアンと相打ちとなったのは、その基本性能が（ガトー少佐の手腕があったとはいえ）核兵器なしでも充分に通ずる証明である。

ガンダム試作3号機の開発と構造

RX・78 GP03 ガンダム試作3号機は、拠点防衛用の宇宙用巨大機動兵器で、試作1号機同様にアナハイム・エレクトロニクス社の先進開発事業部で開発された。

試作1号機や試作2号機と同じく、二重の「最強」性を持っているが、それは機動兵器の双壁を成すMSとMAを融合させたことに因る。巨大MAの中枢にMSを据えることで、MAの大火力と推進力、MSの汎用性と白兵戦能力を有する最強の機動兵器として完成したのである。

地球連邦軍が試作3号機に冠したコンセプトは明確ではないが、「膨大な通常兵装（大量破壊兵器の非搭載）による戦略的運用を想定」「MSとしてのカテゴリーを越えた、機動兵器としての最強性」「汎用性の高いMSの利点と攻撃力の高いMAの利点を兼ね備えた機動兵器」などといわれる。

これらの要素と拠点防衛用という仕様から見た場合、核兵器を装備しないという足枷こそあるが、やはり攻撃力や防御力、機動性など、あらゆる性能を最大限まで追求した「最強の機動兵器」という点がコンセプトと考えられる。そして、これら三要素を、同時に極限まで高める手段として、最も簡単な手段は機体を大きくすることである。

試作3号機はMSという形態にこだわっておらず、宇宙拠点防衛用という運用領域の制

限もあるため、機体の大型化はさほど問題ではなかった。そこでアナハイム・エレクトロニクス社は、ベイロードが大きく、仕様に制限のないMAを試作3号機のベースに選んだ。

しかしMAは、対MS格闘戦において著しく不利という欠点を抱えている。一年戦争でのRX・78ガンダムとMA・08ビグ・ザムの戦闘に見られるように、MAはMSの近接格闘攻撃で撃破されたケースがほとんどであった。

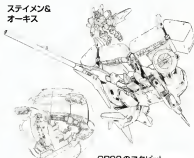
この問題の解決策として、MAにMSを組み込むという案が提示された。

つまり、攻撃力や防御力、機動性はMAに任せ、格闘戦ではMSを使用するのである。この発想は、U・C・0080年代中期に出現する可変MAや可変MSに近いものだが、実際にはRX・78用強化支援機Gファイターがヒントになったといわれている。

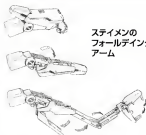
こうして開発が進められた試作3号機は、アームドベース。オーキス（「蘭」の意）。というMAユニットの中枢に、管制用のRX・78GP03Sガンダム試作3号機。ステイメン（「おしべ」の意）。を格納した機体となった。

オーキスの基本構造は、ブラットホームに大型推進器やクロー・アームを取り付けたシ

ステイメン&
オーキス



GP03のコクピット

ステイメンの
フォールディング・
アーム

ンブルなものとなっている。しかし、その全長は70mを超え、武装を含めた全長は140mに達するという超大型MAであった。

武装形態は、基本構造に大型ビーム砲やウェポン・コンテナなどを外装するものである。

これは、兵装の内装化を徹底していた旧ジオン公国軍のMAと比べると、洗練されていないように思えるが、兵装ユニットごと交換できるというメリットを持つ。それ以外にも管制を担当するMSに兵装を提供できるといった利点もあった。

試作3号機のシステムを司る管制用MSのステイメンも、特殊なMSであった。展長式のフォールディング・アームにより、オーキスのウェポン・コンテナからMS用兵装を引き出せるほか、緊急時のオーキスのメンテナンスやコア・ブロック・システムのような脱出機構としても機能した（コア・ブロック・システムを採用した仕様のステイメンも存在した）。

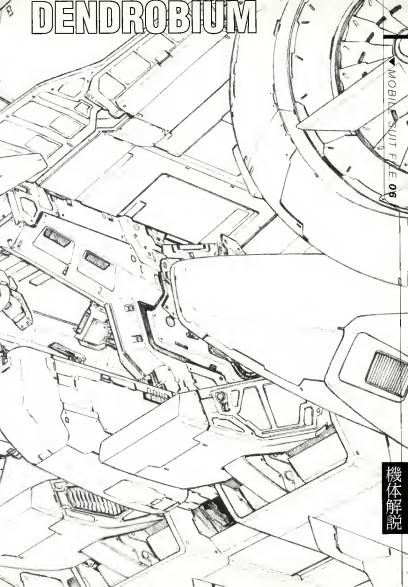
また、オーキスとの合体に用いられるテール・バインダーは、ステイメンに高度な機動性を与えており、ステイメン単独での性能は宇宙仕様の試作1号機に匹敵するという。

こうしてMAとMSが融合した試作3号機は、文字通り最強の機動兵器として完成しており、MSや宇宙艦艇でこれに対抗することは極めて難しかった。

DENDROBIUM

MOBILE SUIT FILE 06

機体解説



RX-78GP03 GUNDAM

MSとMAが融合した
超大型機動兵器たる試作3号機

ガンダム試作3号機 デンドロビウム

SPEC

デンドロビウム

全長：140m（4割：100m）機体全高：730m

本体重量：225,000t（機体重量：50,000t）

エンジン：ターボエンジン 2基

エンジン出力：1,000kW

燃料消費量：100t/h

燃料タンク：100t

燃料消費率：100t/h

燃料消費率：100t/h

燃料消費率：100t/h

燃料消費率：100t/h

燃料消費率：100t/h

燃料消費率：100t/h

燃料消費率：100t/h

燃料消費率：100t/h

燃料消費率：100t/h

燃料消費率：100t/h

燃料消費率：100t/h

燃料消費率：100t/h

燃料消費率：100t/h

燃料消費率：100t/h

「ガンダム 開発計画」

で開発、建造された拠点防御用試作機で、「デンドロビウム」のコードネームを持つ。ガンダム試作1号機や同2号機と異なる宇宙専用機で、MSの汎用性とモビル・アーマー（以下MA）の火力や機動性を付与されている。

ガンダム試作3号機は、全長140mにおよぶ武装／機動ユニットであるアームドベース“オーキス”と、その管制システムを兼ねるRX-78GP03S ガンダム試作3号機“ステイメン”で構成される。

オーキスは、旧ジオン公国軍の非人間型機動兵器MAと同じく、超MS級の重武装と高度な防御力、高い機動性を持つ複合ユニットである。これにMSであるステイメンが合体した試作3号機は、「最強の機動兵器」の双壁とされるMAとMSが一体化した超兵器といえる（兵器分類では、MAにカテゴライズされることが多い）。

オーキス中央に露出したガンダムの上半身や、機体内に納まらず長く伸びたメガ・ビーム砲、左右に張り出したウェポン・コンテナなどから、兵器としては急造されたという印象がある試作3号機だが、その戦闘能力は旧ジオン公国軍のMAを凌駕していた。

宇宙戦艦をも一撃で破壊するメガ・ビーム砲や108発ものミサイルを散布するマイクロ・ミサイル・コンテナ、MA級の大出力ビームも防御する1フィールド・ジェネレーターなどを装備。以降開発されたガンダム・タイプMSを見てもこれほどの攻撃力と防御力を持つ機体は少ない。



RX-78GP03
ガンダム試作3号機

大火力かつ多彩な試作3号機の兵装

試作3号機は、オーキス右側のメガ・ビーム砲がもたらす絶大な火力と、左側のIフィールド・ジェネレーターによる対ビーム防御力が注目されることが多い。確かにメガ・ビーム砲やIフィールド・ジェネレーターは強力無比な装備であることに間違いない。

同様に、MSを握り潰すクロウ・アームや、宇宙艦艇すら両断する大型ビーム・サーベルも、絶大な破壊力を持つ。しかし、これらの兵装は大型MAであれば搭載可能な装備で、試作3号機の独自性を体言するものとはいい難い。

そんな中でも、試作3号機独自のシステム・ウェポンといえるものが、胴体の上に張り出したウェポン・コンテナである。ウェポン・コンテナは、8つのサイロから構成される兵装庫で、左右にふたつが搭載されている（合計16個のサイロを持つことになる）。

通常、ウェポン・コンテナには対艦用の爆導策がふたつ、

大型ビーム・サーベルは、ムサイ級巡洋艦の艦橋を切断するほどの攻撃力を有していた。



▲ウェポン・コンテナ展開状態

▶クロウ・アーム



108発のミサイルを広域散布するマイクロ・ミサイル・コンテナを2基、大火力の大型ミサイルを3発束ねた大型集束ミサイル・セットを2基、ステイメン用のビーム・ライフル（試作1号機用と同じXBR・M・82A）1丁、フォールディング・シールドをひとつ、フォールディング・バズーカ2丁を搭載している（MS用ビーム・サーベルは、ステイメンに内蔵）。

フォールディング・バズーカなどのステイメン用兵装は、直接MSのマニピュレーターで使用するものだが、オーキスとの合体時にも使用できるため、対MS戦に対処しやすいというメリットがある。なお、フォールディング・バズーカやフォールディング・

シールドは、その名が示すとおり折り畳まれた状態でサイロに収納されている。

他にも後方にマイクロ・ミサイルを大量散布する、マイクロ・ミサイル・コンテナのバリエーションも存在するなど、ウェポン・コンテナには多彩な兵装が内蔵されていた。

各サイロに搭載する兵装は状況に応じて変更できるため、あらゆる戦局に対応可能であり、これが局地戦用機に過ぎない通常のMAと、試作3号機を分かち決定的な違いといえる。

フォールディング・シールド



大型集束ミサイル

マイクロ・ミサイル・コンテナ



フォールディング・バズーカ



最終局面で猛威を振るった最強機動兵器

U・C・0083・10・04、フォン・ブラウン工場でロールアウトしたガンダム試作3号機は、10月28日にアナハイム・エレクトロニクス社のドック艦ラビアンローズでのトライアルを開始した。しかし、11月1日、ジオン公国軍残党の攻撃によりコア・ファイター搭載型のステイメンが破壊され、テスト・パイロットのデフラ・カーも死亡する。

ステイメンはコア・ファイター非搭載型として再生されたが、観艦式襲撃事件の影響で「ガンダム開発計画」はジョン・コーウェン中將の手を離れることになる。トライアルも11月11日に中止となり、試作3号機はラビアンローズ駐留部隊の監視下に置かれた。

その後、軍上層部の命令を無視したアルビオン隊が、試作3号機を奪取。観艦式襲撃による混乱で半壊状態の地球連邦軍の中で、地球へのコロニー落としを進めるデラーズ・フリートを追撃できるのが、MA級の大推力を持つ試作3号機だけだったためである。

試作1号機から乗り換えたコウ・ウラキ中尉の操縦により、試作3号機はデラーズ・フリート追撃戦でコロニー護衛のMS部隊や艦隊を次々と撃破しており、MSを含む通常兵器との圧倒的な性能差を見せ付けた。

だが、コロニー防衛の切り札であった巨大MA、「AMMA・X2ノイエ・ジール」に

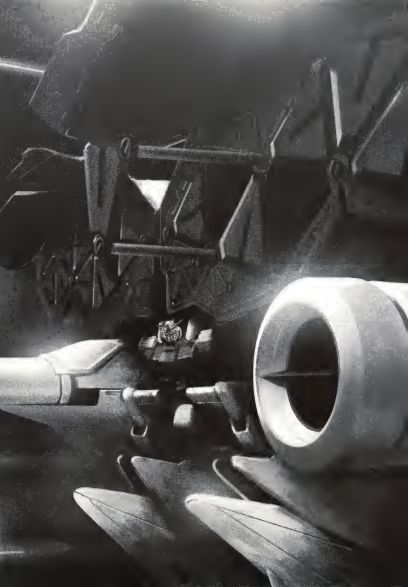
阻まれ、決定打を欠いたまま、時間と装備を消耗することになる。これは両機が「F・イー
ルド・ジェネレーター」装備機であったため、ビーム兵器の効果がなかったこと、ノイエ・
ジールが試作3号機のミサイル攻撃に耐えたことなどが理由であった。

両機の激闘は消耗戦のすえ、アナベル・ガトー少佐が搭乗するノイエ・ジールが、試作
3号機を押さえ込んだことで決着が付いた。しかし、ガトー少佐は試作3号機を撃破しな
かったため、ウラキ中尉はステイメンで戦域を離れることに成功している。

対抗し得たのがノイエ・ジールのような巨大MAだけだったことから分かるように、紛
争の終局面で試作3号機が見せた性能は突出したものであった。しかし、あまりに巨大であ
るため、搭載・運用できる艦艇が事実上存在しないこと（アルビオンはごく短期間だからこ
そ試作3号機を支援できた）、複雑過ぎる火器管制システムと高G、長い戦闘継続時間によ
るパイロットへの多大な負荷など、現実的運用には疑問符を付けざるを得ない。

こうした、試作3号機を筆頭とする「ガンダム開発計画の試作機」は、実用性に疑問が
残る点も多く見受けられる。それでも、そこで培われた技術は次世代のMSに受け継がれ
るはずであった。しかし、デラズ紛争を巡る陰謀劇の中、一連の事件が秘匿されると共
に「ガンダム開発計画」の試作機は登録を抹消され、資料も破棄されている。

だが、技術者たちの記憶を消すことまではできず、U・C・0087に勃発したグリフ
ス戦役では、「ガンダム開発計画」の影響が見受けられるMSが誕生することになる。



ガーベラ・テトラ

ガンダムとして完成しなかった「ガンダム」

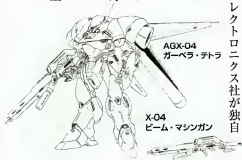
「ガンダム開発計画」では、試作1号機から3号機の3機種がロールアウトしているが、それ以外にも「第4のガンダム」と呼べるMSが検討されていた。

それがRX・78GP04G ガンダム試作4号機、コードネーム「ガーベラ」である。

試作4号機は、地球連邦軍の要請ではなくアナハイム・エレクトロニクス社が独自に開発を進めていたといわれる強襲用MSで、設計は試作2号機同様、旧ZEO NIC社系メンバー中心で編制されたチームが担当した。

「ガンダム開発計画」の初期段階においては格闘、白兵、突撃、強襲といった戦術に対応した機体プランも提案されていた。強襲タイプは目標に高速接近した後、短時間で大火力を投入できる機体で、ジオン公国軍のMS・18E ケンプファーなどが該当する。

この仕様案は、試作1号機（宇宙仕様）とのコンセプト重複が見られたため計画から除外されたものの、アナハイム・





何者かによって不正アクセスを受けたガンダム開発計画の資料の中には、ガンダム試作4号機のデータも存在していたといわれる。

エレクトロニクス社の独自判断で研究が進められ、シュツルム・ブースターと呼ばれる増加推進器や、大型ビーム兵器を搭載する強襲用MSとして設計が進められた。

デラーズ紛争中、この機体は実戦に投入されているが、その姿は旧ジオン公国系のそれに近く、ガンダム・タイプMSの面影はなかった。

この機体が「星の屑」作戦を巡る一連の陰謀劇の中、アナハイム・エレクトロニクス社のオサリバン常務から、シーマ艦隊司令のシーマ・ガラハウ中佐に提供されたAGX・04 ガーベラ・テトラである。

ガーベラ・テトラは、アルバート社製のビーム・マシンガンX・04（製造はMIP社）を標準装備し、シュツルム・ブースター装備時のスラスト総推力は試作1号機フルバーニアンを凌駕する31万6kg（未装備でも21万6kg）に達しており、ほかの「ガンダム開発計画」系MS同様、その性能はグリーブス戦役期のMSを超えていた。

ガーベラ・テトラがガンダム・タイプMSとして完成しなかったのは、アナハイム・エレクトロニクス社とシーマ艦隊の密約の証拠を残さないため、提供前にガンダム・タイプとは判別できない偽装を施されたためであったといわれる。

試験運用部隊アルビオン隊 — 闇に消えた「ガンダム開発計画」



アルビオン

ベガス級強襲揚陸艦アルビオン（正式には地球連邦宇宙軍・第3地球軌道艦隊所属索敵攻撃部隊アルビオン）は、「ガンダム開発計画」における運用試験母艦として建造された。

その艦長にはジョン・コーウェン中将の信頼も厚い、エイバー・シナブス大佐が就任し、ガンダム試作機の運用試験を行うはずだった（アルビオン隊自体が、コーウェン中将の指揮下にあった）。

エイバー・シナブス艦長



しかし、ガンダム試作2号機

強奪にはじまる「デラーズ紛

争」に巻き込まれたことから、

予期せぬ実戦に投入されてしまう。

地球到着時のアルビオンにはMSパイロットはおらず、トリント

ン基地でサウス・パニング大尉、コウ・ウラキ少尉、チャック・

キース少尉が乗り込んだほか、ジャブローから派遣されたアル

ファ・A・ペイト中尉、ベルナルド・モンシア中尉、チャップ・ア

デル少尉らが参加した（階級はいずれもアルビオン隊参加初期）。

アルビオンのMS部隊には一年戦争時に「不死身の第4小隊」の異名を取った歴戦のベテランパイロットたちが配属された。



コウ・ウラキ少尉



アルビオン隊はMSと両艦の連携に優れ、独立遊撃部隊として高い能力を誇った。また、デラース・フリートとの戦闘でも高い戦果を残した。



アルビオン艦長士のアクラム・ハリダ中尉（左）と、操舵手のイワン・バヤロフ大尉（右）。彼らをはじめとする優秀なクルーが艦の戦いを支えた。

その後開始された試作2号機の追撃の際に運用していたMSは、ウラキ少尉のガンダム試作1号機（後に試作3号機）、バニング大尉らのRGM-79Nジム・カスタム、アデル少尉らのRGC-83ジム・キャノンIIなどの高級機が揃っており、パイロットの技量も相まって高い戦闘能力を持っていた。

試作2号機強奪および観艦式襲撃事件によるコーウェン中将の影響力低下や、MS部隊の中心であったバニング大尉の戦死などの不幸に見舞われながらも、アルビオン隊はデラース・フリート追撃を続けたが、事態に決定的影響を与えることはできなかった。

しかも、デラース・フリート追撃時の命令無視とガンダム試作3号機強奪の責任を問われて、シナプス大佐は死刑、ウラキ少尉は禁固一年を科せられている（「ガンダム開発計画」に関する情報が抹消されたため、ウラキ中尉の罪状は後に消滅）。

釈放されたウラキ少尉とキース少尉は北米オークリー基地に事実上の左遷となり、残りのMS隊メンバーやブリッジ要員はティターンズへと編入された。

こうしてアルビオン隊は解体され、誰も知らない歴史の闇に消えていった。



デラース紛争が終結したのち、軍法会議での追及を免れたアルビオン隊のクルーたちはティターンズへと編入されることとなった。

Chapter03：

グリプス戦役～第1次ネオ・ジオン戦争

U.C.0087-0088

グリプス戦役～
第1次ネオ・ジオン戦争

007

008

0083

0087

0088

0093

0123

0153



THE LEGEND OF MOBILE SUIT GUNDAM

DATA FILE

TV 『機動戦士Zガンダム』

1985年3月2日～1986年2月22日／名古屋テレビ系／土曜 17時30分～18時／全50話

TV 『機動戦士ガンダム ZZ』

1986年3月1日～1987年1月31日／名古屋テレビ系／土曜 17時30分～18時／全47話

MOVIE 『機動戦士Zガンダム A New Translation ―星を継ぐ者―』

2005年5月28日公開／松竹系／1時間34分

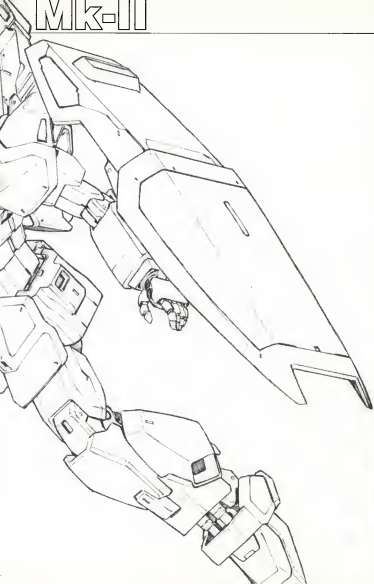
MOVIE 『機動戦士Zガンダム II A New Translation ―恋人たち―』

2005年10月29日公開／松竹系／1時間38分

MOVIE 『機動戦士Zガンダム III A New Translation ―星の鼓動は愛―』

2006年3月4日／松竹系／1時間39分

Mk-II



RX-178 GUNDAM

地球至上主義の旗の下で生まれた
RX-78 ガンダムの再設計機

ガンダムMk-II

SPEC

頭高：18.5m

本体重量：17.4t（全機重量：54.1t）

フェズレーザー出力：1,930kW

スラスター推力：81,200kg

装甲材質：チタン合金セラミック複合材

武装：ビーム・ライフル、ハイパー・バズーカ

60ガン・ボット・システム

ビーム・サーベル×2、シールド





RX-178
ガンダムMk-II

地球連邦軍特務部隊であるエリート部隊「ティターンズ」が、RX-78 ガンダムの後継機として開発した白兵戦用試作MS。

ジオン公国系技術を徹底的に排除し、ほぼ地球連邦系技術のみで開発されている。開発技術陣もアースノイドばかりで、アナハイム・エレクトロニクス社やスペースノイドの技術者は参加していないなど、地球至上主義的な開発背景を持っていた。

「ガンダムMk-II」最大の特徴は、ムーバブル・フレームと呼ばれる駆動式内骨格を搭載している点である。これまでも部分的なムーバブル・フレームや系列技術を投入したMSは存在した。しかし、ガンダムMk-IIではほぼフルスペックのモデルが採用されていた。

「ガンダムのマイナーチェンジに過ぎない」といった酷評を受け、開発の携わった技師にも軽視されたガンダムMk-IIだが、そのムーバブル・フレームは革新的なものであった。

また、新型装甲材ガンダリウムγを採用していないにも拘らず、それを採り入れたアナハイム・エレクトロニクス社の新型MS、「RMS-099 リック・ディアス」や「MSN-00100 百式」に匹敵するカタログスペックを持ち、ムーバブル・フレームならではの整備性や拡張性にも優れ、その性能は未知数といえた。

開発後、すぐに地球連邦政府組織エゥーゴに奪取されたガンダムMk-IIは、エゥーゴの中核戦力として活躍。それだけでなく、開発が難航していた可変MS「MSZ-006 Zガンダム」に多大な影響を与えることになった。



ティターンズの政治的必要性と エウーゴの軍事戦略的必要性から誕生したガンダムたち

ティターンズの台頭

デラーズ紛争直後のU・C. 0083. 12. 04、旧ジオン公国軍残党の掃討を目的とする地球連邦軍の特務部隊「ティターンズ」が組織された。

この「旧ジオン公国軍残党の掃討」という名目は真実の部分もあるが、「旧ジオン公国軍残党」を「スペースノイド」といい換えてもおかしくないものだった。

そう、ティターンズはスペースノイド弾圧部隊として組織されたのである。実際、ティターンズ発足を提唱したジャミトフ・ハイマン准将は、地球至上主義者と呼ばれる。

「地球至上主義」とは何かというと

■地球の再生

■選ばれたアースノイドによる地球圏運営

■ニュータイプは現生人類を脅かす突然変異体



ジャミトフ・ハイマン准将

という主張から構成される一種の選民思想で、明言こそされないがティターンズの根本思想でもあった。このような思想背景を持つティターンズの誕生過程は、一言でいえば「陰謀」によって成り立っていた。

密約によりデラース・フリートの「星の屑」作戦を察知していた、ジーン・コリニー大將ら地球連邦軍内の地球至上主義勢力は、この事件を利用して政敵のジョン・コーウェン中將を追い落とした。それと同時に、地球連邦政府および軍内の危機感を煽り、「ジオン残党狩り」部隊である「ティターンズ」を結成した。

ティターンズ結成の資金は「ガンダム開発計画」の残りも流用された。これを可能としたのが、コリニー大將の懐刀であり、元財務官僚だったというジャミトフ准將の政治力だった。そして、コリニー大將の引退後、派閥を引き継いだジャミトフ准將はティターンズ

の指導者として、民間活動も含めた反地球連邦運動の弾圧掃討とティターンズの勢力拡大を加速させていった。

ティターンズが行った弾圧掃討の中でも、U.C. 0085. 07. 31の「30バンチ事件」は特に有名である。また、当事者であるティターンズがこの事件を機に



ティターンズ結成の演説を行うバスク・オム大佐。テラース紛争の混乱を利用して組織を構築した同部隊は、急速に勢力を拡大していった。



「30バンチ事件」で毒ガスを使用したサイド1の30バンチは、ミイラ化した住民の遺骸が散置された死のコロニーとなった。

発言力を大幅に強化したことで知られている。事件の発端は、サイド1の30パンチで行われていた反連邦政府デモである。このデモは軍事力を伴うものではなかったものの、対応に苦慮した地球連邦軍駐留部隊はティターンズに鎮圧を要請した。

しかし、この要請を受けたティターンズの対処方法が常軌を逸していた。ジャミトフ准将の右腕で武闘派として知られるティターンズ将校バスク・オム大佐は、30パンチにG3ガスを注入し、住民を虐殺したのである。

結果的に、民間人大量虐殺の共犯となった地球連邦軍や、それを知りながらも何の対応もしなかった地球連邦政府が、ティターンズに対して弱腰になるのは当然の反応であった。

こうしてティターンズは、地球連邦軍内での独自性を強化すると共に、スペースノイド弾圧を続けていく。そしてティターンズの隊員も、地球至上主義や一般の地球連邦軍に対する優越性から来るエリート意識を当然のものとして受け入れていった。

地球至上主義的背景を持つMS開発

ティターンズは、設立時から一般の地球連邦軍とは異なる兵器も配備していた。

代表的なものが、コロニー内戦闘用MSの「RGM-79Q ジム・クウエル」やアレキサンドリア級重巡洋艦である（「RMS-106 ハイザック」などの主力機は地球連邦

と同じ機体を用意)。

ティターンズは特殊な装備形態を実現した背景には、独立した予算を得ていたことが挙げられる。その独立性は徹底しており、地球連邦軍の契約企業であっても別枠で契約を交わし、防衛計画とは関係なく独自の装備調達を行ったほどである。

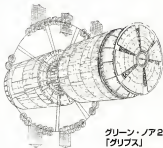
そのティターンズが、外部からの監視をシャットダウンした兵器開発環境を手に入れたのが、U.C. 0085。

09. 08の「グリーン・ノア2」建設であった。「グリ

プス」ことグリーン・ノア2は、サイド7宙域に移送された密閉型コロニーを転用した軍事施設で、宇宙におけるティターンズの拠点となった。

グリプスが特殊だった点は、MSだけでなく艦艇までもが開発、建造可能な複合型軍事施設だったことである。それ以前にも、ティターンズは「コンベイトウ(旧ソロモン)」に新兵器の試験を行うT3部隊(ティターンズ・テスト・チーム)を置いていたが、地球連邦軍本隊と施設を共用していたため、機密保持は万全とはいい難かった。

それが、特務部隊ティターンズの密閉型コロニーを転用した基地という特殊性により、排他的かつ情報漏洩の可能性が低い兵器開発環境を手に入れたのである。



グリーン・ノア2
「グリプス」



アレキサンドリア級アル・ギザに搬入されるRGM-79Q ジム・クゥエル。パイロットには旧アルビオン隊のメンバーも登用された。

こうしてティターンズは、グリプスの閉鎖的な環境の中、一年戦争中からジャブローを中心に稼働していたMS開発セクションやその人員のほとんどを抱え込んだという組織を用い、新型MSの開発を推進した。そのMSこそ、RX-178 ガンダムMk-IIである。

ティターンズが掲げる地球至上主義的は使用する兵器にも現れていた。事実、前述したジム・クゥエルは、ジオン公国系技術を使用していない純地球連邦系のMSだった（もともとティターンズといえども予算は無限ではなく、性能面での優劣やコスト面などの問題もあって、ハイザックのようなジオン色の強い機体も採用している）。

当然、ガンダムの名を持つ新型MSの開発にも、地球至上主義的な方針が採り入れられた。アースノイドのみの技術陣によって開発された、地球連邦系技術だけを用了新型ガンダム。これがガンダムMk-IIが極めて政治的な兵器である要因だった。

しかし、狂信者の妄執にも思える開発方針は、革新的なムーバブル・フレームという副産物を誕生させることになる。

反地球組織の糾合と対ティターンズ用兵器の必要性

一年戦争以前から存在していた反地球連邦運動は、戦後に

なっても止むことはなかった。

スペースノイド軽視の政策が一年戦争勃発の遠因だったにも拘らず、地球連邦政府の方針には変化は見られなかったためである。それどころか、ティターンズによるスペースノイド弾圧は弱まる気配を見せず、遂には「30パンチ事件」のような蛮行まで現実のものとなってしまった。

これを契機として危機感を強めた反地球連邦主義者たちは、地球連邦軍のブレックス・フォーラ准将を中心に組織を糾合し、軍事力によるティターンズ打倒を第一目的とする反地球連邦組織エウーゴ（A・E・U・G=Anti Earth United Government）を誕生させた（「エウーゴ」という言葉自体は、反地球連邦政府運動を意味するものとして以前から存在していた）。

エウーゴには、ブレックス准将をはじめとする地球連邦軍将兵や反地球連邦活動に身を投じた民間人だけでなく、元ジオン公国軍の軍人、ティターンズによって不利益を被った政治家や官僚など様々な人々が参加した。

こうして民間だけでなく政府や軍内に謀報網を広げたエウーゴは、体制に不満を持つ地球連邦軍将兵や元ジオン公国軍将兵たちを中心に軍事組織の編制も進めた。

しかし、ここで兵器の調達が問題となる。地球連邦軍の内部組織であり、独立した予算や拠点を有するティターンズは質量ともに優れた兵器を配備していた。エウーゴがこれに

対抗するためには、数は揃えられなくともティターンズのMSを上回る高性能機が必要であった。

それを解決した要因のひとつが、クワトロ・バジーナことシャア・アズナブルが旧ジオン公国軍残党最大の根拠地アクシズから持ち込んだ新素材「ガンダリウム」(ガンマ)であった。

また「ガンダム開発計画」を抹消され、地球連邦軍の新規MS調達からも外されつつあったアナハイム・エレクトロニクス社も、メラニー・ヒュー・カーバイン会長の方針によりエウーゴへの協力を確約したのだった。

こうしてアナハイム・エレクトロニクス社は、エウーゴ用としてアーガマ級強襲巡洋艦とガンダリウムを採用した新型MS、RMS-099リック・ディアスを開発。

この段階で、エウーゴの兵器の質はティターンズのそれを上回っていたが、問題も残されていた。エウーゴは、最大の支援組織であるアナハイム・エレクトロニクス社の主流が月に移りつつあることや、スペースノイドを母体とすることなどから、宇宙を中心に活動する組織である。

これに対し、ティターンズ



ブレックス・フォーラ准将

と地球連邦は地球に中枢を置いていた。

つまり、エウーゴがティターンズに攻略するには、宇宙から地球に攻め込まなくてはならない。しかも、宇宙から地上への侵攻はジオン公国軍の地球侵攻作戦にも見られるように、大気圏再突入部隊による侵攻になることは確実であった。

これを成し遂げるために、エウーゴが着目したものが可変型機動兵器であった。

地球連邦軍の可変MA「NRX-044 アッシマー」で証明された可変型機動兵器の多用途性と広い戦闘行動半径は、量を質でカバーせざるを得ないエウーゴにとって、極めて魅力的なものであった。

しかしアッシマーのような可変MAは、MS形態が特に巨大化する傾向にあるため、運用母艦の制限上、エウーゴは通常のMSサイズの可変機の開発を余儀なくされた。

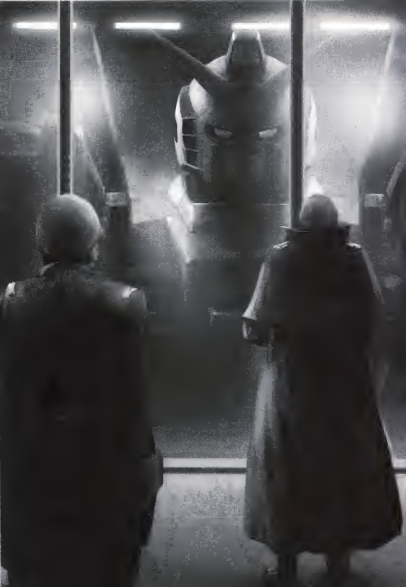
以上のことを総合すると、エウーゴはその戦略上、大気圏突入能力を持つ可変MSを必要としたのである。しかもティターンズの新型機投入を考えれば、性能は高いほどいい。

こうしてU.C. 0086、

エウーゴの依頼を受けたアナハイム・エレクトロニクス社は、可変MS開発プロジェクト「Z計画」を開始させた。



メラニー・ヒュー・
カーバイン会長



ムーバブル・フレイムが鍵を握った新世代ガンダムの開発

ガンダムMk・IIの開発と基本構造

ティターンズはRX・178 ガンダムMk・IIの開発において、地球連邦系の技術だけを投入する方針を採った。これは、ジオン公国系技術の採用や技術融合によって解決できた問題を、改めて地球連邦系技術のみで解決し直さなくてはならないことも意味していた。

このような開発方針は、非効率の誹りを受けざるを得ないものだったが、そこから思わぬ副産物が生まれることになった。

それが史上初とされる、ほぼフル規格のムーバブル・フレイムである。

ムーバブル・フレイムは、駆動内骨格とも呼ばれるMSの基本構造のことで、それ以前のセミ・モノコック構造やモノコック構造とは一線を画する新技術であった。

ジオン公国系MSに採用されていたモノコック構造は、外骨格式とでも換言できるもので、装甲外殻の内部に機器類を詰め込み、それを関節部で結合していた。地球連邦系MSのセミ・



ガンダムMk・IIの内部構造



モノコック構造も、装甲外殻の裏側などにフレームを張り巡らせる点こそ異なるが、基本的にはモノコック構造と同じ「外骨格式」である。

つまり、モノコック構造とは「箱」や「ケース」を作る技術であるが故に、外部への拡張性が相対的に低くなるという問題点を抱えていたのだ。また構造上、装甲外殻で自重を支えるため、装甲の破損状況によつては自立も困難になるほか、メンテナンス性や駆動性での問題も指摘された。

これに対してムーバブル・フレームは、核反応炉や駆動系、コクピットや電装系などをオールインワンにできる駆動式内骨格である。

フル規格のムーバブル・フレームはほぼ完全に人間の形をしており、それだけで動き回ることも可能となっている。装甲や兵装は、ムーバブル・フレーム上に外装する形を取るため拡張性に秀でるほか、その機構上、装甲と駆動系が分離しているためダメージコントロールに秀で、整備性にも優れている。

ほかにも、そのほとんどが駆動系と支持架のみで構成されるため、動作性や駆動性に関する制約が少ないといったメリットもあった。

ガンダム Mk・II 以前にもムーバブル・フレームの研究は行われており、RX・78 GP 01 ガンダム試作1号機や RGM・79 Q ジム・クゥエルでも手脚レベルのものは実用化されていた。だが、完全な人型でかつ柔軟性に秀でるフル規格型は、その時点では完成し

ていなかったのである。柔軟性に優れるフル規格のムーバブル・フレーム完成に必要なものの――それは過去の技術を顧みることだった。

地球連邦系とジオン公国系技術の融合は、確かにMSの基礎レベルを向上させたが、却って固定概念も生み出していた。特に、全天周囲モニター式コクピットの球殻外壁を脱出機構とするイジェクション・ポッドの登場は、コア・ファイターのような制御系の統一と生存性向上をもたらししており、地球連邦系技術に固執していながらも、コア・ブロック・システムはMS黎明期の過渡期的な技術として切り捨てられようとしていた。

しかし、ティターンズの技術者は地球連邦系技術への拘泥から、コア・ブロック・システムを「機体管制を行うコアを四肢に延長する」という発想に昇華させ、かつてない柔軟性を持つほぼ完全な人型のムーバブル・フレームを作り上げた。その意味では、ガンダム Mk・IIのムーバブル・フレームは、人間型のコア・ブロック・システムともいえる。

しかし、ティターンズ上層部や技術陣の評価は芳しくなく、半年の試験の後、量産は中止となった。ガンダム Mk・IIのムーバブル・フレームは確かに柔軟性に秀でていたが、瞬発的な外力に対する剛性の不足が指摘されたのである。この欠点はフレーム材質に因るもので、6回にも及ぶ設計変更にも拘らず改善されなかったといわれる。

こうしてティターンズからは見捨てられたに等しいガンダム Mk・IIだったが、エウーゴに奪取されたことでその運命を大きく変えることになる。

徹底した外装化が特徴のガンダムMk・Ⅱ用兵装

ガンダムMk・Ⅱ用の兵装は、ビーム・ライフルやビーム・サーベル、バルカン砲やハイパー・バズーカ、シールドなどであった。これらの装備はU・C・0080年代中期の技術で改良されてはいるが、RX・78ガンダムで完成されたスタンダードなものとなっている。これらの兵装は、ガンダムMk・Ⅱ各部のマウントラッチへの接続を前提としており、携行性に優れている点が特徴であった。

これにより、以前のMSでは内蔵式だったバルカン砲は、頭部マウントラッチを介して外装するバルカン・ポッドになったほか、シールドもミニビュレーター対応ハンドルが廃止されて前腕部ラッチでのみ接続するようになっていた。これはムーバブル・フレームの実用化に伴う、装備の外装化の一端ともいえる。



主兵装のビーム・ライフルは、エウーゴ時代にはアナハイム・エレクトロニクスBR社のXBR・87・Dを使用。これはティターンズ時代に使用された、ポウワ社のXBR・M86・C2やブラッシュ社のXBR・M86bの同じ規格のものである。出力2.2MWのEパックを使用し、発射回数

はモードによって異なるが、Eバックひとつにつき3〜7回だった（出力は2.6 MWともいわれる）。

ビーム・サーベルのXB・G・1048Lは出力0.45 MWで、非使用時にはバックパックのバーニア・アームにマウントされている。一般的なモデルと異なり基部が四角柱型となっているほか、ビーム刃発振用のボタンが設置されており、マニピュレーターでオン・オフを操作可能であった。

ハイパー・バズーカ（Baz・85・Gry/Ver.

045）は、それ以前にジム系主力MS用として採用されたモデルの同系列品である。炸薬の威力はRX・78ガンダムで使用されたものとはほぼ同等といわれるが、カートリッジを換装することで通常弾のほかにも散弾なども発射可能だった。

頭部外装式のバルカン・ポッドVCU・505EX・Gry/Ver. 009は、砲システムと弾倉、給弾ベルトから構成されている。これは内蔵型と比べて装弾数が多いという利点を持つほか、外装式装甲や火器類のコントロールに必要な頭部内コ・プロセッサ・フレームの大型化に伴う処置とされる。

左前腕部のラッチに接続されるシールド（RX・M・Sh・VT/S・00018）

XBR-87-D

ビーム・ライフル

Baz-85-Gry/Ver.045
ハイパー・バズーカ



シールド

や防御力、機動性を強化するため、アナハイム・エレクトロニクス社製のFXA・05D Gディフェンサーが投入された。

これはRX・78 ガンダムのGパーツに相当する支援機で、

Gディフェンサーと合体した強化形態は「スーパーガンダム」と呼ばれた。

合体により、出力6.8MWのロング・ライフル1丁と14連ミサイル・ポッド2基が追加されるほか、増加スラスタやガンダリウム合金製の装甲システムが装備されるため、MSZ・006 Zガンダムにも匹敵する戦闘能力を獲得したともいわれる。

RX-178+FXA-05D
スーパーガンダム

は、耐ビーム・コーティングにより2〜3発程度であればビームを防御可能で、裏面にEバックふたつを装備できる。また、伸縮機構も採用されている。

グリプス戦役中期には攻撃力

ティターンズとエウーゴで使用され ふたつの戦乱を戦ったガンダムMk・II

RX・178 ガンダムMk・IIは、地球至上主義的な背景を持って開発されながらも、ティターンズからは失敗作の烙印を押されることとなった。

しかし、U・C. 0087. 03. 02のグリーン・オアシス襲撃を契機として、試作されたガンダムMk・II数機の内、3機がエウーゴに奪取された。このうちの1機は、軍属の少年カミーユ・ビダンの乗機として残され、残り2機は予備パーツ用などとして分解、コピーされている。

この際、ガンダムMk・IIは黒をベースとしたティターンズ・カラーから白系にリペイントされ、エウーゴの中核戦力の一角として約2年に亘る戦乱を戦っていくことになる。

高いニュータイプ能力を持つカミーユに任されたガンダムMk・IIは、宇宙や月面、大気圏再突入中や大気圏内といった様々な環境にあっても高い戦果を挙げた。特に、地球上においては、MS支援用航空機ドダイ改も併用し、可変MAともわたりあうなど、高度な戦闘能力や汎用性を見せた。

カミーユがMSZ・006 Zガンダム乗り換えた後は、元ティターンズのエマ・シー



エウーゴのジャブロー攻略戦では
フライング・アーモアを用いて大
気圏突入を行い、そのデータは
MSZ-006開発にも活かされた。



次々と実戦投入されるティターンズ
の新型機に苦戦することもある
が、カミーユ・ビダンの能力に
も助けられてエウーゴを変えた。



第一次ネオ・ジオン戦争ではガンダム・チームに配備されて第一線で戦った。また、エルビールに無断で持ち出されたこともある。



パイロットがエマ・シーンに変わってからは主に指揮官機としての役割を担い、グリプス戦役の終結まで常に前線にあった。

ン中尉がガンダムMk・IIのメイン・パイロットとなった。エマ中尉は、元ティターンズのメンバーだけあって、高度なMS操縦技術と指揮能力を持っており、MS部隊の指揮官機として活躍することも多かった。元々ガンダムMk・IIは、頭部アンテナからも推測できるように、隊長機としての通信機能を持つと考えられ、エマ中尉の搭乗は機体の真の性能を引き出すものだったともいわれる。

グリプス戦役後期には性能の限界を露呈しつつあったが、支援機「Gディフェンサー」との合体により、ティターンズの可変MSに匹敵する戦闘能力を発揮した。

その後、グリプス戦役末の戦闘でエマ中尉を失ったガンダムMk・IIは、機体そのものが大きく損傷していたこともあり、長期間に亘る修理を余儀なくされた。

そのまま現役を退くかにも思われたが、第一次ネオ・ジオン戦争では、軍属の少女エル・ピアンノをメイン・パイロットに迎え、再び戦線に投入された。

この戦乱ではスーパードガンダム形態では運用されなかったが、ガンダム・チームの一角として最前線で戦い続け、世代を超えたポテンシャルを証明したのだった。

AM

▶ MOBILE SUIT FILE 08



機体解説

「グリプス戦役最高傑作」と称され
エウゴの象徴となった可変型ガンダム

Zガンダム

SPEC

全高：19.05m

本体重量：28.7t

ジェネレーター出力：2,020kW

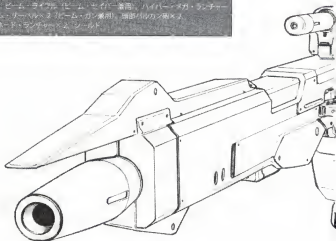
スラスター推力：112,600kg

装甲材質：ガンダリウム合金（ガンダリウム）

武装：ビーム・ライフル（ビーム・セイバー兼用）、ハイパーメガ・ランチャー

ビーム・サーベル（2）、ビーム・ガン兼用、頭部40mm機関銃

グレネード・ランチャーと「シールド」



MSZ-006
Zガンダム

ウェイブ・ライダー形態

反地球連邦政府組織
エウーゴの依頼により、
アナハイム・エレクトロ
ニクス社が「Z計画」で
開発した機体が、MSZ-
006 Zガンダムだ。MA

形態への変形機能を有する可変MSであり、ガン
ダムの名を冠する機体で、はじめてこの機構を採
用したMSでもある。

このZガンダム最大の特徴がノンオプションでの
大気圏再突入能力である。それを実現するために採
用されたものが、通常の可変MSのMA形態に相当
するウェイブ・ライダー形態である。ただし、ウェイ

ブ・ライダーは大気圏への再突入専用ではなく、高機動戦闘形態や空戦
形態でもあるため、宇宙と大気圏内の双方で高度な機動性を発揮できた。

MS形態は、U. C. 0100年代以降に主流となった15m級MSと同様、
パワー・ウェイト・レシオ（出力対重量比）に秀でるほか、ハイパー・メ
ガ・ランチャーに代表される様々なオプションが用意されており、既存の
MSを超える多用途性と戦闘能力を獲得している。

さらに、ロング・ビーム・サーベルとしても使用できる長砲身ビーム・
ライフルや、両形態兼用のAMBACシステムであるロング・テール・スタ
ビライザーなどにより、MS/ウェイブ・ライダー双方でのデッドウェイト
軽減などが図られており、その総合性能は
「グリプス戦役最高傑作」と呼ばれるほどの
評価を得ている。

なお、変形機構の根幹を成
すムーバブル・フレームは、
ガンダム Mk-II のそれを参考
にしており、組織の垣根を越
えた機体ともなっていた。





バイオ・センサー — 機体制御に採り入れられた準サイコミュ

時期は不明だが、MSZ・006 Zガンダムの機体管制・制御系には「バイオ・センサー」と呼ばれる準サイコミュが搭載された。

空間認識能力や先読み能力、反応速度などに優れる「ニュータイプ」は、緊張状態において「感応波」と呼ばれる、精神波の一種を放つといわれる。

これを機体制御や遠隔操作式端末の管制などに利用するシステムが、サイコミュ・システム（サイコミュ）である。

つまり、パイロットの思考をダイレクトに操縦に反映させるのである。

サイコミュは一年戦争時のジオン公国で実用化された。それを用いた機体として、遠隔攻撃端末である「ビット」を搭載したMAN・08 エルメスやMSN・02 ジオンクなどが知られている。それらの機体が挙げた戦果からも分かるとおり、サイコミュはミリタリーバランスに大きな影響を与える可能性を秘めていた。

戦後、ジオン公国から関連資料を接収した地球連邦軍は、直轄のニュータイプ研究所を設立してサイコミュ技術を独占したため、民間企業は蚊帳の外に置かれてしまった。

これはZ EONIC社を吸収合併したアナハイム・エレクトロニクス社も同じことだった。しかし同社は、サイコミュの概念や基本機能を知ると独自の研究を開始。その中で生

まれたとされるのが、バイオ・センサーである。

バイオ・センサーは従来のサイコミュと異なり、一般人でも使用できる「準サイコミュ」と呼ばれるカテゴリーに属するもので、補助的ながらパイロットの思考を操縦に反映できた。

効果は本来のサイコミュには劣るが、ニュータイプ研究所でもMSに搭載するサイズのサイコミュの開発には難航しており、サイコミュ研究に着手して間もなかったアナハイム・エレクトロニクス社が、通常サイズのMSに搭載可能なほど小型の準サイコミュを実用化できた点は高く評価できる。

また、バイオ・センサーは単に小型だけでなく、グリプス戦役末期でZガンダムが見せたビーム兵器の威力増大や耐ビーム・バリア発生にも関与していると考えられている。このように、高度なニュータイプとバイオ・センサーが組み合わされた際の能力は、予測不能なものがあつた。

こうして効果を確認されたバイオ・センサーは、後発のMSZ-010 ZZガンダムにも採用され性能向上に一役買ったほか、Zガンダムの量産仕様機RGZ-91リ・ガズイにも搭載されたという（リ・ガズイのコクピットにはサイコミュ・コネクタという部位が存在しており、何らかのサイコミュ関連機器が搭載されたのは確かなようだ）。

「Z計画」とZガンダムの開発

U.C. 0086、エゥーゴから「ノンオブション」での大気圏突入能力を持つ可変MSの開発を依頼されたアナハイム・エレクトロニクス社は、可変MS開発を目的とする一大プロジェクト「Z計画」をスタートさせた。

可変MSとは、MA形態への変形機能を持つMSのことで、可変MA（MS形態への変形機能を持つMA）と比べるとMSをベースとするため、機体の小型化が容易であった。



メタス
MA形態

MSA-005 メタス

ただし、NRX-044 アツシマーのドラム・フレーム（円筒型の基部を中心に、ユニットを移動させる機構）や、AMX-003 ガザCのようにブロック化されたユニットの移動といった技術では、非変形型MSを作るな

らともかく、可変機ではMS形態の大型化や、形状の特殊化が問題視されていた。

そこでアナハイム・エレクトロニクス社では、研究途上にあったMS用駆動内骨格ムーバブル・フレームを用いた可変MSの開発を決定した。ムーバブル・フレームであれば、関節の自由度を広げるだけで変形機構の搭載が可能となり、整備性や耐久性、拡張性などの面にも優れているといった利点があるためであった。

初期のムーバブル・フレームというはRX-178 ガンダム Mk-IIのそれが特に知られている。しかし、ガンダム試作1号機の四肢ユニットやリック・ディアスにもムーバブル・フレームを採用していたことから分かる通り、アナハイム・エレクトロニクス社でも関連技術の研究は行っていた。

もともとリック・ディアスでは、ムーバブル・フレームに極めて近い特性を持つ「ブロックビルドアップ」という手法が採用されたとする説も有力で、初期の「Z計画」でもこの技術による可変MS開発が行われていたといわれている。

こう考えるとブロックビルドアップが、初期のアナハイム・エレクトロニクス社系ムーバブル・フレームと見做されるようになった可能性も否定できない。

ムーバブル・フレームかブロックビルドアップであったかはともかく、アナハイム・エレクトロニクス社は可変MSの開発に着手する。しかし、本格的な可変MSとして開発されていたMSN-001X1のガンダムにおいて、大きな問題が発生した。

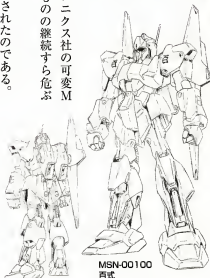
δガンダムの胴体フレームは、変形時の高G環境下において、復元不可能なダメージを受けてしまうことが判明したのだ。結局、この問題は解決策を見出せず、δガンダムは非変形型のMSN・00100百式として再設計されることとなった。

こうして、アナハイム・エレクトロニクス社の可変MS開発は暗礁に乗り上げ、計画そのものの継続すら危ぶまれた。

しかし、そこに画期的技術がもたらされたのである。

それこそ、エウーゴが奪取したガンダムMk・IIのムーバブル・フレームだった。ティターンズにおいて、剛性不足などが問題視されたガンダムMk・IIのムーバブル・フレームだが、アナハイム・エレクトロニクス社はその柔軟性などに注目し、自社の可変MS開発に採り入れたのである。

また同時にカミーユ・ビタンが提供した、ガンダムMk・IIとリック・ディアス、フライング・アーマーを混成した試案も、大いに参考になったといわれる。



MSN-00100
百式

こうしてアナハイム・エレクトロニクス社では、ガンダム Mk・II のムーバブル・フレームを参考にしつつ、ガンダリウムⅡに代表される様々な技術を投入し、真の可変MSを開発していった。その機体こそ、大気圏再突入形態。ウェイブ・ライダー。への変形機能を持つ、MSZ・006 Zガンダムである。

Zガンダムの構造と特殊機構

MSZ・006 Zガンダムは、可変MSとしての必要性や性能向上を目的として、特殊な構造や機構を採用している。代表的なものだけでも、メイン・ジェネレーターの脚部への内蔵、内装機器が極端に少ない胴体、背部のロング・テール・ステビライザー、背部のフライング・アーマーなどが挙げられる。

Zガンダム以前にも、RX・78 ガンダムのように脚部に補助ジェネレーターを搭載したMSは存在した。しかし、メインの熱核反応炉／ジェネレーターを脚部に搭載した機体は、これまでにほとんど範例がなかった。

通常のMSは胴体内に熱核反応炉を搭載するが、Zガンダムの胴体には変形機構が集中するため、強度を最優先した構造とされた（これは、胴体内装機器の少なさにも繋がっている）。このため、メイン反応炉の内蔵箇所は胴体内部以外が模索され、最終的に大気圏

再突入時に熱や衝撃波の影響を受け難い箇所——つまり脚部が選択されたのである。

背部のロング・テール・スタビライザーは、アナハイム・エレクトロニクス社が得意としたバインダーの発展形で、形態を問わずに機動・姿勢制御を行えるAMBAC (Active Mass Balance Auto Control) システム兼偏向推進器として利用できた。バインダーと違い1基しか装備されないが、それでも十分な性能を発揮した。

これは、ハイパー・メガ・ランチャーのような大型火器を使用する際に特に有効だけではなく、フライング・アーマーが大部分を占有する背部構造内において、最小限度のスペースで高度なAMBAC性能を発揮できるデバイスでもあった。

フライング・アーマーは、ウェイブ・

ライダー形態での大気圏突入時に、高熱や衝撃波から機体を保護するためのもので、シヨックウェイブのコントロールにも用いられる。

また、推進器や背部／下面装甲としての機能も持ち合わせているため、MS形態や宇宙／大気圏内飛行時でも有用な装備と考えられた。



ロング・テール・スタビライザー



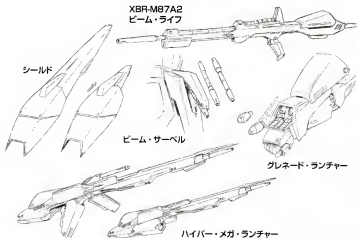
形態を問わない運用性を持つ Zガンダムの兵装

可変MSや可変MAでは、各形態だけでは使用できない専用の装備はデットウェイトとなるため敬遠される傾向にあり、形態を問わない兼用装備が重用されるようになる。

これはMSZ・006 Zガンダムでも同じで、ロング・テール・ステビライザーやフライング・アーマーなどの両形態兼用装備が採用されている。

武装面でも両形態兼用化が進んでおり、MS形態専用といえるのは頭部バルカン砲程度となっている。

主兵装であるビーム・ライフル（ポウワ社のXBR・M87A2）は、MS形態で



はバレルを展開したマニピュレーター対応火器として、ウェイブ・ライダー形態ではバレルを縮めて胴体上に固定火器として装備される。また、その出力は5.7 MWと強力である。これは、MS形態ではロング・ビーム・サーベルとしても使用可能であり、両形態を頻繁に使い分ける戦闘では、即応性が高い兵装として重宝された。

腰部に内装したビーム・サーベルも、ウェイブ・ライダー時にはビーム・ガンとして利用可能であった。なお、ビーム・サーベル時の出力は0.65 MW、ビーム・ガン時の出力は1.3 MWとなっている。

前腕部のグレネード・ランチャーは、アンカーワイヤー射出ユニットとしても用いられた多目的装備で、大型カートリッジによる装弾数増加も可能であったが、これを装備したままでの変形は不可能であった。ただし、ウェイブ・ライダー形態では発射口が真後ろを向いてしまうこともあって、両形態での兼用という点では疑問が残る。

Zガンダム最強の火器が、最大全長20mを超えるハイパー・メガ・ランチャーである。百式のメガ・バズーカ・ランチャーの改良型であり、小型ジェネレーターを搭載していることもあって、対MS用としては十分な火力を発揮した。出力は8.3 MWである。

なおビーム・ライフルと同様に、ウェイブ・ライダー形態ではバレルが半収納状態となり、機体下面の固定火器として使用可能とされる。

Zガンダムも対MS戦闘を想定したMSであるため、シールドを装備する。

ただし、ウェイブ・ライダー形態での下面中央ユニットを兼ねるため、シールドを喪失すると大気圏再突入能力に重大な問題が発生するという問題もあった。これは、装備兼用化に伴う弊害といえる。

高度な運用柔軟性と戦闘能力を証明した Zガンダムの戦果

グリブス戦役中期のU・C・0087.08、実戦に投入されたMSZ-006 Zガンダム（この時期に投入された機体は「初号機」とも呼ばれる）はアーガマ隊のニュータイプ、カミーユ・ビダンの乗機となった。

既に運用されていたティターンズの可変MSを超える性能を持つZガンダムは、その機動性による先制攻撃や、戦闘能力を活かした高強度目標（アクシズを率いるハマーン・カーンの「AMX-004 キュベレイ」など）への攻撃に投入された。

また、後の第一次ネオ・ジオン戦争も含めれば、MSを乗せた状態での大気圏再突入を二回も成功させており、ウェイブ・ライダー形態での性能も証明している。

一連の活躍や高い性能、そして「ガンダム」の名により、Zガンダムはエウーゴの象徴——フラッグシップ・マシンとして広く認知されるようになった。加えて、パイオ・セン

思われたが、サイド1・1パンチ「シャングリラ」でアーガマに乗り込んだ民間の少年ジウド・アーシタにより、再び戦場へと舞い戻ったのだった。このジウドもやはり、かつてのアムロ・レイやカミーユのように、ニュータイプとしての素養を持った少年であった。



フライング・アーマーのデータを参考にしたウェーブ・ライダーは、単独での大気圏突入能力をも有しており、高い運用性を示した。

サーの追加をはじめとするアップデイトや、カミーユのニュータイプとしての成長により、設計を超える性能を発揮した。

特に、グリプス戦役末期には、耐ビーム・バリアの発生やビーム兵器の威力を増大などの現象を見せていた。そして、グリプス戦役期の最強のMSのひとつである「PMX-003 ジ・O」の撃破は、Zガンダムを持つ性能の高さを証明するものといえた。

しかし、ジ・Oとの戦闘でパイロットのカミーユは戦闘不能になり、Zガンダム自体も深刻なダメージを受けてしまった。

こうしてZガンダムは戦線から消え去るかに



PMX-003 ジ・Oとの戦闘では、カミーユ・ビダンの能力とパイオ・センサーの相乗効果によって想定外の力を発揮している。

この時、既にティターンズは壊滅していたが、アクシズ（ネオ・ジオン）が軍事行動を再開しており、ジュドーのZガンダムもアクシズとの間で戦闘を繰り返した。

ジュドーは短期間で「MSZ-010 ZZガンダム」へと乗り換え、替わって志願兵のルー・ルカがメイン・パイロットとなる。ジュドーと同じくニュータイプとしての素養を持つ彼女の操縦により、第一次ネ

オ・ジオン戦争を最後まで戦い抜いたのである。

なお第一次ネオ・ジオン戦争末期、ザビ家の血統を自称するグレミー・トトが、「NZ-000 クイン・マンサ」というニュータイプ専用大型MSを投入しているが、これを撃破したのがルーのZガンダムであった。



第一次ネオ・ジオン戦争でもエゥーゴの主力として運用され、戦争の最終盤には中破しながらグレミー・トトを撃破した。



アーガマ隊①

——「Z計画」系MSの運用部隊にしてエウーゴの中核部隊

「Z計画」で開発されたMSやその系列機は、エウーゴやカラバの部隊を中心に運用されている。その中でも特に有名な部隊がアーガマ隊である。

強襲巡洋艦アーガマを母艦とするアーガマ隊は、ガンダム Mk・Ⅱ強奪事件直前に編制されたエウーゴの中核部隊であった。

当初は一年戦争以来のベテランであるヘンケン・ベッケナー中佐が艦長を務め、RMS・099リック・ディアスを駆るクワトロ・バジーナ大尉ことシャア・アズナブルをはじめとする数名のMSパイロット、そして艦の運用に携わるクルーたちで構成されていた。

その後、RX・178 ガンダム Mk・Ⅱや MSZ・006 Zガンダムのメイン・パイロットとなる軍属カミーユ・ビダンや、ティターンズから転向したエマ・シーン中尉、かつてのホワイトベース艦長でアーガマの艦長を任されることになるブライト・ノア大佐らに参加し、人員が強化されていた。また、後にはカミーユの同級生だったファ・ユイリイ軍曹や、ハヤト・コバヤシの養子カツ・コバヤシらも加わった。

アーガマ





MSZ-006とMSN-00100の2機はエゥーゴのフラッグシップ機として活躍し、2度の戦乱を通じて多大な戦果を残した。

途中、幾人かの転属や戦死はあったが、ベテランとルーキーの混成という編制は続き、これが一年戦争時のホワイトベース隊との大きな違いとなっていた。

それと同時にMS部隊の強化も行われ、まずクワトロ大尉のMSN-00100百式曹が搭乗したMSA-005メタスも配備され、最大で3機の「Z計画」系MSが配備されることになった。

特にZガンダムと百式の存在は、敵味方を問わず注目を集め、名実共にエゥーゴの中核部隊として運用されることとなった。

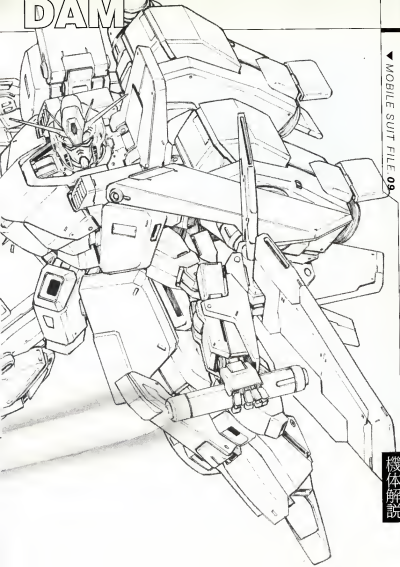
アーガマ隊以外の「Z計画」系MSの運用部隊として、3機のZガンダム・タイプを装備したカラバのチャクラ研究所が知られる。また、第一次ネオ・ジオン戦争後に編制された外郭新興部隊ロンド・ベル隊でも百式系MSが配備された時期があったといわれる。



カミーユ・ビタン

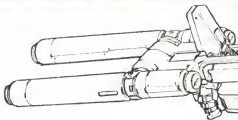
DAM

▶ MOBILE SUIT FILE.09



機体解説

MSZ-010 ZZ GUN



突出した火力と合体変形機構を持つ
「最強のガンダム」

ZZガンダム

SPEC

全高: 19.80m / 全高: 21.11m

本体重量: 32.7t / 全備重量: 60.4t

ジェネレーター出力: 7.340kW

スラスター推力: 101,000kg

装甲材質: ガンダリウム合金 (ガンダリウム)

武装: ダブル・ビーム・ライフル、ハイ・メガ・キャノン

ハイパー・ビーム・サーベッ&2 (ビーム・キャノン兼用)

ダブル・アロカン&2、背印2 (連装ミサイルランチャー&2

ブレード&2)



MSZ-006
ZZガンダム

MSZ-006 Zガンダムの後を受けて、アナハイム・エレクトロニクス社が開発した合体変形式MSが「MSZ-010 ZZガンダム」で、他の追隨を許さない攻撃力が特徴である。

Zガンダム同様、アナハイム・エレクトロニクス社がエウーゴに提供した「Z計画」系のMSで、第1次ネオ・ジオン戦争におけるエウーゴを象徴するMSとして知られている。

RX-78 ガンダムとその支援機Gファイター、つまりGアーマーのシステムをMS単独で再現した機体であり、上半身を構成する戦闘機「コア・トップ」、中央

管制モジュールの「ネオ・コア・ファイター」、下半身となる増加推進器・兵装ユニット／攻撃機の「コア・ベース」の最大3機に分離して運用可能であった。

これら3機が合体した長距離移動形態「Gフォートレス」がZZガンダムに変形する。合体分離／変形機構による柔軟な運用性以上に重視されていたものが、フル装備のZガンダムをも遥かに凌ぐ火力であった。

主兵装の2連装メガ・ビーム・ライフルは、一門だけでもZガンダムのハイパー・メガ・ランチャーを上回る出力を持つほか、20mを越える岩塊をも一撃で両断するハイパー・ビーム・サーベル、42発ものミサイルなど、多様かつ強力な火器群を有していた。

頭部に内蔵されたハイ・メガ・キャノンに至っては、コロニー・レーザーの20%の出力を発揮するとされており、「最強」というに相応しい攻撃力を有するガンダムである。



MSの爆発的進化と決戦兵器の必要性

戦場を制覇する高性能MS

U・C・0087に勃発したグリプス戦役は、RMS・099 リック・ディアスに代表される新世代MSを歴史の表舞台に立たせると共に、兵器開発を爆発的に加速させた。

——ガンダリウムⅡ、ムーバブル・フレイム、可変機構、メガ・ランチャー、サイコミュ——が完成へと近きつつあった。この結果、可変MSのMSZ・006 Zガンダムや、重装かつ高い機動を持つPMX・003 ジ・O、サイコミュ制御式無線攻撃端末ファンネルを備えたAMX・004 キュベレイなどが登場することとなった。しかし、各勢力は漠然と強力なMSを欲したわけではない。

兵器を巡る法則のひとつに、「量は質に転化しな



ホシゴロ・シティでMRX-009と対峙するRX-178。2機の戦力差は歴然であり、RX-178は苦戦を強いられた。

い」というものがある。

これは、質の低い兵器を大量に揃えても、著しく高い品質の兵器には敵わないことを意味しており、宇宙世紀においても事情は同じであった。

実際、ティターンズが投入した巨大可変MA「MRX-009 サイコ・ガンダム」に対し、エウーゴとカラバ（地球上の反地球連邦組織）の連合軍は、「一年戦争最高のニュータイプ」アムロ・レイが駆るリック・ディアスと、やはりニュータイプであるカミーユ・ビダンのRX-178 ガンダム Mk-II を投入したが、撃破には至らなかった。

これはまた、いかに練度の高いパイロットであっても、兵器自体の性能差を前にしては無力になり得ることの証明でもあった。

こうして高性能MSの必要性が再認識される中、各勢力はよりハイスペックな新型MSの開発を加速させていったのである。

決戦兵器としてのMSと「Z計画」の進展

高性能な新型MSの開発は、可変MSやサイコミュ搭載MSに代表されるハイエンドMSを生み出した。こうしたMS開発の加速に伴い、「MSA-003 ネモ」や「RMS-154 パーザム」などの主力MSの性能も上がっていったが、ハイエンド機との性能



グリプス戦役以降、MSの高性能化が急速に進み、優れたパイロットであったカミーユ・ビダンも機体となく危機に瀕している。



AMX-004とPMX-003の戦跡は、ネオ・ジオンとティターンズを代表する超高性能MS同士の激突であったといえる。

差は埋めたい溝が存在していた。

トータルコストの増大やパイロット確保などの側面から、数が限られるという問題もあったものの、量産MSを駆逐可能な戦闘能力を持つ、ハイエンドMSを戦場のキーと見做し、これを重視する傾向はより強固なものへとなっていた。

第一次ネオ・ジオン戦争時のネオ・ジオンで決定的となるこのような傾向は、ハイエンドMSを「決戦兵器」と捉えるものであった。極論するならば、少数の超高性能機によって戦争の勝敗を決するという思想といえた。

では決戦兵器と呼べるほどの、MSの高性能化とは具体的にどのようなものだろうか？

既に述べた可変機構やサイコミュの採用も高性能化には違いないが、ミノフスキー粒子散布環境下の戦闘が、目視レベルの近距離戦闘となる大



ハイエンド機の開発に遅れていたエゥーゴも「Z計画」でMSZ-006を開発、戦力の中核として運用した。

前提が変わるほどではない。つまり、旧世紀末期のよ
うな遠距離精密攻撃能力は期待できないのである。

結果、決戦兵器的MSに求められたものが、サイコ
ミュの搭載や火力の増大、機動性の大幅な強化となる
のは必然だった。

グリプス戦役中のエゥーゴも、MSの決戦兵器化傾
向や、MRX-009サイコ・ガンダムに代表される
超高性能機への対抗する必要性から、大火力・高機動
性のMSを欲し、アナハイム・エレクトロニクス社に
開発を依頼した。

この依頼は、MSZ-006 Zガンダムの完成と前
後した時期のようで、アナハイム・エレクトロニクス
社としても「Z計画」を新たな形で発展させる契機となつた（エゥーゴの依頼以前から、
独自に新型MS開発を行っていたともいわれる）。

こうして、アナハイム・エレクトロニクス社10番目とされるガンダム・タイプMS、
θ（シータ）ガンダム。こと、MSZ-010 ZZガンダムの開発がスタートしたの
だった。

ガンダムの名を持つ機動兵器の中でも、突出して異質な存在といえる機体が、地球連邦軍傘下のニュータイプ研究所で開発され、グリプス戦役から第一次ネオ・ジオン戦争において投入された、「サイコ・ガンダム」シリーズである。

サイコ・ガンダム・シリーズもガンダムの名を持つ以上、「最強」という要素を抜きにして語れない兵器である。その最強性はMRX-009 サイコ・ガンダムと「MRX-010 サイコ・ガンダム Mk・II」に共通した可変MAというフォーマットや、MS形態時で全高40mを超える巨体からも窺い知れる。

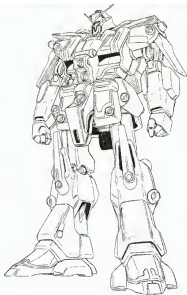
サイコ・ガンダム・シリーズは、絶大な攻撃力を有する多数のメガ粒子砲、鉄壁の防御力を持つ重装甲とIフィールド・ジェネレーター、大気圏内での自由飛行能力を与えるミ



MRX-009 サイコ・ガンダム

「サイコ・ガンダム」シリーズ

異形の巨大可変MA型ガンダム



MRX-010 サイコ・ガンダムMK-II

ノフスキー・クラフトなどを搭載する、まさに要塞のような機動兵器であった。しかし、システムが複雑で、コンピュータのサポートがあったとしても操縦が難しいという問題も併せ持っていた。

この問題は搭乗員を増加することで解決可能ではあったが、サイコ・ガンダムでは別の解決策がとられていた。それがサイ

コミュの搭載と、パイロットに人工ニュータイプ「強化人間」を登用することであった（サイコ・ガンダムの名は、これらに由来しているとも考えられる）。

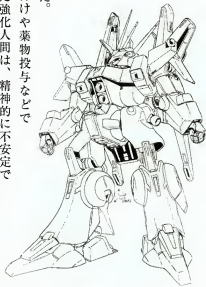
空間把握能力や先読み能力に優れる強化人間とサイココミュの組み合わせは、無数の火器の状況に応じた使い分けや、運動性が低い巨体での対MS格闘戦すら可能とした。

地球連邦軍がこのような兵器を実用化できたのは、ジオン公国系ニュータイプ関連技術の接収や、その研究開発を行うニュータイプ研究所の設立があったためである。

ニュータイプを人工的に作り出す強化人間の研究は進んでおり、多連装のメガ粒子砲を装備し、それらをサイコミュで制御するMSという発想自体は、MSN・02 ジオングでも既実証されていたため、機体の開発における決定的な問題とはならなかったようだ。

しかし、強迫観念の植え付けや薬物投与などでニュータイプ能力を引き出した強化人間は、精神的に不安定であった。さらに、強化人間用サイコミュはパイロットに多大な負荷を掛けるという問題も抱えていた。

こうした問題のため、完成したサイコ・ガンダム・シリーズは、ソフトウェアを中心として信頼性に欠ける兵器となっていた。しかし、ここで培われた技術はアクシズ（ネオ・ジオン）系MSにも反映され、MSの高性能化や一般用サイコミュの開発に貢献している。



サイコ・ガンダム Mk-IIを参考に開発された、一般人对応の類似サイコミュ機「AMX-014 ドーベン・ウルフ」。

恐竜的進化を果たした

ZZガンダムの開発

RX・78ガンダムの復活と大火力&戦略機動性の融合

MSZ・010 ZZガンダムは、「RX・78ガンダムの復活」を設計コンセプトの中核としていた。そこに「MS単独でのGアーマー（ガンダム+Gファイター）システムの再現」が加えられている。これが、エゥーゴからの依頼とMSの決戦兵器化という流れの中、メガ・ランチャー級の大火力に高速展開能力を付与したMSという形式で具体化していったのである。MSZ・006 Zガンダム同様、運用母艦の問題から、機体サイズは20m以内という制限が課せられていた。

以上の課題は、大出力メガ粒子砲の内蔵や高い出力を持つ熱核反応炉/ジェネレーターを搭載、可変機構の採用で、これらは簡単に達成できるかと思えた。しかし、それらが機体開発を難航させたのである。これらの仕様をそのまま採り入れた場合、機体サイズがあまりに大きくなってしまふのである。

ZガンダムにGファイターに相当する増加システムを追加し、さらにメガ・バズーカ・

ランチャーを装備したような機体が、小型で済むはずはなかった。それに、このような大規模システムを稼働するためには、莫大なジェネレーター出力も必要となった。

そこでアナハイム・エレクトロニクス社の開発陣は、Gアーマーのコンセプトを合体変形機構として再現すると共に、Zガンダムで培われた分散配置型ジェネレーターによる高出力化を目指すこととなった。

こうして試作された機体が、プロトタイプZガンダム^①と呼ばれるMSZ-009である。この機体は上半身と下半身が、高出力ジェネレーター搭載の戦闘機に分離変形するものだった。しかし、それでも十分な出力が確保できず、パイロットの生存性にも問題が指摘された（Zガンダムから継承したバイオ・センサーのデータ回収も重視されたことは間違いない）。

そこで、追加ジェネレーター兼脱出機構としてコア・ブロック・システムが採り入れられ、腹部と中央管制モジュールを構成するFXA-07GBネオ・コア・ファイター（以下コア・ファイター）が採用されたのだった。

コア・ブロック・システムに代表される追加処置により完成したZZガンダムは、ハイ・メガ・キャノンを稼働するに足る7,340kWものジェネレーター出力を有していた。さらに、合体変形機構による高い機動性をも獲得しており、その性能はネオ・ジオンを震撼させることになった。

合体変形機構を採り入れたZZガンダムの構造

MSZ・010 ZZガンダムは、Gフォートレスと呼ばれる重爆撃機形態に変形可能である。これは長距離移動用の巡航モードで、Zガンダムを構成する二大要素である火力と機動力の内、機動力（特に戦術／戦略機動力）を担当している。

このようにZZガンダムの「足」といえるGフォートレスは、最大3機に分離する。

それが上半身のコア・トップ、腹部のFXA・07GBネオ・コア・ファイター、下半身とバックパックから構成されるコア・ベースである。（コア・ベースは、増加ブースター部分に相当する機能しかないため、自律行動にはコア・ファイターとの合体が必要となる）。

単独で出撃したコア・ファイターからの合体指示により、コア・トップとコア・ベースからそれぞれの管制を担当するコア・ファイターが切り離される（機が分離して出撃する場合、コア・トップとコア・ベースにはコア・ファイターが接続されているのが通例）。その後、中央モジュールに指定された（合体指示を出した）コア・ファイターを中心に3機が合体してGフォートレスになり、最終的にMS形態へと変形するのである。



Gフォートレス



このような合体変形機構は、各機に搭載されたジェネレーターを統合して大出力を得るために必要なほか、多角的な運用や運用柔軟性などに優れていた。

その一方で、合体変形機構は耐弾性の低下を招くため、各形態で使用しないユニットは最終装甲の内部に収納するようになっていた。しかし、腹部を中心に構造の脆弱化を招き、この部分がZZガンダムの欠点として指摘されている。

それでも、分散配置式ジェネレーターや大型バックパックなどによる高性能と機体サイズ（頭頂高19.86m）の両立は高く評価されている。本機開発時に課せられた過酷な仕様要求は、これらシステムの考案によりクリアされたとしても過言ではない。

強力無比なZZガンダムの兵装

単独でメガ・ランチャーに匹敵する火力を求められたMSZ-010 ZZガンダムは、通常の戦闘で使用する兵装においても、ほかのMSを圧倒するパワーを持っている。

FXA-07GB

ネオ・コア・ファイター



コア・トップ



コア・ベース





ハイパー・ビーム・サーベルは小陨石を両断するほどの威力を有し、その光景を目の当たりにしたマシュー・セロを驚愕させた。

メガ・
ビーム・ライフル



バックバック



主兵装であるメガ・ビーム・ライフルは、出力10・6 MWのメガ粒子砲2門で構成される大火力火器である。ジェネレーター内蔵型のため、MS本体に負荷をかけることなく大出力化が容易で、ビーム・ライフルよりハイパー・メガ・ランチャーに近い構造を持つ。

スペック上の出力と連装バレルからも理解できるようにその威力は絶大で、直撃しなくとも通常のMSなら撃破可能であった。また、同時にコア・トップの機首ユニットも兼ねており、コア・トップやGフォートレス形態でも使用できる。これは、合体変形MSならではの装備並存機能に因るものである。

副砲といえるバックバックのビーム・キャノンは、2門を装備する。

出力は20 MW (10 MW×2)。Gフォートレス時およびコア・ベース時には3・2 MW×2で、カタログスペック上はメガ・ビーム・ライフルに迫る火力を発揮する。

このビーム・キャノンは、マニピュレーターでホールドす



MS形態時にはコア・トップの翼がシールドとして利用可能となった。この装備は重要部位への直撃を防ぐために用いられた。



頭部のハイ・メガ・キャノンはMSZ-010を象徴する武器で、AMX-004との戦闘では砲口が溶解するほどの出力を見せた。

ること、格闘兵装のハイパー・ビーム・サーベルとしても利用できる。

出力は1.1MWとビーム・サーベルとしては著しく高く、さらにビーム刃が通常の1.5倍もの長さを持つため、攻撃範囲も広い。MS級のサイズの岩塊を両断したり、MRX-010サイコ・ガン

ダムMk・IIの小型機である「AMX-014 ドーベン・ウルフ」を十文字に切ったエピソードからもその威力が窺い知れる。

このほかにもバックパックには、2基の21連装ミサイル・ランチャーを搭載している。ここに装填されるAMM-13Sはマイクロ・ミサイルとも呼ばれるが、1発のミサイルがMS用バズーカの弾体とほぼ同じサイズのため、一斉発射時には想像を絶する火力を発揮した。

また通常弾兵器であるため、Iフィールド・ジェネレーターを持つ目標にも有効であった。それだけではなく、ミノフスキー粒子散布環境下でもある程度の追尾性能が期待でき

る。熱源イメージ誘導。式を採用したことも利点となっている。

頭部には、補助火器としてダブル・バルカンを内装する。

これはバルカン砲4門（60mmバルカンと90mmバルカンをそれぞれ2門という説もある）で構成されるもので、MS内装式機関砲としては強力だが、基本的には接近防御用として使用される。

そして、ZZガンダム最強の兵装である頭部ハイ・メガ・キャノンは、出力50MWの超大火力が特徴である。頭部に内装されるため射界が限定され、一回の射撃でMS本体の出力低下を招くという問題もあった。しかし、照射時間が長く、ショートバレル特有の拡散効果を利用可能というメリットもあり、特に近距離帯では絶対的な火力を誇った。

ネオ・ジオンの脅威となり続けた決戦兵器

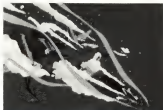
U.C. 0088. 03、FXA・07GB ネオ・コ



標準装備された大出力ビーム兵器に加えて大量のミサイルを搭載。第一次ネオ・ジオン戦争時における最大の火力を誇るMSであった。

FA-010Sに施された削りビームコーティングは、NZ-000 クィン・マンサのビームを弾くほどの効果を発揮した。





アーガマが地球に降下した際には、ネオ・ジオンの水陸両用MS部隊とGフォートレスで水中戦を行い、海中で変形もしている。

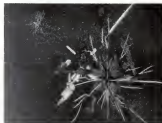
ア・ファイターやコア・ベースを先行して受領していたアーガマ隊は、3月16日に至ってコア・トップも受領すると、遂にMSZ・010 Zガンダムを稼働させた。

アーガマ隊で初稼働を果たしたZZガンダムは、ニュータイプと目された軍属の少年

ジュドー・アースタに任せられると、MSZ・006 Zガンダムを撃破寸前まで追いつめた「AMX・103 ハンマ・ハンマ」を圧倒し、その絶大なパワーを実証した。その後、数少ないエウゴの実働戦力だったアーガマ隊の、そしてガンダム・タイプMS4機で編制された。ガンダム・チームの中核として、第一次ネオ・ジオン戦争を戦っていくことになる。

戦火の中で本機が示したのは、超MS級の火力やパイ

ラカン・ダカランのAMX-014を一撃で撃破するなど、ネオ・ジオンの名だたるパイロットと機体を打ち破った。



ダカールを目指したガンダム・チームのアフリカ大陸横断行では砂漠地帯での戦闘が発生したが、劣悪な環境でも高い性能を発揮した。



第一次ネオ・ジオン戦争の最終局面にはハマーン・カーンが駆るAMX-004との一騎討ちを演じ、これを撃破している。

オ・センサー採用による操縦系の優秀さだけではない。「ガンダム」の名に相応しい運用柔軟性や多用途性は、分離状態での運用や戦場での合体変形、水中や砂漠などでの局地戦闘能力という形で証明されている。

また、ラカン・ダカラン大尉が操縦する高性能機AMX-014 ドーベン・ウルフの撃破や、ニュータイプ専用の巨大MSNZ-000 クインマンサとの戦闘で見せた耐ビーム・バリアの発現は、ZZガンダムの性能を示した顕著な例として知られている。

ハマーン・カーンのAMX-004 キュベレイとの戦闘では、分離状態のまま稼働不良に陥ったが、ジュードのニュータイプ能力がパイオ・センサーと共鳴したためか、強制合体と操縦系の回復までを果たした。そして、限界を超えた出力でのハイ・メガ・キャノン発射を行った後、格闘戦でキュベレイを撃破したのだった。

こうしてZZガンダムは、ネオ・ジオンが投入した高性能機動兵器を退け、戦争の趨勢を決する「決戦兵器」としての威力を見せ付けたのである。

ARMOUR ZZ GUNDAM

さらなる高みを目指した
ZZガンダムの最終形態

フルアーマー ZZガンダム

MOBILE SUIT FILE.10

スペック

全高: 17.90m (全長: 33.14m)

本体重量: 32.7t (全機重量: 87.2t)

推進力: 出力: 7,800kW

最大速度: 124,800km/h

装甲材質: ガンダリウム合金 (ガンダリウムγ)

武器: ダブル・ビーム・ライフル、ハイ・メガ・キャノン

ハイ・メガ・キャノン・サーベル×2 (ビーム・キャノン兼用)

スラッシュ・バレット×2、機体ハイ・メガ・キャノン

腕部: 連装ミサイル・ボット

胸部: 連装スラッシュ・ミサイル・ランチャー×2

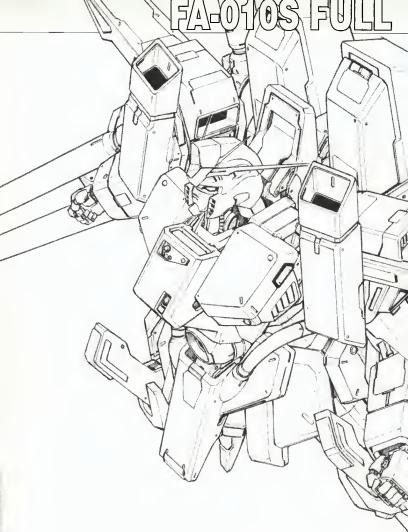
腹部: 連装スラッシュ・ミサイル・ボット

脚部: 2連装大型ミサイル・ボット×2

背部: 18連装2段式ミサイル・ランチャー×2

機体解説

FA-010S FULL





FX-010S
フルアーマーZZガンダム



MSZ-010S 強化型ZZガンダム

絶大な火力を誇る兵装群と、合体分離機構による運用柔軟性に秀でたZZガンダムにも、欠点がない訳ではなかった。特に、コア・ブロック・システムの導入によって防御力が低下した腹部は、構造上の欠点となっており解決策が模索されていた。

そして誕生したものが、変形機構を一時的に犠牲にしてまでも、着脱可能な増加装甲で耐弾性向上を図った「FA-010S フルアーマーZZガンダム」だ（ZZ自体も改裝され「MSZ-010S 強化型ZZガンダム」となった）。

「フルアーマー・オペレーション」と呼ばれるMS用増加装甲システムは、一年戦争時のRX-78 ガンダムから企画されていたとされる（少なくとも、RX-78NT-1 アレックス用の増加装甲システムは確認されている）。

これには、耐弾性向上を目指しただけでなく、攻撃力強化のための増設兵装、増加装備類による機動性、運動性の低下を軽減するための補助推進器なども盛り込まれる場合が多く、ZZガンダム用も同じ仕様であった。

合体変形機構の都合上、比較的脆弱な腹部や脛部などに増加装甲を追加。これに耐ビーム・コーティング処理が施され、総合的な耐弾性は著しく向上した。同時に、腰部や肩部、脚部に補助推進器やプロペラントタンクを増設し、機動性や運動性の低下を防いでいる。

これ以外に、特徴的なものが増設された火器群である。代表的なものだけでも、胸部増加装甲内のミサイル2種、肩部のスプレー・ミサイル・ランチャー、前腕部のミサイル・ポッド、そして腹部の使い捨て式ハイ・メガ・キャノンが装備されている。

これらが、通常でも高い火力を誇る本機を、「最強」を超えた高みへと押し上げたのだ。





アーガン隊②

— 4機種のガンダムを駆った「ガンダム・チーム」

ガンダム・タイプMSは、どの時代にあってもハイエンド機の代名詞であり、その絶対数が少ない。しかし、中には多数のガンダム・タイプMSを装備したMS部隊も存在していた。

その代表として、第一次ネオ・ジオン戦争時のエウーゴMS部隊、通称「ガンダム・チーム」が知られている。

ガンダム・チームはグリプス戦役の終結直後、少年軍属と志願兵を新たに加えて再編された、アーガン隊（後にネエル・アーガン）所属のMS部隊である。

所属したのは、サイド1・1パンチ「シヤングリラ」出身のジウド・アーシタ、ピーチャ・オレーグ、モンド・アガケ、エル・ピアンノ、イーノ・アップバブ、志願兵のルー・ルカの計6人で、搭乗MSやサポート担当は状況によって変化した。

配備MSはMSZ-010 ZZガンダム、MSZ-006 Zガンダム、MSN-00100 百式、RX-178 ガンダム Mk-II の4機で、これに支援機として「FXA-08R メガ・ライダー」が加わっていた。



ネエル・アーガン



ガンダム・チーム編成の背景には、少数精鋭で戦わざるをえないエゥーゴの内部事情もあった。しかし、その戦力はネオ・ジオンのエースパイロットをも凌駕していた。

この編成を見てもわかる通り、ガンダム・チームは4機ものガンダム・タイプMSを装備しており（百式はガンダム系の頭部形状と開発コード。δガンダムから、一般にガンダム・タイプMSと見做される）、その総合戦闘能力は、MS小隊レベルの部隊としては極めて高いものであった。

ガンダム・チームの前後にも、一年戦争時の第08MS小隊やグリプス戦役時のアーガマ隊、ザンスカール戦争時のシユラク隊のように、複数のダンダム・タイプMSを装備したMS部隊は存在したが、まったく異なる4機種の同時運用というのは異例であった。

これには、アーガマ隊が当時行動可能な数少ないエゥーゴの戦力だったこと、そこに投入可能な高性能MSを優先的に配備したことが挙げられる。さらに、最前線にガンダム・

タイプMS部隊を投入し、アクシズ（ネオ・ジオン）にプレッシャーを掛けるといった戦略上の計算もあったと考えられる。

当然のことながら、敵味方の双方から強力なニュータイプとして認知されていたジウド・アーシタと、彼が操縦するZZガン

ジウド・アーシタ

ダムを中心としたガンダム・チームは突出した戦闘能力を誇り、第一次ネオ・ジオン戦争終結に大きく貢献したのだった。



Chapter04：シャアの反乱

U.C.0093

0079

0080

0081

0087

0088

0093

0123

0153

MS-04A
Zeta Gundam



THE LEGEND OF MOBILE SUIT GUNDAM



DATA FILE

MOVIE

『機動戦士ガンダム 逆襲のシャア』

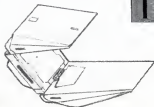
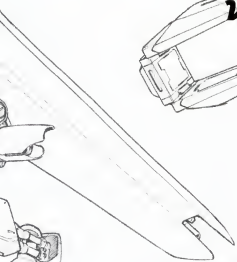
1988年3月12日公開／松竹系／2時間

RX-93 νGUNDAM

ガンダム・タイプMSを母体とした
汎用MSとニュータイプ専用機の融合

νガンダム

▶ MOBILE SUIT FILE. 11



DATA

機高：22.0m

本体重量：27.9t

シールド出力：2.960kW

スラスター推力：97,800kg

装甲材質：ガンダリウム合金（ガンダリウム）

武装：ビーム・ライフル、ニュー・ハイパー・バズーカ

ビーム・サーベル、頭部バルカン砲

オプション（選装）：サイル・ビーム・キャノン搭載

ブレン・ファンネル

機体解説



アムロ・レイが基礎設計を行い、アナハイム・エレクトロニクス（AE）社が開発と製造を担当した地球連邦軍の試作MS。歴代のガンダム・タイプMSのデータを統合することで汎用MSとしての完成度を追求した機体で、RX-78 ガンダムの基本構造を踏襲し、一部にZ系列機の部材を取り入れるなど、これまでに培われたMS開発技術を反映した設計となっている。

その一方で、RGZ-91 リ・ガズィのコクピットを改裝して用いるなど、機体各部に可能な限りの既存部品や軍の規格品が流用されている。そうすることで、ワンオフ機の多くが抱える維持の難しさを軽減し、運用性と耐久性の向上が図られていた。

本機はガンダム・タイプMSで初めて完全な形のサイコミュ・システムを搭載したニュータイプ（NT）専用機でもある。新素材サイコ・フレームによって小型化したシステムと、それをベースとしたサイコミュ兵器「フィン・ファンネル」を装備することで、パイロットであるアムロのニュータイプ能力を十全に発揮しうる汎用MSという機体特性を実現した。

特に、フィン・ファンネルはAMBAC機構とメガ粒子加速帯が一体化し

RX-93
νガンダム



た特徴的な構造で、ビームバリアを展開することも可能な多機能のサイコミュ兵器であった。

加えて、本機にはビーム・ライフルやビーム・サーベルといった標準的な武装も装備されており、あらゆる局面に対応できる戦闘力を備えた機体だった。そして、大型化や大火力化が主流であった当時のMS開発の方向性に一石を投じた存在でもあった。



シャアの台頭を許した地球連邦政府の怠慢

反地球連邦運動を糾合したネオ・ジオンの復興

グリブス戦役から第1次ネオ・ジオン戦争へと続いた戦乱は地球連邦政府を著しく混乱させ、結果としてスペースノイドに対する無関心を加速させた。そうした事象の一例が戦争難民に対する地球連邦政府の救済措置であり、難民収容用に改造したスペース・コロニー「スウィートウォーター」も管理が不十分なまま半ば放置されていた。

地球連邦政府はU.C. 0089、08、25、親スペースノイド派のスペース・コロニーに経済制裁を加え、宇宙生活者への締め付けを強めていた。そうした状況にスペースノイドの不満は募り、U.C. 0090に入ると反地球連邦政府運動が活発化する。

さらに、積極的にその運動に加わらずとも、過激派や不穏分子の追及に非協力的な態度を取る者も多かった。地球連邦政府への反感はスペースノイド全体に蔓延しつつあり、暴発は

時間の問題とも考えられていた。



スウィートウォーター

スウィートウォーター



そうした反地球連邦政府運動を糾合してスペースノイドの求心力となった人物が、シャア・アズナブルであった。グリプス戦役終結後に姿を消していた彼は、その間に地球連邦軍の目をかい潜って旧ジオン公国軍残党をはじめとする反連邦勢力をまとめ、地球連邦軍に対抗する戦力を整備していた。地球連邦の組織内に潜伏した協力者が彼の活動を支援したことも、水面下での組織拡充を促進したのである。

ハマーン・カーンのようにザビ家の再興を掲げるのではなく、ジオン・ズム・ダイクンの思想の継承者を標榜することで、彼はスペースノイドからの広い支持を得ることに成功していた。そして、地球連邦政府に反感を抱く民衆を味方につけることで、着実に地盤を固めていった。グリプス戦役でエウゴの一員として戦い、その過程で地球連邦政府の自浄が不可能であると痛感した彼は、実力をもって変革を成そうとしたのである。

U.C. 0092の12月に入ると、シャアは表立った行動を開始する。13日にネオ・ジオン総帥として地球連邦軍に対する攻撃を示唆する声明を発すると、22日には艦隊をスウィートウォーターに派遣してその占拠を宣言、同時にネオ・ジオンの復興を宣布したのである。この事件をよって、それまでは明確な形を得なかった地球連邦政府とスペースノイドの対立構造が一気に顕在化し、地球圏の緊張状態は高まっていった。



シャア・アズナブル

ロンド・ベル隊の再編

一方、地球連邦軍は相次ぐ戦乱で疲弊し、組織の立て直しも満足に行われていない状態だった。宇宙軍の艦艇はテロの鎮圧や内乱防止のために各サイドと月軌道内の小惑星に分散され、艦隊としての再編も進められていなかった。また、通常兵器の新規開発も実質的に凍結され、戦力の整備も止まっていた。

その状況は大規模な紛争は起こりえないとする地球連邦政府の楽観が招いたもので、第1次ネオ・ジオン戦争の終結でネオ・ジオンが実質的に消滅し、敵対勢力が去ったことによって組織が弛緩していたことの証明でもあった。

しかし、楽観的な予想に反して反地球連邦政府運動は激化の一途をたどっていく。分散した駐留部隊にその対応は難しく、地球連邦軍はネオ・ジオン軍残党の追跡と反地球連邦政府運動の監視を専門に行う実働部隊を設けることで事態の対処を図った。それが、U・C・0090.03.21に再編された外郭新興部隊「ロンド・ベル隊」である。

しかし、この部隊は旧エウーゴの人員を中心に組



フライト・ノア大佐



ラー・カイルム

織されており、体制への潜在的な不満を抱く者たちを管理下に置くという側面もあった。それゆえに、任務遂行のための独立した権限を与えられながらも十分な人員と装備を与えられず、発足当時の部隊規模は小さかった。

そのため、不穏分子が潜伏する可能性が高い暗礁宙域の搜索などは物理的に不可能であり、コロニーの調査もスペースノイドの非協力的な態度に阻まれて難航することがほとんどであった。結果、過激派の跳梁とそれらを裏から掌握したシャアの策動を許すことになる。

だが、連邦政府の中にはそうした実状を危惧する者も存在した。政府高官のジョン・パウアーはロンド・ベル隊結成前のU・C・0089にRGM・89 ジェガンの量産を強行し、隊の戦力拡充を後押ししている。また、ネオ・ジオンのスウィートウォーター占拠という事態を受けて、U・C・0092、12、25にはパウアーの働きかけによってロンド・ベル隊の増強が行われた。

これによって、ロンド・ベル隊はようやく実戦部隊としての戦力を整えるに至ったのである。また、その際に大気圏内周回用ガルダに配属されていたブライト・ノア大佐を旗艦ラー・カイラムの艦長に迎え、アムロ・レイ大尉をMS部隊隊長として編入している。



RGM-89 ジェガン

ネオ・ジオンに欺かれた地球連邦政府の認識の甘さ



アデナウアー・バラヤ

ネオ・ジオンの動向に危機感を抱き、戦力の整備を急いだロンド・ベル隊とは対照的に、地球連邦政府のネオ・ジオンに対する対応は極めて鈍いものだった。

地球連邦軍との総力戦が可能なほどの戦力をネオ・ジオンが有していなかったことや、スウィートウォーターの占拠も難民コロニーのひとつに居着いただけという認識が、その要因と考えられる。ネオ・ジオンの蜂起は地球連邦政府にとって外交交渉で片がつく問題にすぎず、シヤアがスウィートウォーターの独立を求めた場合の事務処理の検討程度しか行われていなかったのである。

地球連邦政府の姿勢は、U.C. 0093. 02. 27にシヤアがインタビュ番組で表明した事実上の宣戦布告を受けても変わることはなかった。同年3月3日に実行されたネオ・ジオンのフィフス・ルナ降下作戦においても、地球連邦政府はフィフス・ルナ落としの目標となったチベットのラサから本部機能を退避させたものの、軍事報復に移ろうとはしなかった。



heilstr (ネオ・ジオン文書)



ロンドンでの和平交渉で、地球連邦政府はネオ・ジオンへのアクシズの売却を承諾。結果的に地球寒冷化作戦を発動させることとなった。



ロンドン

この作戦はネオ・ジオンから事前にリークされており、交渉の一環と受け取られたためである。事実、3月6日にはサイド1のロンドンで極秘裏に和平交渉が行われ、ネオ・ジオンは艦隊の武装解除とアクシズの譲渡を条件に地球連邦政府との和平を締結することとなる。

合もロンド・ベル隊をスケープゴートにして責任を逃れる意図があったとも考えられる。

地球連邦政府の主流派にとって、ロンド・ベル隊は「戦争好きの厄介者」であった。

しかし、ネオ・ジオンは地球連邦との間に和平を結ぶつもりはなく、その真意は譲渡されたアクシズを落下させる「地球寒冷化作戦」にあった。艦隊の武装解除を装ってルナ・ツーから強奪した核弾頭をアクシズに搭載し、それを地球に落下させて「核の冬」を引き起こすことで地球にしがみついた人々を粛清する。人類全体をニュータイプに引き上げるためのシャアの真意を、地球連邦政府の高官たちは完全に見誤っていたのである。

一方、ロンド・ベル隊はこれらの動きに対して独自の行動を取り、ネオ・ジオンの地球寒冷化作戦阻止を試みたのだった。

ロンド・ベル隊

— 地球連邦軍随一の實戦部隊の憂鬱 —

第1次ネオ・ジオン戦争終結後の混乱を収めるために編成されたロンド・ベル隊は、

U・C・0093ごろにおける地球連邦軍随一の實戦部隊として知られる。アムロ・レイやブライト・ノアといった戦史に名を残す人物が所属していたことや、RX-93 νガンダムを筆頭に当時の最新鋭装備を運用したことが、部隊の勇名を高めていたのである。しかし、実際には前述のように地球連邦軍の主流派から外れた部隊であり、ジョン・パウアーらの後ろ盾がなければともに機能することすら危うい状況に置かれていた。

ジョン・パウアーはアナハイム・エレクトロニクス社とのパイプ役となつてロンド・ベル隊の増強をバックアップし、νガンダムの開発にも一役買っている。さらには、ラー・カイラム級機動戦艦やクラブ級巡洋艦といった新造艦の配備にも尽力しており、ロンド・ベル隊を語るうえで忘れてはならない人物だったといえる。

そして、(紆余曲折を経た結果の)運用兵器の充実と並んでロンド・ベル隊を有数の実戦部隊としていたのが、同時期の地球連邦軍の実状であつた。当時の地球連邦軍は有事を想定した戦略を考えて



ロンド・ベル隊はラーカイラムを旗艦とし、ラーチャターなど数隻のクラブ級で編成されていた。

おらず、宇宙艦隊の再編も滞っていた。こうした経緯からも分かるように、大規模な戦闘に対応する能力に欠けていた。

ロンド・ベル隊が高い士気を備えた部隊であったことは事実だが、それと同時に当時の地球連邦軍において組織的な作戦行動が可能な「唯一の」部隊だったのだ。

さらに、スペースノイドにとってのロンド・ベル隊は、地球連邦政府による宇宙支配の象徴ともいえる存在だった。隊の結成から2年に渡ってすべてのコロニーを調査しながらも、シャアが戦力を整える兆候さえ見つけられなかったのは、スペースノイドの反発という大きな壁があったからにはほかならない。ガンダム・タイプMSとニュータイプ・パイロットを擁する部隊という表の顔とは対照的に、ロンド・ベル隊の置かれた状況は非常に厳しいものだったのである。

なお、ロンド・ベル隊はシャアの反乱以降も存続し、U、C、0096の時点では大規模な近代化改修を施したネエル・アーガマを運用していたといわれている。



ネオ・ジオン艦隊の偽装工作をいち早く看破するなど、ロンド・ベル隊の危機管理能力は当時の地球連邦軍内でも突出していた。



ネオ・ジオンが支持されたことからわかるように、スペースノイドには反地球連邦の意識が根強く、ロンド・ベル隊の調査も難航した。

最強の機動兵器を目指したVガンダムの開発

シャアとの対決に臨むアムロが準備した切り札

RX・93 Vガンダムの開発は、ロンド・ベル隊の戦力増強の核となるプランだったともいえる。ロンド・ベル隊に編入されたアムロ・レイは、シャア・アズナブル率いるネオ・ジオン軍との衝突において、物量に劣る敵がニュータイプ専用機を戦線に投入することを危惧した。

一年戦争とグリプス戦役でニュータイプ専用機と交戦してきた経験から、限定された戦闘における

RGZ-91
リ・ガスI



バック・ウェポン・システム





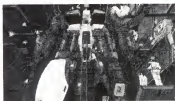
オクトバー・サラン

ニュータイプ専用機の威力を痛感していたためである。アムロは高性能のガンダム・タイプMSの配備を要請したが、当時の地球連邦軍はMSN・00100百式も含むすべてのガンダム・タイプMSを永久保存の名目で秘匿しており、配備許可が下りる状況ではなかった。ロンド・ベル隊はアナハイム・エレクトロニクス社の協力を得て、辛うじてMSZ・006Zガンダムの量産試作機であるRGZ・91リ・ガズイの配備を実現したものの、想定されるネオ・ジオン製ニュータイプ専用機に対して戦力不足は否めなかった。その結果、アムロは自らが温めていたサイコミュのアイデアを反映して、新たなガンダム・タイプMSを設計開発するという手段を採ったのである。

アムロがそこまでこだわった理由のひとつに、シャアとの戦いを強く意識していたことが挙げられる。シャアという人間を熟知していた彼は、シャアが自分との因縁に決着を付けるべくパイロットとして戦いに臨むことを予期していた。そしてシャアを倒すために、

自身の能力を最大限に発揮できるMSを求めた。その解答が、歴代のガンダム・タイプMSをベースにした機体設計と、サイコミュ・システムとファンネルの搭載だったのである。

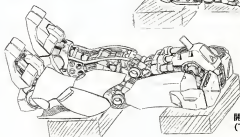
そうした経緯でアナハイム・エレクトロニクス社に持ち込まれたアムロの設計プランを元に、フォン・ブラウン工場においてVガンダムの開発がスタートした。ほぼ同じ時期にネオ・ジオンはスウィートウォーターの占拠を宣言しており、時間の猶予はほとんどなかった。そのため、アナハイム・エレクトロニクス社と地球連邦軍のスタッフの総力を挙げた突貫作業が進められ、実質3ヵ月という驚異的な短期間でVガンダムはロールアウトしたのである。しかし、その製作期間ですらネオ・ジオンの動きに合わせて納期を10日繰り上げた末のことであり、開発陣がいかに無茶なスケジュールを



フィフス・ルナの落下後、アムロがフォン・ブラウンに赴いた際も、νガンダムはまだ建造途中であった



開発中のνガンダム
(上半身)



開発中のνガンダム
(下半身)

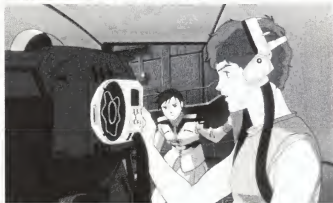
クリアしたかが窺える。それはひとえに、アナハイム・エレクトロニクス社の持つ高度なMS開発技術と、スタッフの熱意によって成しえた結果だったといえよう。

ただし、機体がロールアウトした時点でサイコミュ・システムとサイコ・フレーションの調整が完全ではなかった。そのため、フィン・ファンネルのテストと並行して実戦の中で調整が進められた。

フィフス・ルナの落下後、アムロがフォン・ブラウンに赴いた際も、νガンダムはまだ建造途中であった



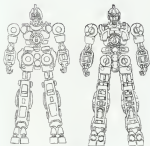
アムロはRX-93のサイコミュ・システムにこだわり、ロールアウト直前に自らフォン・ブラウン工場に向かい調整を行った。



サイコ・フレーム — ニュータイプ専用MSとしての性能を高めた新技術

RX・93 ヴガンダムには「サイコ・フレーム」と呼ばれる新素材が導入されている。これはサイココミュの機能を有する金属粒子大のコンピュータ・チップを封じ込めた（錆込んだ）構造材であり、サイココミュ・システムと連動することで感應波の伝導体として機能する画期的なマテリアルであった。従来のサイココミュ・システムは複雑な構造による大型化が問題視されていたが、サイコ・フレームの使用によって小型化が可能となり、システム自体の効率化も実現できた。ヴガンダムはこの新素材をコクピット周辺のフレームとして配置することで、サイココミュ・システムのレスポンス向上を図っている。

ただし、サイコ・フレームの採用は本機が設計された時点から決まっていたものではなかった。当初は「敵の脳波をサイココミュで受信して反応速度を高める」というアムロの設計思想に基づいてサイココミュ・システム単体の調整が進められていたが、その途中でアナハイム・エレクトロニクス社の材質（材料）開発部門から開発担当の技術部門にサイコ・フレームの情報が流れ、前述のコンセプトに合致するこの素材が急遽取り入れられたのである。



サイコ・フレーム概略図

サイコ・フレイム試料



サイコ・フレイム拡大図



しかも、サイコ・フレイムの導入はロンド・ベルのスタッフに事前通告がないままに行われ、フレイム変更に伴う3kgの機体重量減が知らされたのも組み立て作業も半ばの時点だった。

そのような経緯でリガンダムに導入されたサイコ・フレイムだったが、実際にはアナハイム・エレクトロニクス社独自の技術ではなく、ネオ・ジオンから提供されたものであった。MSN・03 ヤクト・ドーガの開発中に考案されたこの技術は、ネオ・ジオン総帥シヤア・アズナブルの意図によってアナハイム・エレクトロニクス社に流されたという。その理由も、同等の性能を有したMS（サイコ・フレイムはシヤアが搭乗したMSN・04 サザビーにも採用されている）でアムロとの雌雄を決しようとしたシヤアの個人的な願望が元になっていた。

リガンダムの成り立ちには、後述するアムロの動機と、彼との因縁に決着をつけようとしたシヤアの動機というふたつの心理が深く関与していたのである。

そして、サイコ・フレイムはアクシズの攻防戦でリガンダムが引き起こした共鳴現象の核となり、「サイコ・フィールド」と呼ばれる光の帯でアクシズの地球落下を防いでいる。その現象やサイコ・フレイムの機能については未知数の部分が多く、後年に開発が引き継がれてもなお明確な解答は得られていないといわれる。

汎用MSの戦闘力とNT用MSの特殊性の共存

歴代のガンダム・タイプMSのデータの最大平均値を算出し、それをベースに最新技術を反映して設計された結果、Vガンダムは汎用MSとして優れた性能を獲得することになった。アムロは当初からサイコミュ・システムの導入を考慮していたが、AMX-004 キュベレイに代表される公国軍系ニュータイプ専用MSのようにサイコミュ兵器に依存した極端な設計ではなく、あくまでも汎用性を求めた。それぞれの時代で最高峰の技術が投入されたガンダム・タイプMSをベースとすることで、あらゆる局面に対応できるスタンダードな機体を追求したのである。サイコミュ・システムの搭載は、機体の反応

速度の向上が目的のひとつであり、それは汎用MS

という確かな基盤の上に成り立つものであった。その意味では、機体追従性を飛躍的に高めるサイコ・フレームは設計思想に沿うものであったといえる。なお、サイコ・フレームはコクピット周辺だけでなく関節部をはじめとする各駆動制御系にも配置され、レスポンスの向上に役立った。

そのサイコミュ・システムを介して制御される



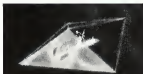
フィン・ファンネル



フィン・ファンネルは、複合パネル構造によるAMBAC機能によって従来のファンネルを凌駕する機動性と稼働時間を獲得していた。また、メガ粒子加速帯も大型化したために火力も向上している（その反面、隠匿性は従来のサイコミュ兵器に劣る）。さらに、開放型のメガ粒子加速帯をIフィールド・ジェネレーターとして転用し、フィン・ファンネルを頂点とする平

面にビーム・バリアを展開することも可能となっている。このバリアに敵のサイコミュ兵器が接触するとサイコ・ウェーブが逆流、端末を制御するパイロットに生理的なダメージを与えた。ちなみに、フィン・ファンネルを装備した際に発生する慣性重心の移動によるプロペラントの消費を抑えるため、独自のプログラムが開発、導入されている。

また、フィン・ファンネル以外の携行用オプション武装は、従来の汎用MSに準じたスタイルが採られている。ビーム・ライフル、ビーム・サーベル、ニュー・ハイパー・バズーカ、ビーム・キャノン内蔵のシールドと、各武装は規格品の弾頭や部材を用いて製作された専用装備で、それぞれが高い信頼性と性能を両立していた。逆に、固定武装は頭部のバルカン砲のみで、機体の軽量化を図るために火器の内装は避けられている。



RX-93を中心としてピラミッド状に展開されたフィン・ファンネル・バリア。ファンネル程度の攻撃であれば完全に防衛した。



実戦においては、NZ-333のファンネルがフィン・ファンネル・バリアに干渉して弾き返されるといった現象も発生している。

未知数の力を発揮したVガンダム

Vガンダムが実戦に投入されたのは、U.C. 0093. 03 初旬（4日から6日の間）のことである。機体の受領を急ぐアムロがアナハイム・エレクトロニクス社のフォン・ブラウン工場を訪れていた際に、ロンド・ベル本隊がネオ・ジオンの攻撃を受けたことから、アムロは本機の調整を中断して出撃を強行。不完全な状態で初めての実戦運用が行われた。

その後、ロンド・ベル隊がネオ・ジオンに対抗する準備を進める中でVガンダムの調整も進められ、核バルスエンジンの点火阻止を目的としたアクシズへの第1次攻撃に参加し、第2波MS隊の中核を担った。しかし、この戦闘ではケーラ・スウを人質に取られて捕獲されかけ、敵機からの高圧電流によるアムロの生命の危機にフィン・ファンネルが反応して窮地を脱している。これは、無意識下の防衛本能がサイコミュ・システムを通して発現、アムロの意図しない形でフィン・ファンネルを制御したものと見られる。

また、アクシズの落下阻止を図った第2次攻撃では、ギユネイ・ガスのMSN・03ヤク



MSN-04との激しい戦闘で武装を失い、最後には四肢を用いた格闘戦で宿敵の機体を行動不能に追い込んだ。



MSN-04 サザビー



MSN-03 ヤクト・ドーガ



ト・ドーガを撃墜すると同時にクエス・エアのNZ-333a・アジールをかわし、友軍から突出してアクシズに接近する。しかし、アムロを待ち受けていたシャアのMSN-04サザビーと交戦状態となり、激しい攻防を繰り広げた。両者はほぼ互角の戦いを演じたが、徐々にリガンダムが優位に立ち、最終的にはマニピュレーターを用いた打撃戦でサザビーを撃破してシャアの脱出ポッドを捕獲している。

しかし、ロンド・ベル隊の破壊工作で分断されたアクシズの後部が地球への落下コースに入り、アムロは落下を食い止めるためにリガンダムでアクシズを押すという行動に出る。そこで、チェーン・アギが運んだサイコ・フレームの試料とリガンダムのサイコ・フレームが共振現象を起こし、サイコ・フィールドと呼ばれる光に包まれたアクシズは地球への落下軌道から離れていった。その後、リガンダムとアムロ、シャアは消息を絶ち、アクシズを押し戻した現象の正体も明らかにされなかった。ただ、オクトバー・サランはチェーン・アギへの手紙の中で、サイコ・フレームの共鳴によって未知数の機能が発現する可能性を示唆しており、リガンダムを媒介としてそれが具現したとも考えられる。

いずれにせよ、リガンダムは「シャアの反乱」でもっとも重要な役割を果たしたMSとして、人々の記憶に残ることになったのである。



地球に落下するアクシズを押し戻そうとするRX-93。その直後、敵味方のMSが同様の行動を見せた。



サイコ・フィールドに包まれたアクシズは軌道を変え、地球から離れていった。その光景は地上からも見ることができたという。

アムロ・レイ — その伝説の終焉

MSK-008
ディジェ



グリプス戦役時、アムロは連邦による軟禁状態に甘んじて過ごしていた。

一年戦争でRX・78・2ガンダムを操り、一介の民間人から伝説的なパイロットへと変貌を遂げた少年アムロ・レイ。戦いの中でニュータイプ能力に目覚めていった彼は、ニュータイプを危険視する地球連邦軍の監視下に置かれ、戦後は軟禁状態に置かれていた。

ジオン公国軍のニュータイプ、ララァ・スンを自ら手で殺してしまったトラウマに苛まれながら鬱屈した日々を送ったアムロだったが、グリプス戦役で復活を果たし、かつての宿敵であるシャア・アズナブルと

再会する。因縁の相手と共闘することで、アムロは徐々に昔の自分を取り戻していった。後にRMS・099リック・ディアスやMSK・008ディジェを駆ってカラバの中核を成すパイロットとして活躍した。

しかし、結果的にシャアは地球連邦政府の腐敗に失望し、地球を汚染することで人々を宇宙に上げ、ニュータイプへの革新を促そうとした。一方でアムロは、いつかは人が変わっていけると信じて体制の中に身を置き、シャアと袂を分かつことになる。



ララァ・スン

そして、ロンド・ベル隊に編入されたアムロは、MS部隊の隊長としてケーラ・スウらパイロットたちを牽引し、その先頭に立って戦いに身を投じた。パイロットとしての技量は衰えておらず、フィフスルナでの攻防戦ではRGZ-91リ・ガズィに搭乗しギユネイ・ガスのMSN-03ヤクト・ドーガを中破させている。

また、νガンダムに乗り換えてからは、ギユネイとクエスの2機を同時に相手取っても動じないだけの強さを見せつけた。そして、対等のMSで雌雄を決することを望んだシャアを壮絶な一騎討ちの末に倒し、パイロットとしてのシャアとのライバル関係に決着を付けたのだった。

その一方で、まったく違う視点から人類の革新という同じ理想を追い求めたシャアとの確執は、シャアの目論見をアムロが阻止しながらもお互いが姿を消すという結末で幕を閉じた。だが、アムロが目指した「世界に人の心の光を見せる」という理想を、アクシズを包んだサイコ・フィールドが具現化していたのなら、彼は身をもって自らの信念を示すとともに伝説に幕を引いたといえるだろう。



アムロレイ(シャアの反乱時)

シャアとの因縁の關係にけりつけるため戦いに身を投じたアムロ。かつての少年は29歳となっていた。

Chapter05：コスモ・バビロニア建国戦争

U.C.0123

0079

0080

0083

0087

0088

0093

0123

0153

コスモ・バビロニア
建国戦争



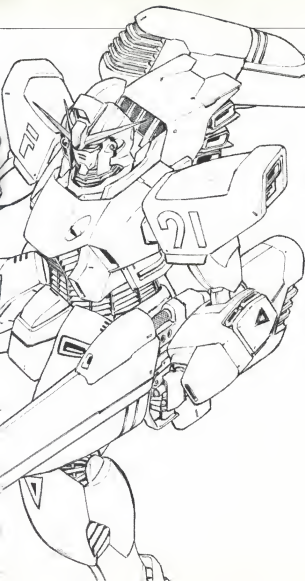
THE LEGEND OF MOBILE SUIT GUNDAM

DATA FILE

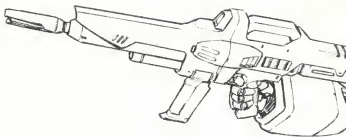
MOVIE

『機動戦士ガンダム F91』

1991年3月18日公開 / 松竹系 / 1時間55分



F91 GUNDAM



小型化と高性能化を両立した
新世代MSの雛形

ガンダム F91

SPEC

全高：15.2m

本体重量：7.9t

ジェネレーター出力：4.250kW

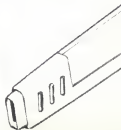
スラスター推力：88,400kg

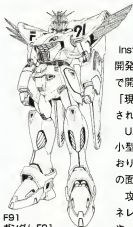
装甲材質：ガンダリウム合金セラミック複合材

武装：ビーム・ライフル、ビーム・ランチャー

ウェスパー×2、ビーム・サーベル×2、ビーム・シールド×2

腕部バルカン砲×2、胸部メガマシンガン×2





F91
ガンダム F91

地球連邦軍傘下の研究機関サナリィ（S.N.R.I.：Strategic Naval Research Institute＝海軍戦略研究所）が、新世代小型MS開発計画「フォーミュラ・プロジェクト（F計画）」で開発した、ガンダム・タイプの試作MS。

「現時点でのMS限界性能の達成」を目標に開発された超高級機、それが「ガンダムF91」である。

U. C. 0090年代以前のMSと比較して大幅な小型化（全高は15m程度）と軽量化を実現しており、出力対重量比やライフサイクルコストなどの面で改善されている。

攻撃力や防御力、操縦性も向上しており、ジェネレーター直結式の高出力メガ粒子砲ヴェスパーや、ビーム・ライフルの直撃も防ぐビーム・シールド、操縦系に採り入れられた支援機構バイオ・コンピューターなどの新型機器の新技术が、機体各所に投入されている。

ただし、カタログスペック上は同時代に運用されていたクロスボーン・バンガードのMSと同等であり、本来の性能はリミッターによって発揮できなくなっている。これは最大出力のF91が、一般のパイロットが扱える機体ではなかったためといわれている。

ただし、カタログスペック上は同時代に運用されていたクロスボーン・バンガードのMSと同等であり、本来の性能はリミッターによって発揮できなくなっている。これは最大出力のF91が、一般のパイロットが扱える機体ではなかったためといわれている。

リミッターはニュータイプと呼ばれるような強力なパイロットが搭乗し、バイオ・コンピューターが最大稼働の必要性を認めた場合にのみ解除される。

リミッターが解除されたF91は、頭部フェイスガードが開放され、各部フィンも最大まで展張されるなど、強制冷却機能をフル活用しなくてはならないほどの高熱状態となる。熱を帯びた装甲表面は剥離蒸散するMEPE（金属剥離効果）が発生するが、これが「質量を持った残像」や「分身」と呼ばれるカモフラージュ効果をもたらすことになった。



MSの恐竜的進化の終焉と小型MSの誕生

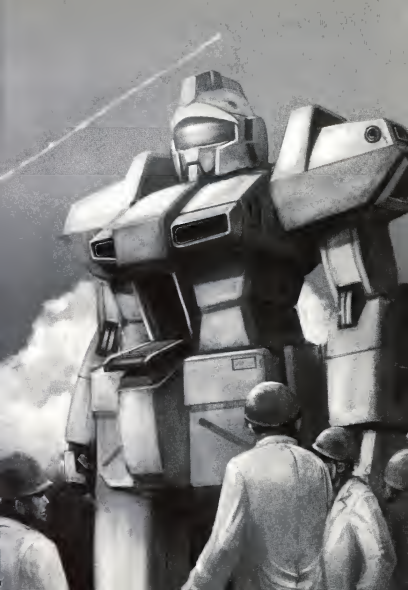
大型化するMSへの懸念

グリップス戦役から第1次ネオ・ジオン戦争で出現した、第3世代MSに当たる可変MSや、第4世代MSに分類されるサイコミュ搭載の重武装MSは、U・C・0080年代後期の戦略／戦術環境において必要とされた機体であった。

しかし、可変機構や多数の高出力メガ粒子砲、一般人用の準サイコミュを含むサイコミュ・システムの搭載は、MSそのものの複雑化と大型化を招くこととなった。つまり、MS単体の生産コストや整備コストの増大だけが問題ではなかったのである。

MSが大型化したのなら、既存の運用艦や施設に収納できなくなる可能性がある。そのため、今度は艦艇や基地施設の改修にコストがかかる——という連鎖が延々と続くのである。このように第3、第4世代MSは運用、維持コストに莫大なコストが必要とされた。

第1次ネオ・ジオン戦争後になると、MSの大型化とそれに伴うトータルコストの増大がいよいよ深刻となり、決戦兵器としての高性能MSの必要性が低下したことも手伝って、地球連邦軍はひとつの方針を打ち出した。それが、MSの「白兵戦用兵器」への回帰である。



運用するMSを、グリプス戦役初期のような第2世代レベルの機体とし、複雑大型化した機体の開発は避けようというものだった。これは旧型機を再使用するのではなく、新機としてシンプルな機体を調達することを意味している。シャア・アズナブルの率いたネオ・ジオンに代表される反地球連邦組織も、大筋でこの方針を採っていた。

しかし、U・C. 0090年代の主力MSであったRGM・89 ジェガンやAMS・119 ギラ・ドーガも全高は20mを超えている。比較的シンプルな機体にサイコミュを搭載したはずのRX・93 ヴガンダムやMSN・03 ヤクト・ドーガも、主力MS以上の機体サイズになってしまい、機体のサイズの大型化を抑えられなかったのである。

新型MSには従来機以上の総合性能が求められるという理由もあったが、それまでの技術系譜に則している以上、MS大型化の連鎖は止まらないのではないかと。といった疑念が浮かびあがるのは自然な流れ



RGM-89J ジェガン B型



RGM-89J ジェガン A型

だった。MSを巡る環境に改善が依然見られなかったU・C・0102、サナリイがある提言を行なった。それこそが、「MSの小型化」である。

初の主力小型MSヘビーガンの誕生と問題

MSの基本フォーマットを強制的に小さくすることで、大型化に伴う問題はほぼ解決される。しかし、それを解消した上で、高性能化との両立が大前提とされた。

U・C・0105、11、地球連邦軍の依頼を受けたアナハイム・エレクトロニク

ス社は小型MSの開発に着手した。軍が求めた小型MSは頭頂高15mクラスの機体だったといわれ、以降の小型MSの大半はこのサイズで開発されている。

しかし、アナハイム・エレクトロニクス社での小型MS開発は難航し、「RGM・109ヘビーガン」がロールアウトしたのは、U・C・0109のことだった。

ヘビーガンはRGM・89ジェガンの後継機で、ジェネレーターを中心に部品の共通化が図られるなど、生産性への配慮を感じさせた。頭頂高15.8mとコンパクトに収めら



RGM-109
ヘビーガン

れ、運動性や機動性にも優れており、小型化に伴うメリットも確認された。

こうして、ジェガン以上の総合評価を獲得したヘビーガンは量産が決定されたものの、残した課題も多かった。極論すると、ヘビーガンは小型化されたジェガンに過ぎず、目標とされた性能には達しなかったのである。量産も、次世代機への橋渡しでしかなかった。

さらにこの時期になると、地球連邦軍内にアナハイム・エレクトロニクス社によるMS開発独占を牽制する動きも見られるようになっていた。そして、軍直轄の研究機関における小型MS開発が推進されることになった。その機関こそ、UC・0090年代には独自の小型MS開発を開始していた、サナリイであった。

サナリイの台頭と「F計画」の推進

地球連邦軍の許可を受け、小型MS開発計画「F計画」を開始したサナリイは、必要最小限の機能のみを持つMSの開発に着手する。

次期主力MSとして開発されたこの小型MSは「F90」と名付けられ、UC・0111・09に1号機がロールアウトする。マイクロハニカム技術による画期的な高強度素材がもたらした軽量性だけでなく、2基の小型改良ジェネレーターにより従来機の1.5倍の出力を獲得していた。その性能はRGM・109ヘビーガンを凌駕するもの

だった。

なお、開発は、かつてホワイトベース隊に所属していたサナリイ幹部のジョブ・ジョンが担当。そのため、F90にはガンダム・タイプMSの意匠を与えられている。

これには、アナハイム・エレクトロニクス社も黙ってはいなかった。各所に張り巡らせた情報網から、「F計画」を事前に察知したアナハイム・エレクトロニクス社は、F90の対抗馬として最大出力と耐弾性に秀でた「MSA・120」を試作していたのだ。そしてU・C・0111.10、F90とMSA・120によって、地球連邦軍次期主力MS選定が行われることになる。

結果は、F90の圧勝であった。F90のパワーウエイトレシオを重視した設計や機動性、運動性は、軍部に高く評価されていた。さらに、MSA・120との模擬戦でも勝利を収めており、その性能に疑う余地はなかったのである。

その後も、サナリイはF90用オプションやF70系列機などの開発および改良、実戦を含むテストを行うと共に、蓄積されたデータを総合した新型MSの開発に着手した。

それが「現時点でのMS限界性能の達成」を目標とした、ガンダムF91であった。



F71 Gキャノン



サナリイ — 地球連邦軍の小型MS開発を牽引した官営MS開発組織

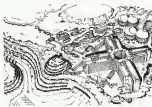
ガンダムF91を開発したサナリイ (S.N.R.I.: Strategic Naval Research Institute = 海軍戦略研究所) は、地球連邦軍所属の研究機関である。

「戦略研究」という名称から判断すると、軍事戦略・戦術理論などの研究機関にも思えるが、実際には兵器開発を主な業務としている。

「F計画」推進時には地球連邦軍傘下のMS開発機関となっていたサナリイだが、当初は軍の諮問機関を務めながら、コロニー公社の下請けを業務とする研究組織に過ぎなかった。これは、サナリイの歴史を遡っていくと、サイド1建設にも携わった宇宙島建設企業連合体に辿り着くことから理解できる。

しかし、「シヤアの反乱」終結直後のU.C. 0093、09、地球連邦軍の諮問機関だった戦略戦術研究所がサナリイへと再編されると、MS開発組織としての色合いを濃くしていった（それ以前から、地球連邦軍宇宙艦隊の戦術研究や、戦術兵器の開発を行っていたともいわれている）。

フロンティア・サイドにも置かれた研究機関サナリイ。





U.C.0150年代初頭のザンスカル戦争においては、サナリイの系譜を継いだ小型MS同士が刃を交えた。

MSを開発していった。
コスモ・バビロニア建国戦争後もMSに関するサナリイによる研究開発は進められ、ザンスカル戦争ではリガ・ミリアの「V計画」や、ザンスカル帝国軍「ベスバ」のMS開発に関与したともいわれている。



サナリイでバイオ・コンピューター開発に務めるモニカ・アノー博士。F91のパイロット、シーブック・アノーの母親。

官営組織とはいっても新進気鋭の風潮があるサナリイは、U.C.0102にMSの小型化を提言する以前から、小型MSに興味を示していたようで、U.C.0090年代に「D・50 Cロト」と呼ばれる全高12m級の可変MSを開発している。
ロトは戦車／兵員輸送車形態への変形機構を持つMSだが、用途や形態があまりに特殊であるうえMSとしての性能が低く、特殊部隊などに配備されたのみであった。
その後、主力MSとしても通用する小型MSの開発に力を注いだサナリイは、バイオ・コンピューターやMCA構造といった新技術を駆使して、F91に代表される高性能な小型



旧式の可変MS「RXR-44 ガンダムR-44」。フロンティアNの戦争博物館にあったもので、シーブックたちも愛用した。

最新技術と蓄積データが育んだF91の戦果

小型高性能を極めたF91の新構造

ガンダムF91には、F90Ⅱに試験導入されていたバイオ・コンピュータ、F90Vで採用された高出力メガ粒子砲ヴェスパーやビーム・シールドなど、F90シリーズで培われた最新テク

クノロジーが投入されている。また、小型化とペイロードを両立するため、当時最新のMS用構造システム「MCA構造」が採用されていた。このことから、「現時点でのMS限界性能の達成」というコンセプトがただの目標でなかったことが理解できる。



背面（ヴェスパーなし）

サナリイ系MSが、クロスボーン・バンガード系MSと同様のジェネレーター外装方式をどの時点から採用したかは不明だが、F91では間違いなく採り入れられている。



F91の内部構造

元々サナリイはMSの小型化に当たり、ジェネレーターの配置を変更した設計案を提示していた。それは、ジェネレーターを横置きから縦置きにするという単純なものだったが、強度維持や伝導装置の配置に大きな困難を伴った。

これを解決したのが、MCA (Multiple Construction Armor = 多機能装甲) 構造である。

MCA構造とは、装甲材でありながら構造材や電送機器などの機能も併せ持つハイブリッド構造のことで、発想としてはサイコ・フレームに近いものといえる。ひとつで複数の機能を持つMCA構造は、機体のコンパクト化や軽量化といった小型MSに必要な要素を満たせるほか、画期的な高密度実装によりジェネレーターの外装化をも可能とした。

強度と軽量化の並立は、背部のメイン・スラスタ・コンプレックスの大推力や推力偏向機能との相乗効果により、高度な機動性を実現したが、そのレベルが常軌を逸していた。

F91のフルパワーは常人がコントロールできるものではなく、リミッターによって性能が制限されている。しかし、ニュータイプに匹敵するほどの能力を持つパイロットが搭乗し、最大稼働が必要と判断された場合のみ、リミッターが解除されるようになっていた。リミッターが解除されると膨大な熱を発生するため、フェイスガードの開放や放熱板の

肩部放熱フィン



頭部 (ヘルメットなし)

展張といった強制冷却機能が稼動する。この際、強制冷却機能のひとつとして、高熱を持った装甲表面が剥離蒸散する「MEEP (Metal Peel off Effect = 金属剥離効果)」が発生する。これもMCA構造の副産物で、剥離蒸散した装甲表面層は、当然ながら質量を持っており、しかも強制放熱は断続的に行われるため、剥離蒸散は複数回に亘って発生する。

このためF91の移動経路には「質量を持った残像」、俗にいう「分身」が発生することになり、センサーだけでなく人間の眼までも欺瞞するのである。

既に述べたように、F91のリミッター解除には条件があるが、それはどのように判断されているのだろうか？ それを担うのが、操縦／管制系に採用されたバイオ・コンピューターである。頭部に搭載されたバイオ・コンピューターは、サイコミュのようにパイロットと機体を文字通り一体化するシステムとなっている。バイオ・コンピューターは、センサー系が捉えた情報をパイロットに直接伝達することができる。光学カメラ



コクピット

が得た情報なら直接目視したのと同じように見え、温度センサーや触覚センサーなら皮膚感覚として感じられるのだ。また、パイロットの記憶や感情の領域にまで踏み込んで判断できるように設定されている。そのため、パイロットが必要としている情報を直感的に提示することも可能であった。

古典と新機軸が交差するハイブリット兵装

胸部に内蔵した大口徑機関砲であるメガマシンキヤノンを除けば、ガンダムF91の基本火器はスタンダードなものだ。それらはビーム・ライフル、ビーム・サーベル、頭部バルカン砲で、RX-78ガンダム以来の地球連邦軍系MSの基本的な兵装といえる。

古典的とも思える兵器構成だが、一般化すること、ということは性能が実証されている証拠でもあり、F91用は主力機のそれと比べて高性能なものであった。



ビーム・ライフル



ビーム・ランチャー



ヴェスパー

もちろん、特殊かつ特徴的な火器も存在する。そのひとつが、背部レールに2門装備されるヴェスパー (V.S.B.R = Variable Speed Beam RIFLE = 可変速ビーム・ライフル) である。

ジェネレーター直結式メガ粒子砲の一種であるヴェスパーは、単なる強力なビーム砲ではなく、高速高貫通力や低速高破壊力といったようにビームの特性を変更することができた。当然、通常のビーム・ライフルと比べて圧倒的に高火力で、一回の射撃で同時に複数のMSを撃墜したこともあった。なお、非使用時にはバックパックの両脇に懸架され、AMBACシステムとしても利用できるなど、単なる火器以上の装備となっている。

他にもオブション火器として、ビーム・ランチャーが用意されていた。

ビーム・ランチャーはEバック式の大型ビーム砲で、形状はMS用バズーカに近い。基本は大型のビーム・ライフルだが、ビーム・ライフルと同じ原理のビームをバルス状に圧縮して発射するもので、一射当たりの破壊力が大きいのが特徴であった。

このようにヴェスパーやビーム・ランチャーは火力を追求した兵装だが、F91では耐弾性も重視した装備も施されている。それが左腕部に装備されたビーム・シールドである (右腰部のホルスターに予備のデバイスを搭載)。

ビーム・シールドは、文字通りビームをシールド状に展開する装置で、実体弾ならビームで焼き潰し、ビーム兵器ならフィールドの斥力で弾くことができる。これらの機能は

旧来の装甲式シールドを大きく超えるものであった。その基本理論はビーム・サーベルと同じで、ビーム・サーベルのビーム刃が面状に形成されたものといえる。Iフィールドが展開されているの

も、ビーム・サーベルのビーム刃形成と同じ理屈である。

このようにビーム・シールドは、ビーム、実弾を問わない防御力を持ち、シールド・ジェネレーターとも呼ばれる発生装置は極めて小型であるため、MSの軽量化や機動性の向上にも一役買っている。

ビーム・シールドはクロスボーン・バンガード系MSの大半に装備されていたが、当時の地球連邦系MSで標準装備していたのはF91程度であり、装備面でも「現時点でのMS限界性能の達成」という目標が達成されていた。

最終兵器「ラフレシア」を葬ったF91の超性能

U.C. 0123. 03. 16、新興コロニー群フロンティア・サイドに、クロスボーン・バンガードを名乗る武装集団が侵攻した。バビロニア建国戦争のはじまりであった。



ビーム・シールド



ビーム・サーベル

当時、ガンダムF91はパイオ・コンピューターの搭載作業が終了した直後で、肝心のパイオ・コンピューターが封印されていた。稼働も叶わず、練習艦スペース・アークに死蔵されていたF91だが、パイオ・コンピューターの開発者モニカ・アノー博士の娘リイズが封印を解除するヒントを提示、稼働状態となった。その後、F91は博士の息子シーブック・アノーに託されることになる。

民間の高校生に過ぎないシーブックだったが、母親が開発したパイオ・コンピューターへの適性を期待され、急速F91に搭乗することになったのだ。

シーブックの操縦で戦場に出たF91は、素人が搭乗したとは思えないほどの戦闘能力を発揮し、クロスボーン・バンガードのMSを次々と撃破していった。



地球連邦軍のMSがクロスボーン・バンガードのMSに惨敗を重ねる中、F91は互角以上の戦いを展開し、その性能を示した。



当時のビーム・ライフルを遠く上回る火力を誇るヴェスパーは、実戦でもビームシールドを貫通して敵機を撃破する威力を見せた。

シーブックが期待以上にパイオ・コンピューターに適応し、またニュータイプの素養を短期間で開花させたこともF91が活躍した理由として挙げられる。しかし、それ以前にF91の高度な基本スペック、ヴェスパーに代表される大火力、そしてパイオ・コンピューターがもたらす操縦性とサポート能力



も重要な要素といえた。

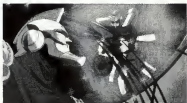
確かにシーブックは、かつてのアムロ・レイやカミーユ・ビダンにも匹敵するニュータイプであったが、F91がなければクロスボーン・バンガードのMSを撃破することは難しかっただろう。なぜならば、クロスボーン・バンガードは、MSの質だけでなく兵員の練度でも地球連邦軍を凌駕していたためである。

経緯はどうあれシーブックとF91の組み合わせは、当時最強といってもいいものであり、それは、鉄仮面[※]こと強化人間カロッゾ・ロナが駆る、XMA-01ラフレシアとの戦闘において

証明されることとなる。戦いの最中、リミッターを解除したシーブックのF91は、金属剥離効果による「分身」を発生。ネオ・サイコミュを搭載したラフレシアと強化人間カロッゾであっても、最大稼働状態のF91を補足できず、ついには撃墜されてしまう。

単独で地球連邦軍艦隊を壊滅させたラフレシアが、たった1機のMSに敗れ去ったのだ。しかも、そのパイロットは10日ほど前まで、普通の高校生だったのである。

こうしてサナリイの技術力と、その結実であるF91の性能は証明され、後のMS開発にも大きな影響を与えることになった。



シーブック・アノーの潜在能力によってリミッターが解除されたF91は、鉄仮面のXMA-01を暴発、撃破している。

スペース・アーク



U. C. 0123のバビロニア建国戦争において、最新鋭機のガンダムF91を運用したスペース・アーク隊は、一年戦争時のホワイトベース隊同様、練度が低い軍人や民間人ばかりの急造部隊だった。クロスボーン・パンガードの奇襲によって正規のクルーが死亡、あるいは逃亡したこと、また、隊の母艦となる巡洋艦スペース・アークが練習艦だったことが、人材不足の一因であった。

フロンティア・サイドへ侵入を続けるクロスボーン・パンガードの前に苦戦を強いられる隊の中で、希望を繋いだのがF91とパイロットを任されたシーブック・アノーであった。

持ち、F91のリミッターを解除するほどの戦闘能力を発揮する。

期待以上のシーブックの活躍がス

ペース・アーク隊の活路を開き、この急造部隊はフロンティア・サイドからの脱出に成功した。

シーブック・アノー



スペース・アーク隊

経験不足の軍人と民間人の寄り合い所帯、F91装備部隊。

第2期MSの最新技術

— MSのコンパクト化と高性能を並存させたテクノロジー —

U・C・0090年代までのMSは、一年戦争時の第1世代MS、ガンダリウムやムーバブル・フレーム、全天周開モニターとリニア・シートなどを搭載した第2世代MS、可変機構採用の第3世代MS、大出力メガ粒子砲とサイコミュを採り入れた第4世代MSなどに分類されている。

世代を経るごとに高性能化したMSだが、第3世代MSや第4世代MSで露になった高コスト化と大型化は無視できない状況に至り、U・C・0100年代に入ると、MSの小型化が提言されるようになった。もちろん、性能を維持、または向上が必須であったさせたいという小型化である。

しかし、小型化と性能維持・向上は相反する要素であり、それまでとはまったく異なるアプローチや技術革新が必要となった。そこで、地球連邦軍所属の研究機関サナリイや新興の複合事業団体ブッホ・コンツェルンの傘下企業であるブッホ・エアロダイナミックスなどでは、小型高性能MS用の新技術を模索しはじめた。



U.C.0120年代初期は小型MSの過渡期であり、地球連邦軍ではサイズの異なるMSが混在したまま運用されていた。



フロンティアの戦闘では、クロスボーン・バンガードのMSに圧倒されるRGM-89が多く見られた。



ビーム・シールド
発生装置
(XM-01 デナン・ゾン)

その結果、改良型ミノフスキー・イオネスコ型核反応炉が完成した。この新型核反応炉は、小型でありながら大幅な出力アップに成功した画期的なパワーユニットだった。

ジェネレーター搭載によるコンパクト化が目指されていた。改良型核反応炉の誕生は、このような新構造による機体のコンパクト化と、高出力化を両立できるものであった。

またサナリイでは、ヤシマ重工から提供されたマイクロハニカム技術により、装甲やフレームの断面積の縮小と強度維持の両立が可能となり、MSの小型高性能化に役立った。

改良型核反応炉の高出力は、ビーム・サーベルの原理を応用したビーム・シールドの実用化にも貢献している。

ビーム・シールドは、ビーム・サーベルのビーム刃を面として展開したもので、実体弾は当然のこと、メガ粒子砲も艦砲クラスの高出力でない限り防御可能である。

しかも、ビーム・サーベル同様に発生装置は極めてコンパクトでデッドウェイト化もしにくい、耐弾性に劣る傾向にある小型MSにとって有効な防御デバイスとなっていた。

これらの新技術によって小型軽量化と高性能化を両立した15m級の小型MSは、旧来の世代分類とは異なる「第2期MS」と呼ばれ、U.C. 0150年代に至っても主力MSとして運用が続けられている。

Chapter06：ザンスカル戦争

U.C.0153

0079

0080

0083

0087

0088

0090

0121

0153

ザンスカル戦争



THE LEGEND OF MOBILE SUIT GUNDAM



DATA FILE

IV

『機動戦士Vガンダム』

1993年4月2日～1994年3月25日/テレビ朝日系/全曜 17時～17時30分/全51話

NDAM

リガ・ミリティアの象徴として誕生した
マルチプルMS

ヴィクトリー・ ガンダム

▼ MOBILE SUIT FILE 13

CREW

機体番号：152

パイロット

リガ・ミリティア 第100機師団

機体カラー：白、赤、青

初登場：ガンダムシリーズ第14作『機動戦士ガンダム』

登場：機動戦士ガンダム 第14話、第15話、第16話

機体設計：大河原邦男、機体デザイン：大河原邦男

機体解説

LM312V04 V GU





LM312V04 ヴィクトリー・ガンダム

「LM312V04 ヴィクトリー・ガンダム (Vガンダム)」は、対ザンスカール帝国用MS開発計画「V (ヴィクトリー) 計画」の中で、神聖軍事同盟リガ・ミリティアが独自に開発したガンダム・タイプMSである。「マルチプルMS」とも呼ばれ、汎用・多用途MSの一種に分類される。

リガ・ミリティアの象徴に相応しい高性能MSで、地球連邦軍の主力MSは当然のこと、ザンスカール帝国軍「ベスバ」の量産機を超える性能を有していた。

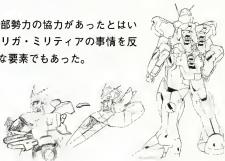
15m級の小型MSでありながら、MSZ-010 ZZガンダムのような合体変形能力と各部の分離運用能力、そしてミノフスキー・フライトによる単独飛行能力

を持っており、運用性に秀でた機体であった。この高度な運用性は、機体各部の配置されたハードポイントと頭部ユニットの一部換装機能、それを介した拡張性により極限まで高められていた。

また、十人程度の人員で整備、運用が可能であるなど、ゲリラ的な運用にも対応したMSでもあり、しかもそれがシステムとして確立されていた点が画期的であった。

これらは、地球連邦軍一部勢力の協力があったとはいえ、市民軍に過ぎなかったリガ・ミリティアの事情を反映したもので、必要不可欠な要素でもあった。

ガンダム・タイプMSとしては珍しく、量産された機体でもあり、シュラク隊などを中心に広く配備され、ザンスカール戦争で活躍している。



宇宙戦国時代の到来

ザンスカール帝国の勃興

コスモ・バビロニア建国戦争への地球連邦政府の対応は、スペースノイドを落胆させた。局地戦レベルの紛争を解決できないところ

か、少数のクロスボーン・パンガードに撃破された地球連邦軍は、軍事力による抑止や事態收拾を行う能力すら持たないことを喧伝したのも同然であった。また、クロスボーン・



フォンセ・カガチ

パンガードの軍事侵攻に対する、地球連邦政府の楽観的な態度も、地球連邦体制自体が機能不全に陥っていることの表れと捉えられた。

この事態に危機感を強めた各コロニーの政庁は、駐留部隊の強化や有事における部隊派遣を求めたものの、地球連邦政府はこれを無視した。

こうして自衛以外の道を断たれた各コロニー



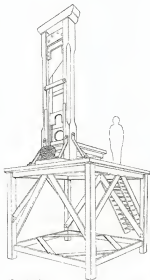
マリア・ピア・アーモニア

は、独自に軍事力の整備を開始。しかも地球連邦政府がこの動きを牽制しなかったため、経済摩擦などを理由として、同一サイド内でのコロニー間戦闘すら発生する「宇宙戦国時代」が到来したのだった。

以前からコントリズム（サイド国家主義）のように、コロニーの集合体であるサイドを独立国家と見做す思想はあった。しかし、宇宙戦国時代ではひとつのコロニーを国家単位と考える「コロニー主義」と、それを背景とする自治権確立運動が顕在化していった。

その渦中、サイド2のアメリア・コロニーで政変が発生する。

フォンセ・カガチを党首とする政治的武闘集団ガチ党が、アメリア政庁の贈収賄首班グループをギロチンで処刑し、アメリアの政権与党となったのである。ガチ党は、慈悲と流血も辞さない浄化、女性社会の復活などを唱えるマリア主義を思想背景とし、急速にアメリア内の支持を集めていく。そしてU・C・0149、アメリア・コロニーにおいてザン



ギロチン台

スカール帝国の建国が宣言された。

ザンスカール帝国は、マリア主義集団マリア教団の教主マリア・ピア・アーモニアを女王としていたが、実権はカガチ党首（首相）を筆頭とするガチ党が握っていた。以降、反对者を弾圧、ギロチンで処刑する恐怖政治を布くと共に、国軍「ベスパ」の整備を急速に推し進めていく。

反ザンスカール帝国組織と リガ・ミティアの再編

ガチ党の政治は、一切の反对者を許さない恐怖政治であった。だが、武断的でありながら清廉なイメージとマリア主義、そして絶大なカリスマ性を持つマリア・ピア・アーモニアによって強い求心力を

持っており、衰える気配を見せなかった。

こうしてガチ党の躍進を続ける中、ザンスカール帝国の建国以前からガ



リガ・ミティアの中心人物であった、
インゼル・エウレン。ウレノの父親。



老人中心のVガンダム運搬部隊「カミオン隊」を率いたオイ・ニュング伯爵。

チ党に危機感を募らせていた有志たちは、U・C・0148、民間ネットワークであった神聖同盟機構を実戦的な組織として再編、再結成した。

それが神聖軍事同盟「リガ・ミリティア」であった。

地球連邦政府や企業、NGOなどから資金提供を受け、民間ネットワークを原型とする縦横の連携を駆使し、組織を拡充したリガ・ミリティアは、ザンスカール帝国が建国されたU・C・0149、新型MS開発を目的とする「V計画」を始動させる。

リガ・ミリティアは地球連邦軍の一部とも通じていたが、当時の地球連邦軍用MSではザンスカール帝国が投入する新鋭MSには対抗できないと判断されていたためである。

また組織の象徴であると共に、反ザンスカール運動の旗頭となる高性能MSを欲していたことも、「V計画」を推進した理由だった。

開発が進められたリガ・ミリティアの象徴となるMSには、ガンダムの意匠が採り入れられた。RX-78ガンダムが誕生してから70年を経たこの時代においても、白いMSの伝説は生きていたのである。

こうして開始された「V計画」は欧州各地の秘密工場に進められ、ザンスカール帝国軍「ベスバ」の地球侵攻が行する中、U.C. 0153、遂にリガ・ミリティアの象徴となるMSが完成したのである。

完成した機体は、ザンスカール帝国との戦いに投入され、各地で高い戦果を挙げた。その後、強化パーツなども開発され、ザンスカール帝国の新型MSに対しても性能面で劣ることなかった。その姿は常に戦場であり、軍事面だけではなく、政治的な面でも敵味方の双方に大きな影響を与えた。こうして、名実ともにリガ・ミリティアの象徴となったのである。



テスト用の2号機はいわゆるガンダムカラーで塗装され、その姿はガンダムそのものだったという「LM111E02 ガンイージ」。特性は異なるものの、Vガンダムを一部で凌駕する性能が与えられた。主兵装のビーム・ライフルだけでなく、火力の高いビーム・バズーカを運用するケースも多かった。

V計画の断点のひとつとなったコリンズ郊外の秘密工場は、林野部に施設が散在し、ザンスカール帝国軍の追及から逃れていた。



リガ・ミリティア

—— ヴィクトリー・タイプの開発と生産に関与した技術者たち

LM312V04 Vガンダムに代表されるリガ・ミリティアのMSは、その開発段階からベスバとの戦闘を前提としていることもあって、地球連邦軍の主力MSを凌駕する性能を有していた。

この時代は、ベスバを除けばMS開発自体が停滞していたにも拘わらず、Vガンダムには合体変形機構やミノフスキー・フライトといった高レベルテクノロジが投入されていた。しかし、民間ネットワークの発展組織に過ぎないリガ・ミリティアが、ベスバのそれを凌駕するほどの高性能MSを独自で開発できるほどの技術力を持つはずはなかった。

なぜ、リガ・ミリティアはかように高性能のMSを開発できたのか？ この疑問に対する解答として最も有力視されているのは、「F計画」に深く関与していた「サナリイ」の元技術者たちがリガ・ミリティアに参加、あるいは協力していたという説である。

実際、欧州でVガンダムの開発と生産にも関与していた、「カミオン隊」のロメロ・マラバルや

ロメロ・マラバル



オーティス・アーキンス

オーティス・アーキンスらは、元サナリイの技師あるいは関係者であったと目されている人物たちであった。

また、Vガンダムのパイロットであるウツソ・エヴィンの母であるミューラ・ミゲルも、「LM314V21 ヴィクトリー2ガンダム(V2ガンダム)」およびミノフスキー・ドライブ開発への関与が囁かれ、サナリイでFシリーズに携わっていたともいわれている(事実彼女は、V2ガンダムの設計図を地球から月にもたらしめている)。

これらはいくまで噂の域を出ない説であるが、U・C・0140年代〜0150年代においては、ベスバを除いて高性能新型MSを開発できた組織はサナリイのほかに見当たらず、従ってサナリイが「V計画」に関与していたのは確実といえる切ってもいいだろう。

また、ベスバの前身がサナリイの一試験部隊だったことも知られており、どの勢力もMS開発のためにサナリイの力を必要としていたのは同じだった。



ミューラ・ミゲル

サナリイ以外にも、アナハイム・エレクトロニクス社がリガ・ミリティア用MSの開発と生産に関与していたといわれ、月がリガ・ミリティアのMS生産拠点の中心になると(V2ガンダムの生産開始時期と思われる)、特に関与を深めたとされる。

MS開発の停滞をを一挙に解消した ヴィクトリー・タイプMSの登場

象徴たるMSVガンダムの開発

「組織の象徴となる高性能MS」に求められるのは、単純に強さだけではない。リガ・ミリティアの組織事情に合致し、かつ高性能でなければならぬのである。

「V計画」の開発陣は、レジスタンス程度の活動しかできなかったリガ・ミリティアの状況を考慮し、少人数で整備運用が可能であること、MS単機で様々な状況に対応できると、容易に性能を拡張できることなどをコンセプトに開発を進めた。その結果完成した機体が、ヴィクトリー・タイプMSの嚆矢となったLM312V04Vガンダムである。

VガンダムはMSZ-010ZZガンダムと同様に合体変形システムを採用し、当然、コア・ブロック・システムも搭



トップ・リム



コア・ファイター



ボトム・リム



トップ・ファイター



ボトム・ファイター

載された。Aパーツのトップ・リム、通称「ハンガー」は腕部と腹部、スカートに変形。Bパーツのコア・ファイターは、胸部と主推進器、頭部を構成。Cパーツのボトム・リムは、通称「ブーツ」は脚部と股間部基部を構成する。

AパーツとBパーツがドッキングしてトップ・ファイターに、BパーツとCパーツでボトム・ファイターとなるのもZガンダムと似た構造だが、有人機はコア・ファイターだけで、トップ・リムやボトム・リムはコア・ファイターから遠隔操作される。

また、トップ・ファイターやボトム・ファイターでも半MS型に変形可能で、合体前の各パーツを「腕、胸像型、脚」に変形させることも可能であった。このような合体変形システムが、高度な運用柔軟性や生存性を実現するのは当然のことで、戦闘中に損傷したパーツの破棄や行動中のVガンダム同士でパーツを融通することまで可能とした。

さらに、大気圏内での運用も想定されていたため、各パーツは単独飛行能力を有する。飛行能力は全翼（リフティング・ボディ）構造による揚力、推進器の



通信機能強化されたバリエーション機 [LM312V06 Vガンダム・ヘキサ]。

動力誘導、そしてミノフスキー・フライト（簡易ミノフスキー・クラフトといえるシステムで、空気の流れを作り出す整流効果を利用し、揚力を発生しやすくするという副次効果も期待できる）によってもたらされたものだ。これらの飛行システムによって、垂直離着陸や超低速飛行、ホバリングなどが可能となり、各パーツのドッキングも容易になった。機体各部のハードポイントも予備兵装を懸架するだけのラッチではない。Vガンダムのハードポイントは、それ自体がターレットとなつてゐるため360度の旋回範囲を持つほか、接続機器を操作するためのI/Oポートやエネルギー・サブライヤーも内蔵していた。

このため、性能拡張用の増加装備の接続は当然のこと、ビーム・ライフルやミサイル・ポッド、ヴェスパーなどを接続し、砲塔のように使用することも可能であつた。

第2期MSならではの標準兵装と強力なオプション武器

「F計画」系MSやクロスボーン・パンガード系MSで決定された第2期MSの基本兵装（ビーム・ライフル、ビーム・サーベル、ビーム・シールド）は、Vガンダムにも継承されている。ただ、こうした基本兵装だけでなく、機体設計や運用状況に合わせた特殊化も図られた。

大きい（変形機構の影響）ため、高い防御性能を誇る。

Vガンダム用ビーム・サーベルの特徴はビーム刃を扇状に展開できることで、防御用としても使用できた。なお、非使用時にはビーム・シールド発生器に内装されている。

Vガンダム用に開発された正規の拡張オプションが、オーバーハング・キャノンである。これはVガンダムの背部に接続する増加



ビーム・ライフル



肩砲ミサイル・ポッド

ビーム・ピストル



る。多用途性や拡張性を追求した結果と考えられ、MS本体と同様の設計思想に基づくものと思われる。

また、ビーム・シールドは両肘に内装されており、極めてコンパクトである。ただし、ビーム・シールド発生器のサイズに反し、広範囲のビーム防壁が展開可能で、発生器基部の可動範囲が

その代表がビーム・ライフルで、ビーム・ピストルを中心にバレルや射撃センサー、Eバックなどを接続することで完成する、システム・ウェポンとなっている。

ビーム・シールド
展開図

ビーム・サーベル

装備で、搭載機は「LM312V04 + SD・VB03A Vダッシュ・ガンダム」と別称が与えられる。2門が搭載されるオーバーハング・キャノン、エネルギー消費こそ激しいものの、Vガンダム用としては最大の火力を有し、対MS用としては当然のこと対艦用としても十分な破壊力を発揮する。なお、オーバーハング・キャノンはコア・ファイターとドッキングすること、コア・ブースターとなる。

ほかにも、腰部ハードポイントに接続する小型のヴェスパーも用意されており、ザンスカール戦争末期には、小型かつ高い攻撃力を持つ兵器として重用された。

なお、専用装備ではないが、太陽発電衛星ハイランドで入手した旧式のビーム・スモートガンと八手ビーム・サーベルを使用することもあった。大型兵器ゆえに取り回しが悪く、連射性能も低かったが、一撃の威力が高いためビーム・ランチャーやビーム・バズーカの代用品として運用された（必要出力の関係でVダッシュでなければ使用できないようだ）。

八手ビーム・サーベルは、複数のビーム刃発生装置を持つビーム・ジャベリンの一種で、ビーム・サーベルと組み合わせたトラップとしての使用例が知られている。



LM312V04+SD-VB03A
Vダッシュ・ガンダム

「ガンダム」の心理的影響と設計以上の性能を発揮した合体変形機構

Vガンダムがはじめて実戦に投入されたのは、ザンスカール戦争中のU・C・0153.04.06のことである。本来予想された投入時期ではなかったが、ベスバによる秘密工場の察知と爆撃の結果、戦闘が行われたためであった。

オニ・ニユング伯爵が指揮を執るカミオン隊が装備した1号機（便宜上のナンバー。パーツごとに生産されるVガンダムは本来、何号機。といった区別はされない）は、

本来のパイロットに代わって、MSへの高い適性を見せた少年ウツソ・エヴィンに任された。

ニュータイプの資質と少年ならではの柔軟な発想を併せ持つウツソと、多様な運用形態を実現したVガンダムの組み合わせは、想定外の戦闘形態を見せた。空中換装は当然のこと、トップ・ファイターやボトム・ファイターが変形



ウツソ・エヴィンは、トップ・ファイターでビーム・シールドを展開したまま戦うなどの柔軟な運用を見せた。



分離したブーツやハンガーを腕によつける戦法は、各モジュールの重量が容易なヴィクトリー・タイプの特性を活かしたものであった。

した半MS状態での戦闘、分離状態のボトム・リムを下半身に変形させての攻撃、切り離れたパーツを使った体当たり攻撃などがそれである。

このような常識を超えた攻撃は、リガ・ミリティアの想定を超えるもので、ベスパ将兵だけでなく味方すらも驚愕させた。

また、複数のVガンダムが同時に運用されるようになると、ほかのコア・ファイターに自機のトップ・リムやボトム・リムを渡すことも可能となり、戦闘での柔軟性にも広がりを見せるようになった。

ガンダムとしての意匠も、Vガンダム自体の高性能と相まって少なからぬ影響があり、スバ側に認知され、脅威と見做されるようになった。

「白いMS」「ガンダム」としてベ



ガンダール隊との戦闘では、ボトム・ファイターの状態からMSに変形して脚部にマウントしたビーム・ライフルで戦っている。



ビーム・シールドを後方に展開して武器として転用し、背後から攻撃してきた敵機の脚部を切断するVガンダム。



ウツソ・エヴァン



V21 V2 GUNDAM

新たなリガ・ミリティアの象徴
「光の翼」を持ったガンダム

ヴィクトリー2ガンダム

MOBILE SUIT FILE. 14

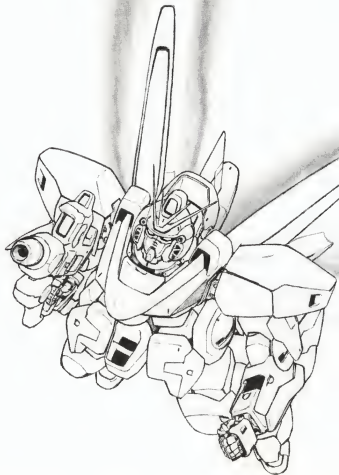


CRASH

全高：15.5m
本体重量：11.5t（全機重量：15.9t）
ニューレター出力：7,510kW
スラスター推力：ミノフスキー・ドライブ×2+06,730kg
装甲材質：ガンタリウム合金スーパーセラミック複合材
武装：ビーム・ライフル（ビーム・ピストル併用）、
マルチプル・ランチャー（ビーム・ライフルに付属）
メガ・ビーム・ライフル
ビーム・サーベル×4、ビーム・バスター
ビーム・シールド×2、頭部Vレガン2×2

機体解説

LM314





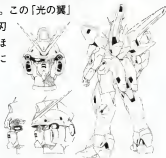
「LM314V21 ヴィクトリー-2ガンダム(V2ガンダム)」は、前身となったLM312V04 Vガンダムの発展型である。合体変形能力や分離運用能力、単独飛行能力やハードポイントによる拡張性などのマルチプルMSとしての機能・総合性能は、Vガンダムと同等以上であり、MSとしての完成度はさらなる向上が図られた。

通常の兵装や装備形態は基本的に同じだが、ビーム・ライフルは大型化、マルチプル・ランチャーも増設されている（ビーム・ピストルを中心としたアッセンブリー構造そのものに変更はない）。

LM314V21 ヴィクトリー-2ガンダム V2ガンダム最大の特徴となっている装備が新型推進システム「ミノフスキー・ドライブ」である。このシステムは、ミノフスキー物理学を応用した推進システムの一つで、その加速力は20Gにまで到達していた。理論上ではあるが、亜光速までの加速が可能とされていたことから、既存のMSを遥かに凌駕する高機動性を有していたことが伺い知れる。

ミノフスキー・ドライブは稼働時の副産物として、全長1kmにも達する「光の翼」をすることでも知られている。この「光の翼」はビーム・サーベルが発生するビーム刃や、ビーム・シールドのビーム障壁とほぼ同じ特性を持っており、攻撃や防御にも転用できた。

「光の翼」を展開し戦場を駆け抜けたV2ガンダムは、リガ・ミリティアの新たな象徴として敵味方に認知され、ザンスカール戦争末期の戦いで重要な役割を担うことになった。



新たな象徴となるV2ガンダムの開発

ミノフスキー物理学を応用した新型推進器ミノフスキー・ドライブは、元々LM312 V04 Vガンダムの強化パーツとして開発されていた。しかし、Vガンダムではその性能を活かせなかったため、ミノフスキー・ドライブを固定装備する新型MS、LM314 V21 ヴィクトリー2ガンダム(V2ガンダム)が開発されることとなったのである。

トップ・リム、コア・ファイター、ボトム・リムで構成される合体変形機構、機体各部に設置された拡張用のハードポイント、そしてガンダムの意匠などは、Vガンダムとの差はほとんどないように見受けられる。その理由として、Vガンダムの高い完成度や生産設備の流用、そして機種転換が容易になるといったことが想定されたと考えられる。

V2ガンダムは、かつてのMSZ-010 ZZガンダムを超えるジェネレーター出力と、強力なオプシオン装備の運用能力を有していた。さらに既存の推進器をはるかに上回るミノフスキー・ドライブを装備しており、その性能は別次元といっても過言ではなかった。

特にミノフスキー・ドライブは、理論上亜光速までの加速が可能という代物であり、スベック上でも最大20Gの機動が確約されている。U.C.0150年代における最高のMS用推進システムといっても過言ではないほどの機動性を発揮した。

V2ガンダムのミノフスキー・ドライブは、ドライブ・ユニット間にフィールドを発生

させ、その反発力を推進力として利用する。フィールドの形を変化させることで任意の方向に反発力を得られるため、偏向推進器としても機能した。

また、副次効果として最大全長1kmに達するビーム、通称「光の翼」が発生。これはビーム・サーベルのビーム刃や、ビーム・シールドのビーム障壁とほぼ同じ性質を持つため、ミノフスキー・ドライブは攻撃機構や防御装備としての機能も併せ持つことになった。

このように、V2ガンダムの最強性に疑う余地はなく、リガ・ミリティアの新たな象徴として、また「ガンダム」の名を冠するに相応しいMSであることは間違いない。

強力無比なV2ガンダム用増加パーツ

LM314V21 V2ガンダムの専用兵器システムは、強化パーツとして提供される。

攻撃力重視のバスター・パーツを装備した形態は「LM314V23 V2バスター・ガンダム」と呼ばれる。艦艇のビーム・シールドをも貫通する長距離攻撃用のメガ・ビーム・キャノン、拡散メガ粒子砲の一種であるスプレー・ビーム・ポッド、下半身に計6基

コア・ファイター



トップ・ファイター



ボトム・ファイター





を搭載するマイクロ・ミサイル・ポッドなどにより、U・C.
153年次における最大の火力を獲得した。

防御重視のオブションがアサルト・パーツで、装備形態は「LM
314V24 V2アサルト・ガンダム」と呼称される。Iフィールド・
ジェネレーターや、エリアレベルの広域ビーム障壁を発生させるメガ・
ビーム・シールドを装備し、絶対的な防御力を有していた。また、メ
ガ・ビーム・ライフルと腰部両脇に2門のヴェスパーが追加装備される
ほか、メガ・ビーム・シールドにメガ・ビーム砲も搭載され、防御だけ
でなく戦闘能力も向上している。

なお、アサルト・パーツとバスター・パーツは同時装備も可能で、攻防の双方で最大の性能を
発揮する形態が「V2アサルト・バスター・ガンダム」である。

「光の翼」で戦場を制した超性能

U・C. 0153. 05、リオンホース隊に2機のLM
314V21 V2ガンダムが配備された。だが、V2ガン
ダム用コア・ファイター1機が失われたため、事実上の



LM314V23 V2バスター・ガンダム

メガ・ビーム・シールド

ビーム・ライフル

メガ・ビーム・ライフル



ウツソ・エヴィン専用機として運用された。実戦に投入されたV2ガンダムは、Vガンダムと同等の柔軟な運用性を見せたが、機体の持つポテンシャルはそれ以上の活躍を可能とした。

特にミノフスキー・ドライブの副次効果である「光の翼」

は、攻撃手段や広域防御用として活用された。攻撃面では大型ビーム・サーベルとして使用されることも多く、堅牢で知られたアインラッドすら、一撃で両断するほどの威力を見せた。防御面では、メガ・ビーム・シールドのような広域防御機構として利用された。大出力ビーム砲ザンネック・キャノンや「光の翼」で防いだほか、エンジェル・ハイロウ内部の最終決戦では「光の翼」を肘のビーム・シールド発生器で取り込み、防御に活用している。

ザンスカール戦争の終盤、エンジェル・ハイロウを巡る戦闘で使用されたアサルト・パーツやバスター・パーツも、ベスパ防衛部隊にその威力を見せ付けている。だが、ミノフスキー・ドライブとヴィクトリー・タイプならではの運用性、そして多彩なギミックを使いこなしたパイロット、ウツソの存在こそ、V2ガンダムの最強性を支えた要因であった。



LM314V24 V2アサルト・ガンダム



LM314V23V/24
V2アサルト・バスター・ガンダム

機動戦士ガンダム ガンダム最強伝説

平成21年7月2日初版第1刷発行

■編著

MEGALOMANIA：高村泰隆／杉山和繁／坂口徳仁

■デザイン

石橋成哲

■カラーイラスト

天神英貴：表紙・ピンナップ

K2商会：ピンナップ

■モノクロイラスト

木下ともたけ：14、66、70、78、100、114、128、148、168、188、196、224、250、268
和田淳：30、42、57、61、81、90、103、121、139、151、159、165、181、191、199、215、
218、228、233、243、267、273

■協力

株式会社サンライズ

発行人 高橋一平

発行所 株式会社竹書房

〒102-0072 東京都千代田区飯田橋2-7-3

電話 03-3264-1576（代表）

03-3234-6244（編集）

振替 00170-2-179210

竹書房ホームページ <http://www.takeshobo.co.jp>

印刷・製本 国書印刷株式会社

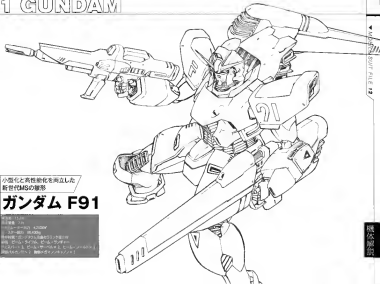
- 定価はカバーに表示してあります。
- 乱丁・落丁の場合はお取り替えいたします。
- 本書は品質保持のため、予告なく変更や訂正を加える場合があります。
- 無断転載は禁止されています。

ISBN978-4-8124-3868-8 C0176

Printed in Japan

© 編著・サンライズ

F91 GUNDAM



小型化と高性能化を両立した
新世代MSの雛形

ガンダム F91

機体番号: F91-001

全高: 17.0m

全長: 20.0m

全幅: 18.0m

全幅(腕広げ): 20.0m

全幅(脚広げ): 20.0m

全幅(脚広げ): 20.0m

全幅(脚広げ): 20.0m

ガンダム

身長 18.0m

重量 70.0t

一時的出力 1.2MW

一時的出力 10.0MW

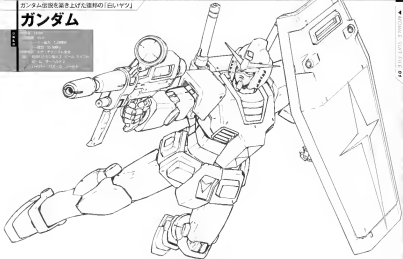
機体色 白・青・赤・黄・黒

開発 新日本重工 機体 2 型 1706

開発 新日本重工 機体 2 型 1706

開発 新日本重工 機体 2 型 1706

開発 新日本重工 機体 2 型 1706



RX-78GP01

RX-78の設計思想を前編した
多用途・白兵戦用の試作1号機

ガンダム試作1号機 ゼフィランサス

機体番号 RX-78

機体重量 27.5t

全高・全幅・全長 17.0m・5.0m・10.0m

全高・全幅・全長 17.0m・5.0m・10.0m

全高・全幅・全長 17.0m・5.0m・10.0m

全高・全幅・全長 17.0m・5.0m・10.0m

全高・全幅・全長 17.0m・5.0m・10.0m

全高・全幅・全長 17.0m・5.0m・10.0m



RX-78GP02A GUNDAM PHYSALIS

RX-78の設計思想を継承した
多用途・白刃戦用の試作1号機

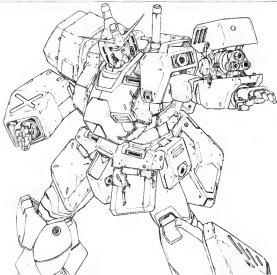
ガンダム試作2号機 サイサリス

機名: RX-78
機高: 18.5m
機重: 10,000kg
主武装: ガンダム・マイン・ミサイル
副武装: ガンダム・マイン・ミサイル
開発: 地球連邦軍
開発元: 地球連邦軍



アムロ・レイのために開発された
ニュータイプ仕様の試作機

アレックス



機体番号

機体色

機体高

機体重

機体全長

機体幅

機体重量

機体全高

機体全重

機体全幅

機体全重

機体全幅

機体全重

機体全幅

機体全重

機体全幅

機体全重

機体全幅

機体全重

機体全幅

機体全重

機体全幅

機体全重

機体全幅

機体全重

機体全幅

機体全重

機体全幅

機体全重

機体全幅

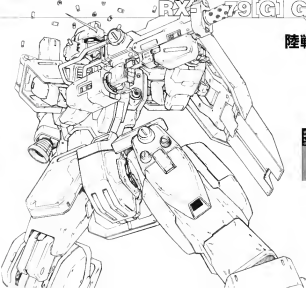
機体全重

機体全幅

機体全重

機体全幅

陸戦型ガンダム

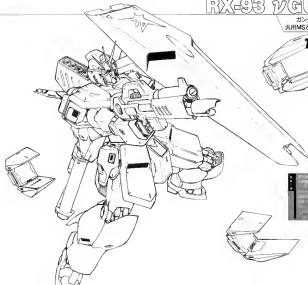


機体番号	15551
全高	17.0m (伸縮脚時17.5m)
全幅	1.5m (腕広がり時1.85m)
重量	12,000kg
推進力	2基×ハイパースティック
出力	9000W (伸縮脚時、10000W (伸縮脚時))
燃料	ハイパー燃料、2基×ハイパースティック
センサー	1基×ハイパースティック
武器	1基×ハイパースティック、伸縮脚時、伸縮脚時
機体カラー	ガンダム

RX-93 ヴガンダム

ガンダムタイプMSを導いた
汎用MSとニュータイプ専用機の融合

νガンダム



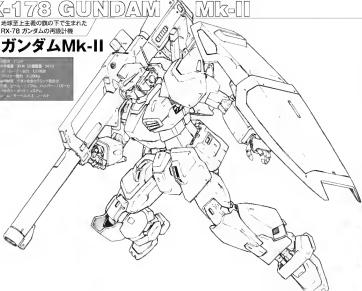
全高	21.5m
全幅	21.4m
重量	17,000kg
推進力	2,100馬力
武装	ビームサーフ、ビームガン、ビームマイン、ビームクロー、ビームスピア、ビームシールド、ビームリフレクター、ビームリフレクター、ビームリフレクター
特殊能力	ニュータイプ専用機

RX-178 GUNDAM Mk-II

地球上主義の旗の下で生まれた
RX-78 ガンダムの再設計機

ガンダムMk-II

機体番号: 178
機体重量: 25.4t (空機重量: 24.1t)
全高: 17.8m (全機高: 18.0m)
全幅: 11.0m (全幅: 11.0m)
全幅: 11.0m (全幅: 11.0m)
全幅: 11.0m (全幅: 11.0m)
全幅: 11.0m (全幅: 11.0m)
全幅: 11.0m (全幅: 11.0m)



LM312V04 V GUNDAM

リガ・マリティアの像として誕生した
マルチブルMS

ヴィクトリー・ガンダム



新たなリガ・ミリティアの敵
「光の國」を捕ったガンダム

ヴィクトリー2ガンダム

[illegible]

MSZ-006 Z GUNDAM

「ダブルス統合最高傑作」と称され
エゥーゴの象徴となった可変型ガンダム

Zガンダム

機体番号 MSZ-006

全長 25.5m

全高 17.5m（変形時 15.0m）

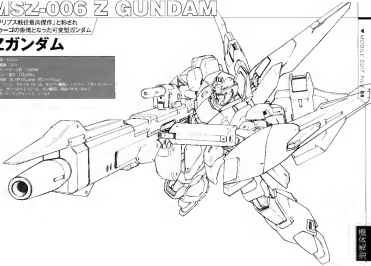
全幅 10.0m（変形時 11.0m）

機体重量 24,000kg（標準）27,000kg（フル武装時）

主武装 シールド、光束刀、光束拳銃、光束バズーカ、光束ライフル、光束マシンガン

副武装 光束バズーカ、光束ライフル、光束マシンガン、光束拳銃

特殊能力 シールド、光束バズーカ、光束ライフル



竹書房文庫

機動戦士ガンダムの本

機動戦士ガンダム モビルスーツ開発秘録

MEGALOMANIA 編著

敵軍を震撼させる最強のモビルスーツ「ガンダム」
なぜ、ガンダムは生まれたのか？
いかにして、戦い抜いたのか？
その称号は何故継承され続けたのか？
宇宙世紀を席巻したガンダムの伝説の「深層」に
リアルな視点で迫る究極の兵器読本がついに完成!!

MOBILE SUIT GUNDAM

機動戦士ガンダム

U.C.0079-0153

ガンダム最強伝説

THE LEGEND OF MOBILE SUIT GUNDAM

WEXAL/MANA 編著

角川文庫

Takeshima

X1-1

機動戦士ガンダム

ガンダム
RX

最強伝説

MEGALOMANIA

編著 竹書房文庫

機動戦士ガンダム

THE LEGEND OF
MOBILE SUIT GUNDAM

U.C.0079-0153

ガンダム最強伝説

MEGALOMANIA 編著



ガンダム の常識が
ここに!!

最強の称号「ガンダム」の系譜

伝説の称号を与えられたガンダムの最強神話
その誕生から開発、運用に至るまでを完全解説
U.C.を駆けたガンダムの系譜を徹底検証する「兵器読本」

描き下し
イラスト
39点
収録!!





ISBN978-4-8124-3868-8

C0176 ¥667E

定価 本体667円+税



THE LEGEND OF MOBILE SUIT GUNDAM

一年戦争も後半に差し掛かった宇宙世紀0079.09.18、地球圏の片隅にあるスペースコロニー「サイド7」において、恐るべき兵器が初陣を迎えた。

「RX-78-2 ガンダム」——それが、その兵器の名前であった。

実戦に投入されたガンダムは目覚ましい戦績とともに、劣勢にあえぐ地球連邦軍に勝利をもたらした。戦争を勝利へと導いた「ガンダム」の称号はその伝説とともに受け継がれ、数多の「ガンダム」が宇宙世紀を駆け抜けた。

ガンダムはいかにして生まれ、どう戦ったのか？

そして、何故その称号は継承され続けたのか？

本書では、ガンダムを「兵器」としての視点で徹底検証。誕生の時代背景から、

開発と運用の歴史に迫るとともに、その機体として、その兵器としての完全の解説を

最強の称号を与えられ、
U.C.を駆け抜けた全「ガンダム」を
完全収録したヴィジュアル兵器読本

「RX-78-2ガンダム」「RX-79[G] 陸戦型ガンダム」

「RX-78 NT-1 アレックス」「RX-78GP01 ガンダム試作1号機」

「MSZ-006 Zガンダム」「MSZ-010 ZZガンダム」「RX-93 νガンダム」

「F-91 ガンダムF91」「LM312V04 ヴィクトリーガンダム」——etc.

豪華イラストレーター陣：天神英貴・K2商会・木下ともたけ・和田淳

×1-1

機動戦士ガンダム

Rガンダム
X

最強伝説



ガンダム最強伝説を徹底検証
究極の「ガンダム」兵器読本

竹書房文庫

機動戦士ガンダム

THE LEGEND OF
MOBILE SUIT GUNDAM

U.C.0079-0153

ガンダム最強伝説

MEGALOMANIA 編著





ISBN978-4-8124-3868-8

C0176 ¥667E

定価 本体667円+税



THE LEGEND OF MOBILE SUIT GUNDAM

一年戦争も後半に差し掛かった宇宙世紀0079.09.18、地球圏の片隅にあるスペースコロニー「サイド7」において、恐るべき兵器が初陣を迎えた。

「RX-78-2 ガンダム」——それが、その兵器の名前であった。

実戦に投入されたガンダムは目覚ましい戦績とともに、劣勢にあえぐ地球連邦軍に勝利をもたらした。戦争を勝利へと導いた「ガンダム」の称号はその伝説とともに受け継がれ、数多の「ガンダム」が宇宙世紀を駆け抜けた。

ガンダムはいかにして生まれ、どう戦ったのか？

そして、何故その称号は継承され続けたのか？

本書では、ガンダムを「兵器」としての視点で徹底検証。誕生の時代背景から、開発と運用の歴史に至るまでを、本書描き下しイラストとともに完全収録する。
究極のガンダム読本がついに誕生!!

X1-1

機動戦士ガンダム

RX ガンダム

最強伝説



MEGALOMANIA 編輯

竹書房文庫